

勇者の記録

永谷河

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「バーテックス」

天の神が遣わせた人類を抹殺する化物である。

西暦で、神世紀でバーテックス相手に戦った少女たち。彼女達は「勇者」と呼ばれた。この物語は人類最後の希望として西暦と神世紀を戦い抜いた勇者たちの物語である。

目次

第一章 乃木若葉は勇者である 山田悠

岐の章

2015年7月30日 審判の日

1

2015年8月7日 舞鶴にて

16

2015年8月8日 舞鶴にて 2

32

2015年8月15～31日 明石海

峡への道のり 46

2015年8月31日 明石海峡大橋

を突破せよ 63

諏訪と四国と勇者 78

勇者と覚悟 91

戦いの始まり 104

戦いの始まり 2 119

千尋と私と約束と 134

千景と勇者 148

バーテックスとうどん 162

勇者たちの休息 177

戦う理由 193

みんなの力 208

決戦前夜 225

決戦、丸亀城 240

決戦、丸亀城 2 263

結界外へ

—

281

託された思い

—

297

帰還

—

306

山田悠岐の章 閑話

閑話 みんなでソフトボール!

1

318

第一章 乃木若葉は勇者である 山田悠岐の章

2015年7月30日 審判の日

―未来は決まったものではない。運命は自らが築いていくものだ。少なくとも私はそう信じている―

2018年7月30日 12時00分

山田悠岐は明石海峡大橋の主塔の上から荒廃した本州を見ていた。約300mの高さからは明石市だけでなく、神戸市、大阪の方まで見渡すことができる。人間の活動が失われたことで大気は不自然なほど透き通っていた。

「生存者はいないか…」

自衛隊の人から借りた高性能な双眼鏡を除くと、そこには荒廃した大地が広がっていた。つい3年前まで活気に満ち溢れていた街とは思えない荒廃ぶりだった。この光景を見ることができるのは京阪神地区だけではない。きっと世界中で見ることができよう。光景であろう。

四国にいる人間ならだれでも思い出すことができるだろう。3年前のあの日、人類が経験した絶望と屈辱を。

あれは忘れもしない真夏の出来事だ。今日と同じ真夏の快晴の日だった…

2015年7月30日 20時00分

当時中学1年生だった山田悠岐は、家の近くの小学校に避難していた。中学校に入学した4月から3ヶ月が経過し、難しくなった勉強や部活動に慣れてきたころだった。ちょうど定期試験も終わり、夏休みを満喫している最中だったが、その日は朝から世界中で同時多発的に災害が発生し大混乱に陥っていた。地元である京都府京都市も震度6クラスの地震に見舞われ、近くの小学校に避難していた。

京都で大きな地震が発生することは稀であり、家でゲームをしていた悠岐は驚いた。すぐに避難先の小学校に避難したものの夜になるまで余震が続き、揺れに襲われるたびに体育館からは悲鳴が上がるが、幸い倒壊するほどの揺れではなかった。あたりを見渡すと、クラスメイトが家族と身を寄せ合いながら避難している姿が目に入った。

「お父さんは大丈夫かな…」

悠岐の父親は舞鶴の海上自衛隊で護衛艦に乗っている。詳しいことは知らないが、基祭などで立派な制服を着た自衛官の人から敬礼されていたところを見ると相当地位が高い人だと思っていた。

母親は専業主婦であったが、所用で朝から大阪に行っており避難所に一人で過ごすことになっていた。

災害の影響で電話がまったく通じないため、両親の安否がわからなかった。父親は間違ひなく安全だと思いが、母親はどうなっているのか全く分からなかった。

「悠岐！大丈夫だった？」

悠岐が一人でスマホをいじっていると後ろから声がかけられた。

彼女が振り返って顔を見ると、心配そうな顔をしたクラスメイトがいた。

「何だ、千尋か…」

悠岐はソフトボール部に所属していたが、不運なことに彼女のクラスには同じ部活のクラスメイトがおらず、本人の生真面目さやスポーツバカっぷりも相まって、友人があまり多くなかった。その中で秋山千尋は悠岐の数少ない友人だった。

「今、SNS見てるんだけど、京都だけじゃなくて世界中で地震とか起きてるらしいよ」「私もネットニュースで見ただけどひどいみたいだね」

「日本は災害に強い国だからこれぐらいの被害で収まっているけど、海外はもつとひどいみたいだね…」

千尋が見せてきたスマホの画面には倒壊した超高層ビル群が映っていた。

「早く収まるといいなあ…」

「そうね」

悠岐は適当な返事をしながら、スマホをいじるのをやめた。

「それよりも昨日の野球みた？」

「みたみた！檻の球団には頑張ってほしいよねえ…」

バリバリの運動少女である悠岐と、ギャルっぽい千尋が仲良くなった理由は、二人の趣味がスポーツ観戦、それも野球観戦が趣味だったからだ。

悠岐はチーム応援というよりは選手が好きで応援しているタイプの間だったが、千尋は彼女と同名の選手がいた大阪の球団を熱心に応援していた。

友人関係も5年生の時に彼女が香川から悠岐のクラスに転校してきてからの付き合いだった。家も近所だったためすぐに仲良くなった。

「優勝候補オリックス ボソ」

「今度バッセンで130kmをヘディングさせるわよ」

ただの死球である。普通に痛い。

「すいません」

「よろしい」

二人が会話を繰り返していると、悠岐のスマホが鳴り響く。

「ん？誰からだろ」

画面を見ると非通知設定の番号であった。

普段なら非通知設定の番号は無視するのだが、状況が状況だけにすぐに通話を開始し

た。

『悠岐か?』

これの主は父親だった。無駄にいい声であるため忘れるわけがない声だった。

『お父さん! そっちは大丈夫なの!?!』

『大丈夫だ。今舞鶴にいる。そっちは?』

『私は大丈夫。でも電話がつながらなくて...』

そもそも中継局? が機能していないのか、つながりもしなかった。父はどのような手段を使ったのだろうか。

『自衛隊の電話を使っている。悠岐は無事で安心したよ。お母さんは?』

『お母さんは今朝から大阪の方に行っちゃたよ。電話もつながらないし...』

『わかった...お父さんの方から連絡を取ってみる。いいか、そのまま避難所で過ごしておきなさい。もう自衛隊や消防がいろいろ動いているからな』

『わかった。お父さんも気を付けてね』

『心配いららないよ。すぐに会えるようにお父さんも頑張るから。あまり長い時間電話できないからね。お母さんと連絡取れたらまた電話するよ』

そういつて父の電話は途切れた。この辺は父親が自衛隊でよかつたと思えるところだった。

「お父さん?」

「うん。なんか自衛隊の電話を使ったみたい」

「さすがだね〜」

取り敢えず父親の安否がわかっただけでも安心できる。たぶん母親も元気で避難していることだろう。

地震が起きてからずっと体育館の隅で座っていたせいか体がカチカチになっていたこともあり、外の空気を吸いたくなっていた。公立の小学校の体育館にエアコンがあるわけもなく、熱気のコもった熱中症になりそうだった。

「ちよつと外に出てくるよ。このままだと熱中症になっちゃう」

「私もついていくよ。確かに暑いからね。それに余震も少し収まってきたし」

千尋も暑さと退屈さでストレスがたまっていたらしく、悠岐の提案にのった。

二人は外に出て校庭の方へ歩いていく。すでに夜であったが雲一つない夜空だった。電気が止まっていることもあり、美しい星空が広がっていた。

「きれ〜い!おばあちゃんの家があるところみたい!」

「確か…四国の方だったか?」

「うん。香川県の山奥」

香川県といえばうどんである。悠岐は京都のラーメン(京都ラーメンという薄口の

お上品なラーメンをイメージするが、脂が浮かぶくらいのこつてりと濃厚なスープが特徴なラーメンである）が大好きだったが、その話を千尋にするとどうどん・ラーメン戦争がいつも起きる。野球、政治、宗教そして麺類の議論はいつも戦争が生まれるのである。話しながら校庭を散歩していると突然大きな揺れが二人を襲った。今日起きた地震の何倍も激しい揺れであった。立っていることもままならず、思わず座り込んでしまった。隣にいる千尋も四つん這いになって揺れに耐えていた。揺れは一分ほど続き、次第に収まっていった。

「すごい揺れだったね。震度7あったかも…」

千尋が服についた砂を払いながらいまだに腰を抜かしたままの悠岐に手を差し伸べる。

一方の悠岐は、得も言われぬ不気味な感覚に襲われていた。

「気持ち…悪い…」

突然襲ってきた吐き気と不快感を口に手をやりながら我慢する。しかし腕には不気味なほど鳥肌が立ち、真夏の暑い夜であるのにもかかわらず、悪寒と冷や汗が止まらない。一瞬何かの病気を疑ったが、本能がそうではないと告げている。

「悠岐、あれ見て…」

友人が指をさす方向は満点の星空だった。

(あれは、星?)

それはシロアリの如く夜空をうごめく「何か」だった。鳥でも、飛行機でもない。目の錯覚でもなかった。

しばらく呆然と見つめていると「何か」は大きくなっていた。

(大きく? 違う! あれは…)

「空から降ってくる!!」

悠岐が叫んだ瞬間、校庭に不気味な「何か」が降り注いだ。校庭に止めてあった消防の車を押しつぶして現れた「何か」は、真っ白な生き物のようなものだった。生き物とは思えないほど白く、巨大で、巨大な歯をむき出しにした口のような器官をもっていた。茶色いあいつよりましではあるが、生理的に不快感を覚える「何か」は外で作業を行っていた消防や警察の人たちをかみ砕き、その白い肌を鮮血に染めながら暴れまわっていた。

「なによ、あれ…」

千尋が呆然と目の前の光景を見ていた。周りを見渡すと体育館や教室を食い破りながら侵入する「何か」と共に悲鳴や怒号が響き渡る。それと同時に悠岐の足は動き出していた。

「千尋! ついてきて」

悠岐は友人の手をつかむと返事も言わせぬまま校門へ走り出した。しかし校門付近には「何か」が蠢いており、突破するのは不可能だった。

「出口だったら第三出口があるよ！そっちに行こう！」

悠岐がどうしようか悩んでいると千尋が提案をする。その声は不安と焦りが混じっていたいが、恐怖で我を忘れてはいなかった。二人はこの小学校出身だったこともあり、学校の構造には詳しくかった。第三出口は普段と閉じられている出口だったが行事の時や災害時に解放される出口だった。あそこは狭いうえ、建物の陰に隠れているため白い化物に見つからないだろう。

建物の陰に隠れながら出口に向かうとそこには「何か」はいなかった。そのまま外に出ると道路に白い影が見えたため、すぐに近くの家の庭に隠れる。

「このままどうするの!？」

少なくとも打開案はなかった。「何か」は容赦なく人や建物を破壊していた。あの怪物を倒せるのは父の所属している自衛隊や軍隊ぐらいだろう。どこかに隠れてやり過ぎるのが賢い選択肢だった。幸いすぐ避難先の小学校の近くには神社と古墳があり林もあった。そこに逃げ込めばしばらくは姿を隠せるはずである。

「神社の方へ行こう！」

悠岐の提案に千尋も賛同し、二人はすぐに神社のある丘へと向かう。隠れながら行動

したため普通なら10分で着く場所にある神社に30分以上もかかった。

神社につくと、社務所が破壊されていたが、本殿は破壊されていなかった。

「とりあえず神社の奥の方で隠れておこう」

本殿前の広場から本殿へ足を進めた瞬間、空から白いモノが落ちてきた。地響きを挙げて落ちてきた「何か」は二人をかみ砕こうと、猛烈な勢いで突進と仕掛けてきた。

「危ない!」

悠岐は化物から逃げるためにジャンピングキャッチの要領で飛び込み回避することができた。

「きゃあああああああ!!」

うまく回避した悠岐と異なり、千尋の方が逃げるタイミングが遅れたらしく、かみ砕かれることはなかったが、突進を受けたことで後方に吹っ飛んでしまった。彼女は吹っ飛んだ衝撃で動けないらしく、苦しそうに呻いていた。

「くっそおおお!!」

思わず私は第二撃を加えようとする怪物に手元にあつた石を投げる。

まだ中学生1年生とはいえソフトボール選手が投げる石を食らったにもかかわらず、「何か」には傷一つつけることはできなかった。

倒れている人間よりもうるさい人間を始末しようと考えたのか化物は悠岐の方に再

び突進と仕掛けてきた。

「ッ!!」

これも間一髪で避けたが、いつかは食い殺されるだろう。また、今は一体であるがすぐに何体も湧いてくるだろう。

(クソッ！クソッ！クソッ！)

もう終わりだと思いき動くのを止めようと考えた瞬間どこからともなく声が聞こえてきた。

☒戦い続ける☒

(戦い続ける？武器もない中でそんなこと言われても無理だよ…)

☒戦う覚悟を示せ☒

☒さすれば道は開ける☒

(うるさい！こんな化物相手に戦えるわけない！)

☒戦い続ける☒

☒生きろ、そして戦え☒

悠岐は化物の攻撃を回避しながら頭に響き渡る声に言い返していた。極限状態での幻聴だと考えていた。

☒私たちが力を貸してやる☒

☒お前の力を見せてみる☒

(もう体力は限界だ…)

千尋は気絶しているようで、ぐったりとして動かないようである。化物が彼女に興味を示したら食い殺されるだろう。

「ははは、もうお終いだ…」

空から白い「何か」が降り注いだ。その数は十体以上。二人の運命は決したも同然だった。

☒戦え。戦い続けろ☒

☒この国を…守れ!!☒

(わかったよ…)

(どうせ死ぬなら戦って死んでやる…)

「戦ってやるよ!!だから私に力を貸してくれ!!」

☒お前の意思は受け取った☒

☒さあその手を伸ばせ☒

悠岐が声に従い手を伸ばした瞬間、まばゆい光が神社を覆う。

「これは…」

悠岐の手には70センチほど太刀が握られていた。切れ味のよさそうな刀身は夜だ

というのに鋼色に輝いていた。

刀に見惚れていると、一体の化物が倒れている千尋を食い殺そうと突進を仕掛けていた。

「千尋に、触るなああああ!!」

ただバットを振る感覚で刀をフルスイングすると、恐ろしいほど簡単に白い体を切り裂いた。

すると目の前にいる少女が脅威だと感じたのか化物どもは一直線に悠岐に向かってとびかかってきた。

「死ね」

悠岐は映画や剣道でみた刀の使い方をまねしながら冷静に一体ずつ斬り捨てていった。刀なんて握ったこともない悠岐であったが、まるで数十年來の相棒のように刀を使いこなした化物を斬り捨てた。

すべての化物を斬り終わることは、あの巨体は死体も残さず消え去っていた。

「千尋、千尋！大丈夫ツ？」

倒れている友人の下に駆け寄り呼吸や脈を確認する。幸いにも気絶しているだけのようであった。

悠岐は千尋を担ぐと神社から逃げていった。

人ひとり抱えて十数分歩くことは、本来、中学生一年生の少女では不可能なことである。しかし刀を手にしてから体が軽く、力に満ち溢れていた悠岐にとってこの程度のこととは楽勝だった。

しばらく歩くと頑丈そうなコンクリ造りの家が見えてきたため、その家に逃げ込んだ。

家主は相当慌てて逃げたようで鍵はかかっていなかった。

(これから、どうしていこう…)

悠岐は、化物どもに気が付かれないように電気を消した真っ暗な部屋で途方に暮れていた。

「うう…」

一時間ほど襲撃を警戒していると、気絶していた千尋が目を覚ました。

「起き上がってはだめ」

起き上がるとうとする彼女をとめ、ソファの上で寝かしておく。

「確か、あの時化物に襲われて…」

「事情は後で話すよ。今はもう少し休んでて」

「…わかった」

千尋は悠岐のいうことに素直に従うと目を閉じた。しばらくすると穏やかな寝息が

聞こえるようになった。

「はあ……」

大きなため息とともに猛烈な眠気が悠岐を襲った。眠ってはいけないと思いつつも意識は遠のいていくであつた。

2015年8月7日 舞鶴にて

2015年8月7日 10時00分

悠岐と千尋の二人は無言で山間部の舗装された道を歩いていた。

7月30日の悪夢から数日経過していたが、事態は全くといっていいほど好転していない。むしろ悪化しつつあった。幸いにも白い化物どもは都市部の人間や建物を破壊するのに必死なのか山間部ではあまり見かけなかった。

それでも無数のシロアリの如く無数に蠢く物体が空を覆いつくしており、空を見る気が失せてくるよう光景だった。

謎の力で覚醒した悠岐にとつて100kmほどの距離はそこまで苦にはならなかったが、ただの中学生である千尋にとつては拷問のような旅路であった。

化物に見つからないように常に緊張感を張り巡らせ、気温30度以上の真夏日に歩き続けることは12歳の少女には厳しすぎる内容であった。

「ちよつと休憩をしましょう」

「大丈夫、それよりも悠岐は疲れてない？」

「私は大丈夫だよ。あの時から体の調子が妙に良くて」

「それなら安心。水分補給や休憩は適度にとっているから私は大丈夫だよ。それよりも早く行かなきゃ……」

友人の体調を気遣って小休止を挟むことを提案した悠岐であったが彼女はそれを断り、目的地に向かうことを優先させた。

(すまない……)

心の中で謝りながら、再び山道を進み始めた。

二人の目指す目的地は、父親が所属している海上自衛隊の基地がある舞鶴市であった。京都市から100キロほどの場所にあり、電車を使えば3時間程度で行ける場所であったが、公共交通機関が使えないうえ自家用車も使えないため、徒歩での移動となった。真夏の山道を歩くということもあり何日もかけて歩く必要があった。

しばらく無言で歩き続けると、国道27号線の案内標識が舞鶴市内にあと数キロで到着することを示していた。

「そろそろ舞鶴市だ」

コンビニで拝借した地図をもとに目的地に向かっていた二人であったが、一日10キロ以上を歩き続け、ようやく父親のいる場所へと到着したのであった。

「ひんぐ……」

思わず声に出してしまうほど舞鶴市は破壊されていた。元々そこまで大きな町ではな

かったのだが、化物が暴れまわった後は京都市と何一つ変わらなかった。

「いい、急ぎましょう」

西舞鶴の町を抜ける途中、化物に出会ったが、隠れてやり過ごした。やつらが人間と同じように知性があるなら、自分たちを「殺す」ことができる武器を持った少女を無視するとは到底思えないからだ。調子に乗って戦えば、間違いなく援軍を呼ばれ、数の暴力で二人は押しつぶされるだろう。そのため、極力戦闘は避けることにしていた。

幸いにも千尋は勘が鋭く、彼女が行つてはいけなめと言う場所には必ず白い化物の姿があつた。

「お父さん無事だといいいね……」

「たぶん大丈夫よ……」

大丈夫であるとは思えなかった。いくら初動対応に時間がかかる自衛隊といえども、ここまで文明を破壊しつくしている化物に対して何の行動も起こさないわけではない。それなのに……

（おかしい……）

（化物への攻撃はともかく、災害対策に自衛隊が出勤していてもおかしくはないのに）
「数日前は生きていたんでよね？ だったら大丈夫よ！」

千歳が暗い顔をしている悠岐を慰めようと声をかけてくる。

「ありがとう」

そもそも二人が舞鶴に向かった理由は、化物が襲来した数日後に父から電話がかかってきたからである。

すでに電話、メールはおろかネットまでつながらなくなっていたが、父とは通話することができた。おそらく自衛隊の通信衛星はまだ無事だったのかもしれない。

ほとんど一方的な会話だったため、ろくな情報は得られなかったが、海上自衛隊の基地も白い化物に襲われ、部下が何人も殉職したらしい。すぐに迎えに行くことはできないから食料や水を買って込んで、地下や人目の少ない場所で隠れているという内容の電話だった。

すぐに電話が切れたこと、電話越しでは伝わらないと考えたため、悠岐の手にした刀のことは父親には言わなかった。

しかし父親の生存が確認できたこともあり、二人は舞鶴を指すことにしたのであった。

「千尋の家族は……」

「いいのよ、たぶん駄目だから」

千尋の両親は共働きで、京都市の中心部で働いていた。京都市の中心部は化物に徹底的に襲われていたらしく、建物が破壊されたときに発生した砂ぼこりと火災で街が見え

なくなるほどであった。

「それに悠岐についていた方が安心だし……」

化物に唯一対抗できる能力を持った友人から離れたくないというのが彼女の本音でもあった。

「そう……」

つい最近までは顔を合わせればスポーツ、ゲーム、麺類の話をしていた二人であったが、肉体的、精神的疲労の影響もあってか口数が減っていた。

2015年8月7日 14時00分

西舞鶴を通り抜け、海の方へと歩いていった二人であったが、しばらくすると海が見えてくる場所までたどり着いた。

「ここまで来たらあとちよつとだよ」

悠岐は、前に基地に来たこともあり、この辺の地形や道は覚えていた。

大通りは化物に見つかる可能性が高いため、細い路地を通りながら基地の入り口につくとそこは地獄であった。

「ッ!!」

(何度みても、この光景は慣れない……)

今までも人間の死体は嫌というほど見てきたが、慣れることはなかった。

入口付近には制服を着た自衛隊の隊員が倒れており、みな体の一部を食いちぎられていた。真夏日が続いていたこともあり、数日で体は腐り、猛烈な臭いをまき散らしていた。

「お父さん……」

「うう、ひどいよ、これ……」

千尋もこの光景に耐えきれなくなったのか口に手を当てて吐き気を抑えようとしていた。

「お父さんは、父はどこにいる!!」

急いで基地の中に入り、舞鶴地方総監部の建物内に入る。普通であれば、家族でも入れないような場所であるが、二人の行動を止める者はいなかった。

建物は破壊されている箇所もあったが、奇跡的に原形をとどめていた。

「幹部の人たちがいる場所ってどこよ」

いくら家族でも機密が関わることは全くわからない。知っていたらそれはそれで問題である。

「ねえ悠岐」

「何かわかったの？」

「今電気って止まっているよね？」

「そうだけど……」

電気などのインフラは地震が発生した時から止まったままだ。

「発電室って地下にあるみたいだよ」

千尋が建物の案内図を指さしながら悠岐に教える。

（発電室！）

（そうか、そこなら発電機があるし、管理している人がいるかも）

「地下に向かおう」

地下なら化物に襲われていない可能性もあるし、もしかしたら自衛官の人がいるかものと思い地下への入り口を探す。

「きゃっ！」

千尋の短い悲鳴と共に目の前の部屋から白いモノが飛び出してきた。

二人を認識すると、気持ち悪いほど大きい口を開けて猛スピードで建物を破壊しながら突進を仕掛けてきた。

「千尋、下がって！」

すぐに応戦できるように食料が入った荷物を建物の入り口に置いていたのが幸いし、すぐに抜刀することができた。

迫ってくる化物を刀で斬ると、真つ二つになって化物は消滅した。

(まずい、ばれたかもしれない)

「急いで逃げるよ!」

後ろで隠れていた千尋を呼びよせ、建物の外に逃げる。

しかし、外には無数の化物が二人を食い殺そうと待ち構えていた。

「悠岐!どうするの」

「くっ……」

いくら対化物特攻効果のある刀でも100体近い化物を相手取るのは不可能に近かった。

いつきに何体もの化物が二人に迫るが、これを斬り、建物の中に逃げ込む。しかし化物は人間の作った建物など障害にすらならないとばかりに突進を繰り返し行い、建物を破壊しようとしてきた。

「このままだと瓦礫の下敷きになっちゃうよ!」

(どうする、外に出ても囲まれて食い殺されるだけ)

(ここにいても建物の下敷きになるだけ)

(どうする、どうするの私!!)

二人が二度目の死を覚悟した瞬間、小さな爆発音とともにあたりが真つ白な煙で覆わ

れた。その後も銃声のような音や、何かが爆発するような音が鳴り響いた。

「も〜！どうなってるのよこれ！」

せき込みながらも千尋は不満をぶちまける。

「こつちだ！ついてこい」

野太い男の声に上をつかまれる。気配すら感じさせないその行動に恐怖を感じたが、今はこの声だけが味方である。

「千尋！」

「彼女は無事だ。仲間が付いている」

煙が薄くなっていくとともに男の正体がわかってきた。基地にいる人といえば、制服を着ているイメージが強かったが、男は映画で見るとような完全武装をしていた。

「特殊部隊？」

「そこまですごい部隊じゃないよ。基地を守るのを仕事にしているだけでね」

後ろには悠岐を助けた男と同じように武装した男が数名で千尋を守っていた。

建物の無事な部分へ行くと、隠し扉のようなものが開き、そこから地下に下りる階段があった。

階段を降りるとそこには分厚い扉があり、それを開けると広いスペースに数十人の人間が避難していた。

多くは自衛官のようだが、中には一般人もいるようだった。

広い部屋とは別に狭い部屋もあるようで、二人はその部屋に案内された。扉を開けると中から制服をきたおっさんが立っていた。

「悠岐？悠岐か!!」

「お父さん!!」

無駄にいい声で悠岐の名前を呼ぶ。この声は父親の声であった。

「監視カメラの映像でまさかとは思ったが、どうして舞鶴まで!!」

「お父さんが心配だったからよ。それに頼れる人なんてお父さんぐらいだし……」

悠岐と父親は抱き合いながら言葉を交わした。父親は二度と会うことはできないと覚悟を決めつつあったため、涙を流しながら最愛の娘との再会を喜んでいた。

「通信衛星も破壊されたようだな。もう二度と電話も通じないかと思っていた」

「私も京都や舞鶴の町の様子を見て、もうだめだと思っただけど……」

娘は謎の力に目覚めたおかげで助かり、父親は自衛隊の幹部だったために助かった。奇跡的な再会であった。

「部長！失礼します。総監が呼びです」

「わかった。すぐにいくよ」

悠岐の父親は想像以上に偉い人だったらしい。胸にはカラフルな布がたくさん付け

られているうえ、肩の階級章の黄色い線が沢山付いてあった。

「お父さんはちよつと忙しい。いろいろ話したいことはあるけどちよつとだけ待っていてくれ」

「わかった。頑張つてね」

父親は別の部屋に入っていく、残ったのは二人を案内してきた武装した自衛官と父の部下らしき自衛官と友人の千尋だけとなった。

「君は、山田一佐の娘さん？」

「はい。私は山田裕紀の娘です」

「それで、どうやって舞鶴まで。あの化物共のなかどうやって。それにその刀は一体」

「その話は父親に話す時でいいでしょう？いろいろと長い話になりそうですので」

「……そうですね。今はいろいろと大変だし、もう少し落ち着いてからにしましょう」

自衛官の人がゆっくり休んでねといい部屋から出ていく。武装した自衛官の人たちも部屋から出ていったこともあり、部屋には千尋と二人きりになった。

久しぶりに落ちつける場所であった。

「悠岐のお父さんってすごい人だったんだね。自衛隊の偉い人って聞いていたけど」

「私もこんなに偉い人だと思わなかった」

あの危機的状况で、自衛官が殉職するリスクがあるにも関わらず助けに来てくれたの

は悠岐が舞鶴基地の幹部の娘だったからかもしれない。

(もしくは、私が化物を倒せるところ見たからかもしれない)
(化物への戦力となりうる存在を無視するとは思えないしね)

しばらく休んでいると、部屋に父親が入ってきた。

「悠岐、落ち着いたか？」

「うん。いろいろありがとう」

「構わないよ。娘を助けない父親がどこにいる」

職権乱用である。

「まあ救助した理由は娘であるっていう理由だけではないけどね」

「私の刀の事？」

「そうだ。監視カメラで娘が刀であるあの化物を次々と斬り殺すところを私や、同僚が見ていてね」

「それで私たちを助けた」

「そうだ。残念だけど、今は有事だ。甘いことは言っていられない。たぶん逃げ込んできたのが一般人だったら……」

「お父さん、それ以上はいわないで」

「ごめんね。変な話をしてしまって」

山田家と千尋の三人は30日から今日までに起きたことを話しあった。

避難先の小学校の事

神社での謎の声と化物を殺す刀の事

舞鶴までの道のりの事

父親の話では、災害派遣のための艦隊を編成している最中に化物の襲来にあったらしい。信じられない話だが、自衛隊の拳銃やライフル銃はおろか、護衛艦の機関砲や砲弾、ミサイルが化物には全く通用しなかったらしい。湾内の護衛艦は白い化物に食い破られ、破壊されるか、乗員が皆殺しにされるかで無力化されたようである。

生き残っていた通信システムを利用してほかの基地や空自、陸自の情報を得ようとしたが、どこも舞鶴と同じように、化物に蹂躪されただけだった。

「米軍の知り合いとも話したが、米国本土も白い化物に蹂躪されているらしい」

世界最強の軍隊を持つ国も日本と同じように蹂躪されたい。ロシア、中国、EUといった国々でも同様の状況が発生しており、この地球上でまとまって敵に反撃できる能力を持つ国は既に存在していない可能性が高いとのことだった。

人類が築き上げてきた文明は一週間で崩壊してしまったのである。

「だが希望はある

」

「希望？私は化物を倒す刀を持っているけど、あいつらをすべて倒すほどの力はないよ……」

「そうではない。無事な地域が確認されている」

「無事な地域？」

自衛隊や米軍ですら歯が立たない化物から逃れられる地域など存在するのかと疑問に思う二人であったが、父親が口にした地名は意外な場所であった。

「四国だ。四国四県は化物を撃退したらしい。2日前でも、香川の善通寺にある陸自の駐屯地も基地機能を維持していた」

「四国の香川ってことは……」

「うん！おばあちゃんの家がある場所だ！」

千尋の声に喜びの感情が含まれる。祖母が生存しているかもしれないという希望が彼女を喜ばした。

「お父さん、お母さんは……」

「……」

悠岐は、ずっと心残りだったことを父親に聞いた。本当は、母親も探したかったが、生存も所在もわからなかった。そのため再開できる可能性の高い父親の方に向かったのであった。

「ダメだった、携帯も通じなくなてな。電源が切れているか、落としたみたいだ」

「そう……」

悠岐はそれでも幸運であった。父親に会えたのだから。友人の千尋の両親は行方不明、それも生存が絶望的なのだから。

「もう少し休んだら、悠岐のことで話し合いたい。四国の件も含めて今後どうしていくべきかを考えたい」

「わかった」

そう告げると父親は部屋から出ていき、部屋の中には悠岐と千尋の二人になった。

無音の部屋でこれまでのことを考えていると、瞼を焼くような熱い涙が目から流れ出した。隣では千尋がしゃくり上げの声を漏らしながら涙を流していた。

「うう、うう……」

今までは二人きりで行動し、頼れる人も、落ち着ける場所もなかった。常に緊張し続けていたこともあり、この一週間で起きた出来事を振り返る時間なんてものはなかった。

「お母さん……」

今までは悲しみを感じる気持ちはなかった。恐怖と生きたいという本能だけで過ごしてきた。

しかし、今はどうしようもないほど悲しみに満ち溢れていた。頬を涙で漏らしながら泣くことしかできなかつた。

2015年8月8日 舞鶴にて 2

2015年8月7日 午後20時00分

二人が部屋に入ってから数時間が経過していた。

(そろそろ泣くのを止めなくては)

負けず嫌いな悠岐は基本的に人前で涙を見せることはなかった。しかし今回は母親を失った悲しみや父親に会うことができた安心感からか千尋の前で泣いてしまった。

千尋が声を上げて泣いていたことに影響されてしまったのかもしれない。

「千尋……」

「大丈夫、大丈夫だから……」

千尋は泣きはらした顔で悠岐の言葉を遮る。

彼女の両親は千尋を愛していた。友人の私からみても親バカの一面があった。

その二人を失ったのだ。その悲しみは悠岐よりも大きかった。悠岐の母親は安否不明だが、父親は生きていたのだから。

舞鶴へ向かう最中も、悠岐には両親を失った悲しみを見せることはなかった。自分が両親のことで悲しめば、舞鶴へ向かおうとする悠岐の足を引っ張ってしまうと考えたか

らだ。

しかし、目の前で友人とその父親が笑顔で抱き合っているのを見ることはつらかったのだ。

緊迫した状況が一旦終わり、安全な場所で二人きりになったことで隠してきた思いがあふれてしまった。そのため、友人の前で声を震わせながら大粒の涙を流したのだ。

二人が友達になってから3年になる。しかし悠岐は千尋の泣き顔は見たことが無かった。

「私は千尋の友達だ」

「だから家族の代わりにはなれない」

一言一言に思いを込めながら涙を流し続ける友達に話しかける。

「でも私には千尋が必要なんだ」

「千尋がいたから頑張れた」

「千尋とバカな話をする時間が楽しかった」

あの日から悠岐は千尋を助けてきたと思ってきた。でも本当に助けられたのは悠岐の方でもあった。

つらい道中で、鋭い勘で敵を回避し、悠岐の戦闘への負担を減らしてくれた。

身体能力に変化はないのに、悠岐と歩みを共にしてくれた。

悠岐がつらそうな顔をしているときに野球やゲーム、家族の話をして、場を明るくしてくれた。

「だからこれからも私に力を貸してくれると嬉しい……」

「千尋は私が守るから」

（千尋が大好きな両親はもういない。だからその代りに私が彼女を守れる存在になる）

「……ありがとう悠岐」

「正直心のどこかでは悠岐のことがうらやましかった」

「お母さんやお父さんを、友達を殺した化物と戦える力を与えられたうえ、父親に会えたことがうらやましかったの……」

「悠岐だつていろいろなモノを失ったのに」

「私の方こそ無遠慮だった。ごめんなさい」

「いいよ。これからも一緒に頑張ろう」

「ああ。頑張ろう」

二人は涙で充血した目をみながら微笑みあった。

しばらくするとノックと共に部屋に父親が入ってきた。二人の顔を見れば先ほどま

で泣いていたことは明白だったが、父親は何も言わなかった。

「今後の話がしたい。一緒に来てほしい」

「わかった。千尋は……つらかったらここで待っていていいよ?」

泣き止んだとはいえ、まだ目を真っ赤にしている友人を連れていくことに少しためらいを覚えた。

「大丈夫。一緒に行こう悠岐」

「ありがとう……」

父親についていき、違う部屋に入るとそこには父親と同じような制服をきた自衛官が数人椅子に座っていた。

「山田一佐、それに二人ともそこに椅子があるので座ってください」

机の真ん中に住まっている50〜60代の男が三人を座るように指示する。学校の校長室に呼ばれたような雰囲気があったため、少し緊張していた。

三人が座ると、黒縁メガネをかけた七三分けの自衛官が話し始めた。

「いろいろがお話を聞きたいですが、まずは自己紹介から始めましょう」

黒縁メガネの自衛官は西本久志一佐と名乗り、基地の経理部長の役職にあるらしい。その隣に座っている優しそうな顔をした自衛官が舞鶴基地の幕僚長の山崎海将補で、机の真ん中に座っている丸い顔をした自衛官が総監の日高海将と名乗っていた。

山崎海将補、日高海将は父親よりも階級が高いらしく、基地の総司令官のような役割をしている人達だったらしい。

他にも基地の幹部の役職についている数人の自己紹介が行わ太。

(自衛隊の幹部の人たちつてもつとヤクザみたいな顔つきをした怖そうなイメージだったけどお父さんと同じで普通の人なのかも……)

「私は山田悠岐です。そこに座っている山田裕紀の娘です。あと十二歳です」

「わ、私は秋山千尋です。悠岐と同じ中学校のクラスメイトで、友達です」

千尋は知らない大人と話すことにそこまで慣れていないのが、少し緊張気味に自己紹介をした。

「ありがとう。早速だけど、悠岐さんの力のことを聞いてもいいかな?」

「大丈夫です」

悠岐の力を監視カメラ越しではあるが見ていた自衛官の人たちは、詳細を知りたいのだろう。特に隠す必要もないし、隠したところで得することはないので、素直に刀を手に入れた詳細を話す。

「あの神社にそんな刀が存在するとはなあ」

「お父さんも知らなかったの?」

「それに声が聞こえてきたか……」

「普段なら一蹴するような話だが、その力であの化物を倒しているのだからなあ」

他の人たちも悠岐の話の内容について真剣に討論をしている。

「悠岐さんの家の近くの神社ですか……」

「久志さん、何かご存じで？」

「悠岐さん。刀を少し見せていただいても？」

悠岐の持っている刀は装飾どころか、鏢すらなかった。柄も白い木で覆われているだけで、納刀した状態だと杖のようにも見えなくない。

刀を受け取った西本は興味深そうに刀身を見つめる。

「一見すると長さ70センチメートル程度の日本刀に見えるが……」

時代劇や歴史ドラマなどでよく見かける刀であり、何か大きな違いがあるとは思えなかった。しかし西本は何か気づいたようで、「むむむ」とうなり声をあげる。

「あの神社に所縁があつて、この刀身だとすると……だがあの刀は博物館に寄託しているはず」

「西本くん。何か知っているのかね？」

「なかがごを確認すればはつきりわかりますが、これはあの神社のご祭神が使っていたとされる刀だと思います」

西本さんの話によると悠岐が刀を、力を手に入れたあの神社は500年以上前に活躍

した英傑を祭った神社だったらしい。この刀がその英傑が愛用していた刀だったらしい。

刀に限れば、日本史で登場する多くの英傑たちがその刀を所有し、今の世の中まで守り続けた貴重なモノだと興奮気味に語っていた。

「もしかしたら、化物から日本を守ってほしいという過去の英雄たちの思いが込められているのかもしれないですね」

他の人達はそんなオカルトな話を信じれるかという顔をしていたが、実際に不思議なパワーを秘めた刀であることに違いないため、悠岐と千尋は西本の解釈で納得していた。

「ここからが本題だ……悠岐さんはあの化物を最大何体相手どることができてる」

「同時に相手どるなら十数体が限界です。逃げながらであれば体力の持つ限り戦えますが、まだそこまで戦ったことが無いのでわからないです」

数十体か……といった声が部屋に響き渡る。

「それなら一体どうやって舞鶴まで……」

「護衛艦や舞鶴の町を襲った化物は数百体以上いたぞ。人口が多かった京都市はもつといたんじゃないか？」

「空を埋め尽くすぐらい化物はいましたが、見つからないように隠れながら市街地を脱

出して山道を隠れながら歩いてきました」

運が良かったとしか言いようがない話であるが、悠岐には二人の中学生が無傷で100キロの距離を化物に襲われないで移動できた理由は悠岐の能力以外の要因があると考えていた。

「千尋の勘が全部当たったのが大きな理由だと思います」

「悠岐?!」

蚊帳の外だと思つて天井を眺めてぼーつとしていた千尋は突然名前を出されて驚いた声を上げた。

「確かに『こつちにいったら危ないな』とか感じたけど……」

「それに千尋はもともとこんなに勘が鋭いつてことはなかったはずだ。たぶん私と同じように後天的に手に入れた力だと思う」

一見すると頭の可笑しい主張であったが、二人の少女が化物だらけの中を100キロ以上移動したという事実があったため一蹴することはできなかつた。

皆苦い顔をしながらお互いの顔を見ていた。

少し話し合いたいと父親達が言うこともあり、二人は元にした部屋に一旦戻された。

二人がいなくなった後の部屋では沈黙が続いていた。

「やはりここは計画を実行すべきかと」

沈黙を破った西本一佐が他の自衛官たちに「計画」という言葉を投げかける。

舞鶴基地の生き残りの自衛官たちは舞鶴から脱出して四国へと逃げる計画を策定していた。このままでは確実に燃料、食糧不足になってしまふ。そのため、人類の生存の可能性が高い四国へ脱出計画が作られたのであった。

しかし敵を倒せる装備もない状況で150キロ以上の距離を移動できる可能性が間違ひなくゼロであった。そのため地下に避難していた者の多くがこのまま地下で死ぬものであると覚悟していた。

「悠岐さんは化物を倒せる力があります。信じにくいですが、秋山さんも化物に見つからない何らかの力を有しています。この二人の力に懸けてみるべきです」

「西本一佐、あなたの言葉は十二歳の少女に戦えと言っていることだと理解しているのか。それに悠岐さんは山田一佐の娘だぞ」

「それにその力だつて無敵ではない」

「わかっています。しかしこのままでは我々は死ぬだけです」

計画を実行すべきであるとする西本と倫理的に許されないとする数名の自衛官が対立する。

本来守るべき国民の、しかもまだ中学校に入ったばかりの少女の力を借りるしか

い。しかもその少女は同僚の娘でもある。

約30人を助けるために、少女たちを戦わせる。本来許されない考えである。

結局その日に結論は出なかったことや、更なる熟議が必要であると全員が判断したため、会議が終了となった。

会議室に一人残った裕紀はどうしていくべきかを考えていた。

(最終的に悠岐に任せるという選択肢もあるが、あの娘ならおそらく先頭に立って戦うだろう。そういう娘だ)

何時間も目をつぶりながら一人娘のことを考えていた。

(娘は真面目だ。それに責任感も強い。だから私たち大人が頭を下げてお願いしをすれば必ずYesと答えるだろう)

「初めから選択肢などないのかもな……」

気が付くと時計の針は朝の3時を指していた。裕紀が小さくつぶやくと立ち上がり、仮眠をとるために仮眠室に入っていた。

2015年8月8日 17時00分

「四国へ、ですか……?」

「そうだ。現状ここに隠れ続けていても待っているのは死だけだ」

父親達と話した翌日、二人は部屋の中にゆつくりと過ごしていた。他の避難している人と話そうと思つたが、父親から今日一日部屋で大人しくしてほしいといわれたこともあり、部屋の中で天井のシミを数えたり、細長い棒で素振りをしたり二人でおしゃべりをしていた。

時計の針が午後5時を指した時、父親が部屋に入ってきた。

真剣な顔をして二人を最初に通された比較的大きな部屋に来るようにいわれ、指示通り部屋に行くと、昨日の幹部の自衛官の人だけでなく、若い自衛官の人が大勢部屋の中で待機していた。

部屋に入ると全員の視線が二人に向けられ、かなりの圧迫感を感じた。

二人が父親の隣に座ると、西本一佐が口を開き始めた。

内容は、悠岐の化物を倒す力、千尋の敵を察知する力。この二人の能力でここにいる約30名を四国までエスコートしてほしいという内容だった。

「ルートの策定や、食糧の運搬などは我々自衛隊が最大限協力します」

悠岐にとつて西本一佐、自衛官の人たちの言葉はなんとなく予想していたものだった。

一人は化物を倒す刀を持ち、一人は化物を察知する能力を持つ。

自衛隊ですら全く歯が立たなかつた化物が蠢く中、少なくとも京都から舞鶴まで10

0キロを逃げ延びることができると持った二人を頼らない方がおかしい。

「二人にはこの提案を拒否する権利がある」

「二人と山田一佐だけで舞鶴を脱出して四国へと向かうことも自由だ」

二人は何も言えなかった。

（私たちに数十人の命運を握らせるのか……）

二人がこの計画に協力しなければ、ここにいる数十人の自衛官、数人の一般人は間違いないで死ぬだろう。この狭いシエルターの中で衰弱死するか、外に出ていき、白い化物に食い殺されるだろう。

健全な道徳教育を受けた二人に数十人の人間を見捨てるという選択肢は生まれなかった。たとえそれが二人の道徳心に付け込んだ計画であったとしても。

気が付けば自分たちよりも大人で、立派な制服を着ている自衛官全員が私たちに向かって深くお辞儀をしていた。

その中、基地で一番偉い日高海将が最敬礼で二人に話しかける。

「我々に時間は残っていません」

「私たちを助けてください。お二人の力が必要です」

大勢の人が自分を頼っている。そのような経験がない悠岐は大きく戸惑っていた。

（私にはみんなを守る力があるのだろうか）

舞鶴まで千尋と二人だった。それでも精一杯の旅路だった。それなのに、数十人の人間と共に四国へ向かうことができると考えた。

「悠岐と私の力を合わせれば大丈夫」

隣に立つ千尋を見ると優しい顔で私に計画に参加しようと言ってきていた。

「家族の事は今でも悲しいよ」

「でも助けられる力を持つていながらみんなを見捨てたら私は絶対に後悔する」

「ここで逃げたら私はお母さんやお父さんに顔向けできない」

昨日のことがあっても千尋は前に進もうとしていた。

（私には化物を「殺す」力がある）

（ここで多くの人を見捨てて四国に逃げ延びたとしても、この命に価値はあるのだろうか）

（死んだとき、軍人として国のために散っていったご先祖様に顔向けできるのだろうか）
もう悠岐には答えが見つかった。

「千尋、協力してくれる？」

「当然！」

二人は顔を見合わせると部屋を見渡し、選んだ選択肢を伝えた。

「協力します」

「私は敵を倒す力を」

「私は敵を察知する力を」

「ありがとうございます」

部屋で安堵の声が聞こえる。

そしてあわただしく自衛官たちが動き始める。

(賽は投げられた)

その中で裕紀は天井を見ながら娘を思っていた。

2015年8月15～31日 明石海峡への道のり

2015年8月15日 10時00分

兵庫県と京都府の県境の山道を悠岐達一行は歩いていった。舞鶴市の海上自衛隊基地を脱出して数日が経過していた。

最終的には悠岐と千尋の二人の能力を利用しながら京都、兵庫県内を移動しながら舞鶴から四国までの直線距離150キロ以上を移動することになった。

一つ目のルートは、兵庫県から四国へ行くルートである。つまり明石海峡大橋く淡路島く大鳴門橋を通るルートだった。二つ目のルートは岡山県から瀬戸大橋を通って四国へ入るルートである。

淡路島が安全圏であるなら明石海峡大橋を通り、淡路島も化物の勢力圏だった場合は瀬戸大橋を通る予定である。

瀬戸内海をまたぐ三本の橋がすべて使用できない場合はどこかの港で船を調達して瀬戸内海を渡ることになるが、あまり考えたくない手段であった。

悠岐、千尋、自衛官、一般人を含めた総勢35名の隊列は化物に見つからないように慎重に行動をしていた。

最初に目指す場所は明石海峡大橋がかかっている兵庫県明石市だった。

先頭を歩くのは、地図を持った自衛官とこの隊列の中で唯一化物に対抗できる力を持つ悠岐、鋭い勘で京都から舞鶴への二人の旅で、道中の危険を察知し続けた千尋であった。

「このまま進めば兵庫県に入れると思います」

「こつちの道は大丈夫だよ」

自衛官が地図を参照しながら現在位置と道路を確認し、千尋がその道の安全を保障する。ここまでの道中で化物に一体も遭遇していないこともあってか、初めは千尋の能力を疑っていた自衛官の人たちもすっかり彼女の勘を頼りにしていた。

悠岐は片耳に通信インカムをつけて、殿の自衛官の情報を確認しつつ、敵に襲来に備えていた。

「それにしても暑い……」

悠岐は中学校の制服を脱ぎ、武装した自衛官の人と同じような恰好をしていた。防弾チョッキや迷彩服を着こみ、見た目は自衛隊のコスプレをしている少女であった。本人はジャージとかが良かったが、最新の間工学の下で作られた戦闘服は案外着心地が良かった。しかしヘルメットをかぶり、長袖の服であったため非常に暑かった。

（私がしっかり戦わなければ……）

四国までの数百キロの道のりを無事に終えるためには悠岐と千尋の能力が不可欠だった。今、悠岐の行動によって34人の命の運命が左右されるのであった。

「12歳の少女に30人以上の命運を握らせる……」

「本来であれば我々がその役目を担わなければならぬのだが……」

隊列の戦闘で警戒しながら進む黒髪の眼鏡をかけた少女を見ながらおっさん自衛官の二人が苦虫を噛み潰したような顔をしながらつぶやく。

二人は舞鶴地方総監部の幹部の自衛官であった。無駄にいい声をしているおっさんが悠岐の父親の山田裕紀一佐。黒縁メガネをかけた七三分けのおっさんが基地の経理部長をしている西本久志一佐であった。

二人の幹部の後ろには舞鶴基地の幕僚長の山崎海将補、総監の日高海将が緊張した顔つきで歩いていった。

二人だけでなく、ここにいる全員の自衛官が本来であれば守るべき市民である二人の少女に頼りっぱなしになっている現状にやるせなさが湧いていた。

「君の娘さんは立派だ」

日高総監が悠岐の父親をたたえる。

「正直なことを言えば、娘には戦わせたくはないです」

「そうだな……だが、状況が状況だ。仕方がないだろう」

☒仕方がない☒ほかに選択肢などない☒

この言葉を免罪符にして、娘を、まだ15歳にもなっていない少女を戦わせる。

残酷この上ない仕打ちであった。さらに彼らは自衛隊である。本来であれば脅威を排除し、国民を守ることが使命であった。

「しかしこの歳で行軍はちと厳しいなあ」

一番年上の日高が呟くと、周りのおっさんたちも苦笑しながら同意する。とくに悠岐の父親は立派なお腹を体に身に着けており、若い連中と一緒に運動をしておくべきだったと後悔していた。

2015年8月15日 22時00分

夜になり、これ以上の移動は無理だと判断した一行は近くにあつた小さな事務所の建物の中で一夜を過ごすことになった。野営を行ったりしてきたこともあり、建物内で過ごせるのはありがたかった。

化物に見つかると厄介なので、火やライトの類は一切使うことを許されておらず、やる事が無くなった35名は見張りの人間以外は寝るか建物内で大人しくしていた。

悠岐と千尋は建物の陰から空を眺めていた。

「これだけきれいな星空なのにまったく感動できないね」

「あの化物は空から降ってきた。空が嫌いになるさ」

あの始まりの日、小学校の校庭で眺めた星空も今日と同じような美しい星空だった。違うところがあるとすれば、星空を遮る「何か」を見て不愉快になるぐらいだろう。

「あの化物つてどこから来たんだろう……」

「わからないけど、地球の生き物ではないね」

自衛隊の最新鋭の武器ですら傷一つ負わせることも叶わない異常さ。人間を見つけると一目散にその命を奪いに来る。

「まるで宇宙人の兵器みたいだね」

「それだった戦闘機に乗って戦わなきゃ!」

「もしくはハワイの戦艦を動かすかだな」

宇宙人侵略モノ映画の話で盛り上がる。

映画なら最後に何らかの突破口を見出すことできるが現実是非常だった。

「なんで人間を殺すのかな?」

「この星を植民地にしたいとかかな」

「あんな化物を造れるならもつと平和なことに利用すればいいのにな」

「本当だ」

結局宇宙人も地球人と同じで何かを犠牲にしないと何もできないのかもしれない。

「それにしても気持ちの悪いデザインだよね」

「宇宙人にとつてはあれが普通なのかも」

「絶対にセンス悪いよ……」

「人を不愉快にする天才が作ったとしか思えない」

台所で見かける黒、茶色のあれよりはましだが。外見だけなら。

「そういえばあの化物の名前って決めていないね」

「化物でいいじゃないの？」

「だめよ。明確な敵として認識するためには名前が必要よ」

「そういうものなのかな……」

二人は白い化物の名前をいろいろと考えてみたがあまりいい案は浮かばなかった。

「人類を抹殺するからターミネーターでいいんじゃない？」

「それだと筋肉モリモリのマツチョマンが思い浮かぶから没だな」

小さく笑いながらも一度空を見ると、雲一つない夜空に星空が輝いていた。

「天の光はすべて星か……」

むかし見たアニメのタイトルにこんな言葉があった。元ネタは有名なSF小説のタイトルだった。

「今の状況だと☒天の光はすべて敵☒だな……」

長い時間外に出ることで化物に見つかるのもバカらしいので、二人は建物の中に戻った。

真夏の夜は静かに過ぎていった。

2015年8月29日 8時00分

しばらくすると、空に太陽が昇ることが無くなった。あれだけ暑かった気温も今では冬並の寒さとなっていた。

空を見ても星空は見えなくなり、見えるのは無数の化物だけだった。

悠岐達一行は途中の山間部の町などで、水や食料などを調達しつつ瀬戸内海へと向かっていた。

京丹後地域は山に囲まれた地形ではあるが、福知山市や綾部市、篠山市など、割と都市化が進んでいる地域が多い。しかし、どの町も破壊され、生きている住人は全くいなかった。化物は平等にすべてを破壊していたようである。

10日以上化物の蠢く中を進み続けたが、千尋の勘が鈍ったことは一度もなく、化物にはほとんど遭遇しなかった。町の中で数体の化物に遭遇したときも悠岐の刀で斬り伏せることが出来た。

二人の能力と全員の精神力、体力によって誰も落後することなく兵庫県の平野部に入

ることが出来る。

瀬戸内海に近くなればなるほど、都市が大きくなり、その分敵の数も増えていくことが予想された。そのため、極力市街地を通らずに行きたいところだったが、大橋へ行くにはどうしても神戸、明石市内に入る必要があった。

「大橋は外見上では無事のようにです」

自衛隊員が大きな双眼鏡を使って地平線にうつすらと見える大きな橋を見ていた。あたりは暗闇に包まれていたが、神戸や大阪の工業地帯で発生した大火災によって照らされていた。

「問題は淡路島が敵の勢力圏かどうかだが……」

「さすがに個人装備でこの距離を正確に測定するのは難しいですね」

索敵を行っていた自衛官が幹部の人たちとあの橋を渡るかどうかを検討していた。

通信車両があれば四国まで簡単に通信を行うことも可能だったが、なるべく身軽な装備で移動してきたこともあり、部隊内で行うレベルの通信設備しか悠岐達一行はもっていなかった。

「秋山さん。君の能力で淡路島が安全かどうかわかるかね？」

千尋の能力は敵がいる場所がなんとなくわかる能力である。この力なら橋の向こうが安全であるかがわかるかもしれない。

「たぶんですけど淡路島は安全だと思います。ただ……」

「ただ？」

「ただ、あの橋を渡るのは危険だと思う」

30人以上の人間が狭い橋を渡る。

化物からしてみれば恰好の獲物である。

「だがみんな限界を迎えつつあるぞ。とてもじゃないが瀬戸大橋へ向かう余裕は……」

後ろで休んでいる人たちを見るが、みな疲弊した顔をしていた。

悠岐も覚醒した力があるため、肉体的にはほとんど疲れてはいなかった。しかし常に敵を警戒する必要があったため、精神的にかなり疲弊していた。これは舞鶴から歩いてきた全員にいえることだった。

これ以上敵中を歩き続けるのは不可能に近かった。

「大橋の長さは約4キロか。走っても20分以上はかかるだろう」

「車を使う必要があるな……」

悠岐の父親と西本一佐が大橋突破のための具体的な作戦を話している。

瀬戸大橋でも明石海峡大橋でも徒歩での移動はかなり危険だと判断していたため、乗り捨てられている車などを利用できないものかと考えていた。

「神戸淡路鳴門自動車道を利用して大橋を通るのが一番いいと思うが」

明石海峡大橋は神戸淡路鳴門自動車を通してある橋である。この自動車道はジャンクション好きなら一度は聞いたことがある垂水JCTから橋の直前まではトンネルが通っており、化物に見つかりにくいのではないかと考えられていた。

「問題は車をどのように調達するかだな」

「全員が乗れる大型バスよりは、数台の乗用車に分けたほうがいいかもな」

一応大人全員が車の免許を持っていることもあり、車の運転に関してはそこまで問題はなかった。

しかし、道路の一部が化物によって破壊されていたり、破壊された車両が道をふさいでいる可能性があり、なかなか自動車での突破案が採用できなかった。

「さすがの私も道路の状態まではわからないよ……」

自衛官たちの話し合いに参加していた千尋が自分の勘の限界を語る。彼女の勘では、この道は危ないとかそういったレベルのモノであった。

「実際にその道路に行ってみたらわかるかもしれない」

悠岐が一人で強硬偵察を行いたいと提案するが危険すぎる点や、残された人間の安全が確保できないとして却下される。

しかし、現状の装備では歩いて突破は不可能であるため、車を使った突破作戦が決行されることになった。

2015年8月30日 13時00分

全てが終わってしまった日から1ヶ月が経過していた。

悠岐達は道路の近くにあったゴルフ場を抜け、トンネル近くの建物に何とか避難することが出来た。

途中かなりの数の化物に追跡されたが、悠岐が囷になって敵を誘導し、千尋が安全な道や建物を見つけて非難するといった方法で何度も危機を切り抜けていた。

「悠岐、大丈夫……」

「ちよつと血が流れ過ぎているかもな」

その代償に悠岐は右手を負傷したのであった。

化物のかみつき攻撃を、直接は食らわなかったものの、破壊した鉄のがれきが悠岐の二の腕の部分を貫通していた。

（普通なら泣き叫ぶほど痛いだろうけど、この刀を持ち始めてから妙に体が頑丈になつたな）

すでに貫通した瓦礫は引き抜いてあるが、なかなか血が止まらなかつた。このままでは出血性ショックか敗血症になってしまう可能性があり、すぐに病院で手当てをするが必要であつた。

応急処置として自衛官の人から止血を受けているがあまり激しく動かさないほうがいいとのことだった。

しかしこれから起こるであろう激しい戦いでは、さらに負傷するだろうと悠岐は考えていた。

「それじゃあ行つてくるよ」

治療もそこそこにトンネル内に入り、中を確認する。一か月前にはたくさんの車が通っていたトンネルは暗闇に包まれていた。トンネルの中は電気が止まり、ライトがすべて消えていた。

真つ暗であったが、悠岐は力を手に入れた時から夜目が効くようになっており、破壊された車両が目に入った。しかし中で人間の死体を確認することはできなかった。

さらに歩みを進めると、奥で蠢く何かに悠岐は気づいた。

(こんなところにもいるのか……)

悠岐は、これ以上の進むことは危険と判断し、トンネル前の建物へと戻った。

「中に化物がいたのか……」

「それに車もほとんど破壊されていたか……」

「これは別の作戦で行く必要がありますね」

トンネル内の状況を自衛官に伝えると渋い顔をしながらあらかじめ考えていた別の作戦を話し始める。

車や道路が使えない場合は橋の入り口にある階段から橋のトラス部分に入り、歩いて大橋を渡るというものだった。

「しかしこの辺りは化物の巣窟だぞ。不用意に市内を移動するよりはトンネル内を移動したほうが安全なのでは？」

「悠岐さんはケガをしている。戦闘を強いるのはよろしくない」

このままトンネル内を徒歩で強行突破するか、市内を移動するかで悩んでいた。

千尋はどちらも化物に出会う可能性が高いと指摘していた。千尋の能力をもってしても、化物を回避する方法はなかった。

「私は大丈夫だ。血ももう止まったよ」

負傷した右手は動かないが、出血はすでに止まっていた。昔から生傷は絶えない少女だったが、ここまで治癒力が高いわけではなかった。

(おそろしくこの治癒力も力のおかげか)

その後も地図や化物の状況を確認しながらどのようにして橋を渡るかを検討し、最終的にはトンネル内の化物を掃討しトンネル内を突破し、そのまま橋を渡り切るという強行作戦を行うことになった。

作戦の要は化物を掃討する役目を担う悠岐であった。右手の出血は止まったが、力が入らない状態であった。

しかし、回復を持つ時間は悠岐達一行には与えられていなかった。

双眼鏡あたりを警戒していた自衛官が燃える市街地の向こうに不気味なモノを見つけたためだ。10キロ以上距離が離れていたが、悠岐も力によって視力が強化されていたこともあり、その不気味なモノをはつきりと確認していた。

それは化物の卵であった。神戸三宮駅付近が巨大な卵上の白いモノに覆われていた。よく見ると中には大量の白い化物が蠢いていた。

卵が植え付けられている地域は三宮駅から長田区まで広がっており、時折卵殻から白いモノが空に飛び立っている場面も見ることが出来た。

これ以上神戸と留めっていると化物に発見され、物量で押しつぶされる可能性がある。と判断し、強行突破を行うことになったのである。

2015年8月31日15時00分

悠岐はトンネル内に入り、全速力で暗闇の中を駆け抜けた。

「ううおおおおおおお!!」

唸り声をあげながら左手で刀を使い、一振り毎に化物を斬り捨てる。後ろから突進を仕

掛けてきた化物を突進の勢いを利用して真つ二つに斬りさいた。

数十秒の攻防でトンネル内にいた化物を倒し終えた悠岐は通信インカムで後方にいる千尋達を誘導する。

2キロほどトンネルを進むと、千尋が何かを察知したように悠岐達に話しかける。

「後ろからやつらが来ている!」

「もう嗅ぎ付けてきたか。走れ!」

父親の声と共に悠岐達は一気に出口に走り始めた。

(出口まであと一キロほど……このままでは間に合わない)

「あのトラック、使えるんじゃない?」

少し走ると千尋が一台の車両を発見した。荷台の屋根は壊れていたが、エンジンの部分や、タイヤが無事な大型トラックが路肩に止められていた。

走っていた自衛官が中を確認すると、キーがそのままになっており、中に入ってキーを回すとエンジンが動き始めた。

「このトラック、使えます!」

荷台は屋根が壊れていたが、荷台そのものは無事であった。

すぐに荷台に30人近くが乗ろうとしたその時、後ろから化物が突進してきた。

「邪魔をするな!」

悠岐の刀で戦闘にいた数体を葬ると、全員が乗り終わったトラックが進み始める。悠岐はトラックに追従しながら、後ろから迫りくる化物を倒していた。

「そろそろ外に出るぞー！」

運転を担当した自衛官はトラックのライトを頼りに進路をふさいでいる道路上の車をよけながら猛スピードでトンネルを走り抜けた。

トンネルの外に出ると、目の前には巨大な橋脚を持つ明石海峡大橋が暗闇に浮かんでいた。

しかしその道路上には、見たこともない「何か」が行く手をふさいでいた。

「おいおい嘘だろ……！」

急ブレーキでトラックを停車すると、球体状の物体の先に非常に長く鋭い角のような器官をもつ化物がトラックに対して、その鋭い角を向けてくる。

直撃すれば簡単にトラックを破壊できる角の攻撃をトラックの前に出た悠岐が刀で防ぐ。

「ぐっ……！」

しかし、衝撃は吸収できず、後方に吹き飛ばされてしまった。

すぐに起き上がって周りを見ると後ろからは無数の白い化物が迫り、前には鋭い角で悠岐を吹き飛ばした化物が行く手をふさいでいた。

(嘘でしょ、何なのあいつら)

角の化物のすぐ横では、白い化物が集合して合体を始めていた。

「やつら合体してやがる……」

この光景を目の前で見えていた自衛官たちは同じ感想を抱いていた。

(あいつらには刀が通じないかもしれない……)

自分たちを殺すことができる悠岐を抹殺するために彼らを選んだ選択は『進化』であつた。

西暦の勇者たちを苦しめた進化体との戦いはこの時から始まったのである。

2015年8月31日 明石海峡大橋を突破せよ

2015年8月31日 16時00分

明石海峡大橋の入り口には、一台の大型トラックと一人の少女がいた。橋を渡れば安全な場所に出られると思ったが、化物はそれを見越していたかのように橋の入り口を塞いでいた。

「なんなのあいつら!？」

「合体しやがったぞ！」

橋の近くでは白い化物が蠢きながら融合していく姿をみて、千尋たちは吐き気を催す。雑魚では悠岐に対抗できないと考えた化物達が選んだ先は合体による進化であった。

生物が合体し、さらにその力を高めるといふ現象は地球上ではまず存在しない。しかも白い化物は合体することによってその形状を大きく変え、大きさも戦闘力も桁違いに上昇していた。

四面楚歌の状態であり、トラックの乗った千尋たちは動くことができなかつた。

「悠岐ーやばいよやばいよ!!」

「後ろから来るぞ！ 気を付けろ！」

トンネルの方から20体ほどの合体前の化物がトラックに迫る。刀を右手に持ち替えると左手に鞘を投げつけ、数体を吹き飛ばす。再び左手に持ち替えた刀で次々と化物を葬る。

悠岐が雑魚に対処していると、大橋のやや後方に位置していた矢のようなものを発生させたタイプの進化体が動き始めた。

（あれは、矢……？）

（まづい！）

悠岐が矢の射出タイプの化物の動きを察知し、トラック付近へと駆け出した瞬間に

「矢」が発射される。

「間に合えええええ!!」

矢がトラックに直撃する瞬間、悠岐の左手の刀で矢を打ち払う。空気を断ち切るような金属音と共に悠岐の左手に経験したことのないほどの衝撃が加えられた。

（クソ、重い……）

矢をはじめいた衝撃が強すぎて、左手から刀が弾き飛ばされてしまった。刀は橋の下に落ちていき、悠岐は丸腰になってしまった。

「しまった！」

刀が無くなれば悠岐はちよつと頑丈な女の子（当社比）である。

悠岐の刀の有無に係わらず、矢は再び発射されようとしている。角のタイプの化物も悠岐の体を貫こうと突進を仕掛けてきた。

（刀が…）

悠岐が何かないか探すと10メートルほど後ろに化物に投げた鞘が転がっていた。

すぐに駆け付け鞘を拾い上げるとついでに近くにいた雑魚をフルスイングで吹っ飛ばす。

「やっぱり私はこっちの方があっているかな」

悠岐に向かって発射された「矢」は猛烈なスピードで悠岐の体を穿こうとしていた。

悠岐は自分に向かってくる高速の発射体の弾道を右足をあげながらタイミングを冷静に見極め、重心を左の軸足にして、身体がねじ切れんばかりのフルスイングを放つ。

「逆転ホームランだ」

鞘に直撃した「矢」は悠岐の力とタイミングの調整によって、鋭い角で悠岐を攻撃しようとしていた角をもつ化物に向かって飛んでいった。

はじき返した矢が角を持つ化物に直撃し、衝撃で化物が横倒しになる。

「さすが悠岐！未来の主砲なだけあるわ」

「あの矢を撃ち返したぞ」

片手で矢をはじめ返した悠岐の人間離れた身体能力とバカな行動に啞然とする一行だった。千尋は悠岐の見事な流し打ちに感嘆をあげる。

「私から三振を取りたければもっと速い球を投げるべきだな」

謎の力を手に入れる前から直球には強い悠岐であったが、時速数百キロの速度の発射体をはじめ返すほどの動体視力も運動神経も持つてはいなかった。

調子に乗って化物を挑発した瞬間、矢を持つ化物が悠岐に対して4本の矢を連続して発射する。

「さすがにこれは無理」

二本の矢を鞘で弾いて体に当たらないようにするが、他の二本の迎撃が間に合わず、一本が右手を掠る。

「チツッ！掠っただけなのに」

掠った部分の腕の肉がえぐれ、筋肉はおろか骨まで見えていた。大量の血が流れており、少しだけ回復しつつあった右手は完全に使用できなくなつた。

（遠距離タイプで牽制し、角のタイプでとどめを刺す。ムカデタイプは行く手をふさぐ。完璧な陣形だ）

このような化物の同士の連携は、西暦時代の勇者を苦しめた。数百年後には、さらに強化されたコンビネーションで後輩の勇者たちも苦しめることになる。

「増援が来たぞ……」

5キ口ほど離れた化物の卵が植え付けられている部分から次々と白い化物が空へと吐き出されていた。化物達は合体を繰り返し、悠岐達を葬り去ろうとしていた。

「もう余裕はないぞ！」

（こうなったら突貫するしかない）

「いくぞ！ ついてこい」

悠岐の叫び声と共にトラックの運転席にいる自衛官が一気にアクセルを踏む。しかし、なかなか加速しないトラックに化物が襲い掛かる。

「危ない！」

悠岐は発射された「矢」を鞘でいなしながら軌道を変え、トラックに襲いかかった化物に直撃させた。

兇悪な威力がある「矢」は化物にも効果的なようで、一瞬にして十数体が吹き飛んで消滅する。

「さて、次はこつちだ」

微妙に宙に浮いている角のある化物と橋の入り口を塞いでいるムカデ型の化物に鞘の先を向ける。

トラックの前に跳躍し角の化物の紅白の珠の部分に鞘を叩きつける。しかし使える

手が左手だけということもあり、ダメージを与えることができなかった。

「ぐあ……」

一瞬の隙をつかれ、鋭い角の薙ぎ払いを受け、悠岐の身体が道路上に転がる。

体中から血が流れ、顔は擦過傷まみれになっていた。

「悠岐！」

ボロボロになった悠岐も見ていられず、千尋がトラックから降り、彼女の下に寄り添う。

トラックはすでに止まっていた。道路を塞ぐ化物をどうにかしない限り、前に進めなかった。

「ごめん、ちよつと無理かも……」

「動いちやだめだよ。血が、腕が……」

千尋はボロボロになりながら立ち上がり、化物へと向かおうとする。しかし、まとも立つことができず、鞘を杖代わりにしながら化物をにらみつけていた。

自衛官たちが乗るトラックにも白い化物が迫り、自衛官は持っていた拳銃や自動小銃で抵抗するが、全く効果がなかった。

「うおおおおおおお！」

最後の力を振り絞った叫び声と共に悠岐は鞘を持ちながら角の化物に突っ込んで

いった。角の化物は彼女の身体を確実に貫くため、薙ぎ払いで身体を動けなくしようとしていた。

化物の薙ぎ払いをよけつつ、角の化物へ攻撃を行うとしていたが、横から飛んできた高速の「矢」が彼女の鞘を吹き飛ばし、そのすきを狙った薙ぎ払いによつて悠岐は道路の防壁に吹き飛ばされる。

橋までの50メートルは、悠岐達にとっては永遠の距離とも思えた。

「はあ……はあ……」

「化物共め……」

（私たちをここまで苦しめて何が楽しい）

（なんでこんな目に合わなければならぬんだ）

「ふざけるな、ふざけるな！なんの権利があつて私たちを殺す」

（私から母親を、千尋から両親を、お父さんからは同僚を、人間から誇りと文明を奪つた）

「私は絶対に許さない！」

「最後まで戦い続ける、続けてやる!!」

たとえ人類最後の生き残りになろうとも戦いを止めないことを決意する咆哮だった。

その瞬間、悠岐の手に豪華な装飾が施された太刀が握られていた。何故か重傷だった右手のケガが治癒しており、体中の擦過傷や痣もきれいになくなっていた。

（力が湧いてくる……これならいける！）

「いくぞ！宗三左文字」

かつて幾人も戦国時代の英雄を渡り歩いた名刀の名を叫び、トラツクに向かった雑魚を蹴散らす。

力を増した悠岐を倒そうと矢を持つ化物が高速の「矢」を発射しようとした瞬間、空から×シウルシウル×という風を切る音が聞こえてきた。

数秒後、少し離れた場所で、遠距離から矢を放ち悠岐達を苦しめていた化物が爆音とともに煙と炎に包まれた。

「あれは……」

矢の化物だけでなく、後ろや橋の外を囲んでいた化物や、合体を始めていた化物も煙と炎に包まれる。

「あれは自衛隊の特科大隊のりゅう弾砲攻撃だぞ……」

「自衛隊？四国の陸自か」

この攻撃にいち早く気付いたのは同じ自衛官の父親達だった。

「しかし我々の兵器は効果がないはずだぞ……」

護衛艦の機関砲も、主砲も効果はなかった。自衛隊のりゅう弾砲やミサイルがいかにかに強くて、化物達には効果はないはずだった。

しかし煙が晴れると化物の身体は少しだけ削れており、雑魚の化物は体が半分以上消滅していた。

「効果があるみたいだぞ」

「だけど悠岐が斬った後にみたいに消滅はしないな……」

「おそらくダメージを与えるのが限界みたいだ……」

化物の攻撃に人類の兵器が対抗できることがわかっただけでも行幸だったが、これらどこから飛んでいたのかは橋の入り口で立ち往生している自衛官たちにはわからなかった。

2015年8月31日 16時30分

道の駅あわじから、数門の155mm砲や数量のミサイル車両が兵庫県側に身かつて照準を合わせていた。

迷彩柄のテントの中には通信設備などが置かれており、臨時の作戦司令室ができていた。

「弾着確認。効果あります」

「お〜!」

「特製砲弾は効果があるようですね」

「3週間で5発しか生産できなかったが……」

先ほど発射された5発の155mm砲弾は、四国にいる国津神を祭っていた神社に所属している数百人の神社関係者の祝詞によって特別な効果を与えられた砲弾であった。

すさまじい労力と時間をかけた砲弾だけあって、現代兵器が無効化される化物に対して効果を發揮していた。

「敵、再生しつづあります」

しかし、効力はあくまでダメージを与え、動きを一時的に止める程度の効果しか發揮できなかった。

「時間は稼いだ。あとは勇者にまかせるしかないか」

「巫女」と「勇者」の力を信じるしかなかった。彼女達の力は化物を確実に消滅させる力があり、対化物用の切り札のような存在であった。

淡路島側の橋の上には自衛隊の車両数両と、栗色に近い金髪のポニーテールをなびかせた少女と、美しく長い黒髪をなびかせた少女がいた。

「橋の入り口では私たちと同じ力を持った勇者、巫女が戦っています」

「私も含めればこれで6人だな」

「若葉ちゃんの力は星屑を倒すことができます。でも進化体に対しては効果がそこまでありません」

「わかった。いつてくるよ、ひなた」

ポニーテールの少女がうなずくと、猛スピードで絶望的な戦いを続けるまだ見ぬ仲間の下へと向かった。

「いつてらっしゃい、若葉ちゃん……」

神戸市側にいる悠岐達は相変わらず、道路を塞いでいる、角を持つ化物と、ムカデの化物の対処に苦戦していた。遠距離から攻撃を仕掛けている矢の化物がいなくてもましではあるが、決定打にかけてしまっていた。

「倒す必要はない。せめてひるませることができれば……」

ムカデの化物の巨体を恨めしそうに眺めていると、化物の身体の一部が切断される。

「助けに来たぞ!!」

後ろから現れたのは悠岐と同じような太刀を持った一人の少女だった。

角の化物の攻撃を防いでいた悠岐は突然の遭遇に驚くが、すぐに味方であるとわかった。

「私がこいつの角をはじく。あなたは本体を攻撃して!」

「了解だ」

悠岐が刀を下から上に振り上げ、鋭い角を上にはじくと、跳躍した少女が回転しながら

ら勢いよく太刀を化物の角の根元に食い込ませ、そのまま道路上にたたき落とした。落とした衝撃で道路を舗装しているアスファルトが破壊されるが、高架そのものにはダメージはなかった。

「今だ、走れ！」

この瞬間を逃すまいと、トラックの後ろや中で避難していた千尋たちが走り出している。

「ケーブルの起点から向こうは安全圏だ。急げ!!」

明石海峡大橋の神戸側の入り口のケーブルの起点にはコンクリートで造られた橋脚がある。そこからケーブルが300メートルの主塔につながれている。

「ムカデをやるぞー！」

「了解した」

行く手を阻むムカデのような化物に対して攻撃を行うことを提案する。

悠岐が納刀し、両手で刀の鞘の先を握りしめた。地面と垂直に身体と水平に構え、大きなテイクバックから振り下ろすようにスイングをし、ムカデの下半身部分を叩いた。

「え!!」

ポニーテールの少女が驚いたように悠岐を見るが、スイングが見えないほどの速度でふり払われた一撃は、ムカデの下半身の支えを崩し、道路上に横倒しにすることに成功

した。

「今だ！」

「うおおおおおおお!!」

叫び声と共に、少女が太刀を振り下ろし、人間の手のような形をした不気味な部分を切り裂いていった。

ムカデの化物がポニーテールの少女に斬り払われているのを片目に道路を全速力で千尋たちが通り抜け、安全圏へと退避していく。

彼女達を逃がさないとばかりに再生が完了した矢を持つ化物が「矢」を発射する。

「させない！」

悠岐と少女が飛んできた矢を刀や鞘でいなした。悠岐はついでに「矢」の向きを微妙に調節し、倒れている角の化物に突き刺さるように調整していた。

「す、すごいな……」

「あなたもきれいな剣技だよ」

お互いの技術を褒め合う時間もなく、大量の白い化物が二人を押しつぶそうとしてきた。

「さすがにこの数では……」

物量に押しつぶされかけた悠岐は一步引きながら刀を構えるが、少女は余裕の表情を

していた。

「ついでこい！」

少女が悠岐を手招きし、橋の入り口へと誘導する。

「もう大丈夫だ」

「大丈夫って……まだ敵は大量にいるし、いくらでも増えるよ」

多すぎて白い壁のようになった化物が悠岐達に迫りくるが、二人の数メートル先で何かに阻まれるかのように動きを止められたのであった。

「これは……」

「これは結界だ」

「結界ってマンガとかにあるあの結界？」

「マンガかどうかは分からないが、神樹様が化物から四国の人々を守るために造った結界だ」

（神樹様？結界？）

聞きなれない単語に悠岐の頭は混乱していた。

ふと後ろを見ると、迷彩服を着た人達に救出されている千尋たちがいた。

「ここでは長話はできないだろうし、私たちの本拠地に来てほしい」

「……わかった。いろいろと聞きたいこともあるし、ゆつくりと話ができる場所がほし

い

「ではいこう」

二人が後ろの結界に防がれて中に入れない化物達に背を向け、橋を渡っていく。

「そういえば自己紹介を忘れていたな」

「?」

改まって少女が悠岐に話しかける。

「私の名前は乃木若葉。ようこそ四人類最後の昔国へ」

どこか似通った二人の少女の出会いはこのときから始まったのであった。

諏訪と四国と勇者

2018年7月30日 13時30分

一人の少女が明石海峡大橋の地上300メートルの主塔の上に立っていた。彼女の眼の先には荒廃した兵庫県の沿岸部が広がっていた。日本でも有数の大都市だった神戸、大阪の町並みは見るも無残に荒廃していた。

3年前のあの惨劇以降、明石海峡大橋の向こう側は人類の領域ではなくなったのだ。

その原因である白い化物とその進化体を人類はバーテックスと名付けた。『頂点』という意味を与えられた化物は数週間で人類の文明を破壊しつくした。今、人類が生存している場所は四国と諏訪などの一部の地域だけである。

「あれから3年か……」

悠岐の母親も、親友の両親も、父親の同僚も、人類の誇りもすべて化物に奪われた。そのような状況の中で、悠岐を含む数人の少女が超常的な力を手にし、化物と戦うことになった。

悠岐は高校1年生になっていた。中学1年生だったあの時に比べて、身体も大きくなった。武器の使い方も、身体の使い方も学び、戦闘能力は上がっている。

「私は忘れない、決して忘れない」

「あいつらがいる限り、戦い続けることを」

悠岐が呟くと、後ろから可愛らしい声が聞こえてきた。

「悠岐。そろそろ丸亀にかえる？」

声の主は千尋だった。京都から共に戦ってきた親友であり、戦友でもあった。彼女は戦闘員ではないが、立派なお役目を果たしている。

「悠岐は多くの人を救ったよ。少なくとも私と、悠岐のお父さんたちは」

「そうか、そういつてくれるだけでもありがたいよ」

地上300メートルの風は強い。二人はふきつける風に髪をなびかせながら結界の先を見続けていた。

しばらくすると、悠岐のスマホに着信音が流れた。

「そろそろ丸亀に帰るか」

「休日とはいえ、宿題も多いしね！」

二人は話しながら主塔を降りていった。

2018年、人類の生存は数人の少女にゆだねられていた……

2018年8月31日

香川県丸亀市にある丸亀城の夏の冷房が効いたとある部屋の中に膝枕の上で眉間にしわを寄せた少女がいた。

「むむむ……」

「また固いことを考えていますね。そんな若葉ちゃんには……えい！」

黒髪の美少女が右手に持った耳かきを金髪ポニーテールの美少女の右耳の中に入れる。二人の名前は、黒髪がひなたで、金髪が若葉である。私のかわいい後輩にして戦友である。

「ちよつ、ああああ〜」

私は香川県丸亀市にある丸亀城のとある部屋の中で、戦友の蕩けた声を聞いていた。変な声を上げているのは私の戦友である。普段は凜とした顔で、周りを引つ張るリーダー気質の彼女も、彼女の親友であるひなたの耳かきの前には何の抵抗もできなかった。

「ああ〜若葉ちゃん……かわいいです。悠岐さんもしっかり撮ってくださいね」

「了解した」

私は後輩達の耳かきの写真を撮っていた。耳かきをしているひなたにお願いされたからだ。

「ひなた！それに悠岐さんも、って写真を撮らないでくれ」

私がスマホをかざして、パシャパシャと写真を撮っていることに気づいたのか、赤面

しながら私に辞めるように言ってくる。

「若葉もこうやってストレスを発散していたのか……」

「若葉ちゃんは考えすぎてしまうことが多いですからねえ。こうやって適度にゆつくりさせてあげるのも親友の役割ですね」

私とひなたが耳かきの効果について話をしていると若葉が咳ばらいをしながら立ち上がる。

「ひ、ひなたの耳かきは特別なんだ。なんというか、抗えないというか、すべてをさらけ出してしまうような……」

「私もやってみようかな?」

「残念ですが、私の耳かきは若葉ちゃん専用です」

「ですよね〜」

後で千尋にやってみよう。

「そろそろ諏訪との交信時間では?」

時計を見ると時計の針は、遠くで戦う戦友との大事な交信時間に近づいていた。

「そろそろ行かないとな」

「私も久しぶりに歌野と話したいし、ついていくよ」

「私は先に出口で待っていますね」

耳かきをしていた部屋から出たあとひなたと別れ、通信機のある部屋へと二人で向かった。

私たちがいる丸亀城の中の一室に、大きな通信機が置かれている部屋がある。ここはある場所と交信を行う通信室（放送室）となっている。

若葉が慣れた手つきで機械をいじると、通信機が起動し始める。

「さて、そろそろ時間だ」

私と若葉が壁にかかった時計をみると、交信時間になっていた。

『あくあく、こちら諏訪、勇者白鳥歌野です』

通信機の向こうから聞こえてきたのは少女の声だった。

「こちら四国香川県、丸亀城。勇者乃木若葉だ」

「ついでに勇者山田悠岐です」

『通信状況はそこそこってとこね……って悠岐!?! 久しぶりね〜』

「歌野も久しぶりね」

挨拶もそこそこに、現状について報告し合う若葉と歌野。

現在、四国の勇者のリーダーは暫定的に若葉である。歳は私の方が上であったが、カリスマ性とかを考えると正直若葉しか考えられないため、私はリーダーをやっていない。

白鳥歌野は諏訪地方を守護する勇者である。もう一人巫女がいるが、たくさん話したことはなかった。ただ、歌野の楽しそうな話を聞いている限り、友達になりたいとは思っている。

「うーん、そちらも厳しいか……」

『……ね、最近はこちらよと……況もあまりよくありませんし』

私たち四国の勇者は合計6人いる。さらにそれを支える組織やシステムが3年の間に整備されている。一方で諏訪は勇者が歌野1人しかない。これを支える組織やシステムも劣悪で、いつ陥落しても可笑しくない状態だったりする。

そのため、本来であれば、暗い雰囲気にならざるを得ないのだけど……

「そろそろ決着をつけようじゃないか」

『……ええそうね』

「蕎麦とうどん、どっちが優れているかどうかを!!」

「始まった……」

ひなた曰く、二人は状況報告が終わるといつも蕎麦うどん戦争を行っているらしい。

「うどんの方が優れているのは明白」

『蕎麦の方が優れているのは宇宙の法則なのよ』

もちろん若葉がうどん派で、歌野が蕎麦派である。

二人はあれこれおいしきや健康について語るが、決着はつかない。

「そういえば悠岐さんの好みを聞いていなかったな」

『そんなの蕎麦に決まつてるじゃない?!』

何故か私の方に振られてきた。うどんも蕎麦も好きだけど、二人の愛と比べることはできない。

まあ、しいて言えば……

「うどん、かな？」

「やった！」

『えゝそんなあゝ』

若葉が喜び、歌野は残念がっていた。

「やっぱ麺類の王者はうどんだな」

『ううゝ』

ん？私の後輩は一体何を言っているのだろうか。

「麺類の王者といえはラーメンでしょ？何を言ってるの若葉」

私がい言いと、しばらくの無言の後、屈辱的な一言を言われる。

『……ラーメン（笑）』

「いやいやラーメンこそ麺類の王者よ」

「いい？一言でラーメンって言ってもね、いろいろな種類があるの。ベースとなるスープだけでも醤油、塩、とんこつ、鶏がら、みそと何十種類もあるの。それを店によってうまく調合してオリジナリティーを出していくことにみんな苦心するわけ。で、麺や具材でもいろいろな種類があるから、ラーメンは決して飽きることが無いのよ。自分好みの店を見つけた時の感動といったら……」

私のラーメンが王者であるという主張に二人は反論をぶつけてくる。

「それならうどんだってきつねうどんや、肉ぶつかけうどんとたくさん種類があるし、店によって出汁の味は全く異なる。私も好きな店を見つけた時は飛び跳ねて喜ぶぞ」

『聞き捨てならないわね。蕎麦だっていろいろな種類の蕎麦があるし、蕎麦粉の産地や種類が違うだけでも味はかなり異なるのよ。私はちなみに手作り派ね』

うどんも蕎麦も美味しいことに変わりはない。だけどラーメンには敵わないでしょう。

「二度ラーメンを食べてみなさい。あああゝ京都の北白川や一乗寺のラーメンを案内したい……」

「京都のラーメンか……薄味で蕎麦っぽい感じがするが」

『京都ってラーメンが有名なの？寺社が多いから蕎麦が有名だと思っていたけど……』

二人はどうやら京都ラーメンの素晴らしさを知らないらしい。ここは可愛い後輩達

にじっくりとレクチャーをしてあげなければ。

「京都ラーメンが薄口のお上品なラーメンというイメージは捨てなさい！まあ確かにそれを売りにしている店もあるから一概には間違っているとは言えないけど。でも、京都ラーメンの心髄は脂が浮くほど濃厚なスープが特徴的なラーメンなのよ。私は勝手に背油ちやつちや系と呼んでいるけどね。行列を並んでいると、店の外まで臭ってくる濃厚な豚骨臭……たまらないわ。それにね、脂が浮かんでいるほど濃厚なスープだけだね、最後の一滴までスープを飲めちゃうのよねえ」

私はこの後10分ほどラーメンの魅力を語っていたが、長いのでカットする。

「しかしだな……」

『悠岐の故郷って……』

「ああああああ!! 思い出させないで、もうあのラーメンは食べられない……」

私の故郷である京都市はすでにバーテックスに滅ぼされている。私が行った数多くの名店も今は瓦礫の下に埋もれているだろう。

うどんは香川県のソウルフードだし、諏訪も有名な蕎麦処である。つまり二人は、好きな食べ物をいつでも食べることができるのである。

頭を抱えて項垂れる私を見て気の毒に思ったのか、ラーメンの話題を提供する。

「四国にも徳島ラーメンがあるぞ。私は食べたことはないが、おいしいらしいぞ」

『それに全国チエーンの店は四国にあると思うしドンマイよ、悠岐！』

麵派を超えて、慰めてくれることに感謝しつつ、私は二人に語り掛ける。

「ラーメンの味や種類の違いはね、宗教の教派の違いや、共産主義の共産性の違いのようなものなのよ……」

「『……なんか、すいません』」

今回の勝負はラーメンに軍配が上がった。私の尊厳を引き換えに……

その後も3人で楽しくおしゃべりしていると、唐突にチャイムが鳴る。

「そろそろ時間だな」

『今日も楽しかったわ』

「明日から新学期が始まるし、勉強も勇者も頑張りましょう」

若葉、歌野、私の順に言葉を交わす。

「それでは、そちらの無事と健闘を祈る」

『四国の安全を願います』

「ラーメン食べてね歌野」

一番年上なのに、最後まで往生際の悪い私であった。

通信が終わると、私と若葉は機械の電源を切り放送室を出ていく。

歌野は元氣よく振舞っていたがやはり厳しいことに変わりはない。

「どうにかして諏訪を、歌野達を助けに行けないかな……」

「助けには行きたいが、我々は四国を守る使命があるからな、残念だ」

私たちは歌野達のことや、今日の麵類戦争の振り返りをしながらひなたの待つ場所に向かった。

若葉たちと別れ、自分が寝泊まりをしている部屋に入る。制服からスポーツウエアに着替えると、宿舎の庭で刀の素振りを始めた。

雲一つない空は、夕日に染まっていた。しかし、四国の人間にとって、空は恐怖の対象でしかなかった。

3年前のあの日、私たちの敵である化物は空から降ってきた。そのため、化物に襲われた人々は空にトラウマを持つようになった。

『天空恐怖症候群』と呼ばれ、PTSDの症状が現れる病気であった。深刻な場合には、屋外に出ることすら出来なくなってしまうほどの症状になる場合がある。おそらく、潜在的な患者は四国中にいるだろう。

夕焼けを背景に無言で刀を振り下ろしていると、後ろから声が聞こえた。

「やっぱりここにいた」

「いつ戦いが始まるかわからないからな。備えあれば患いなし、だよ」

私の親友である秋山千尋は、私のような戦闘能力を持った少女ではない。しかし彼女は私たちと同じように丸亀城で授業を受けていた。

「神様は、敵はまだ来ないといっているし、まだ大丈夫かな」

「そうか。まあ、一人で過ごしているといういろいろと考えてしまうからな。こうやって身体を動かしているほうがストレスの発散になるからいいんだ」

「そっか」

「今日、歌野と話したよ……」

「本当!? 水都ちゃんは?」

「水都さんは、今日はいなかったみたいだ」

「そっか。あっちもいろいろ大変そうだしね」

「……あまり言いたくはないが、そろそろ諏訪は限界を迎えると思う」

元々諏訪地方の結界は、諏訪大社の上社下社の御柱を中心に広がっていた。そのため、諏訪湖全体をカバーできる大きさがあった。

しかし、幾度もバーテックスの襲来を受け、現在は諏訪湖東南の地域しか安全圏が確保できていないらしい。

「3年間も孤立無援の状態で耐えきっている。余力のある四国が救援に行かなくてはいけないのに……」

諏訪は四国がバーテックスの迎撃を食い止めるため準備期間を確保するための防波堤として機能していることは、高校生の私でもわかることだった。

「私ね、歌野ちゃんや水都ちゃんに会ったらうどんと蕎麦の食べ比べをするって約束したの」

「私もラーメンを食べさせたいと思ってているよ」

「だからね、きつと二人は耐え続けるよ」

「そうだな。だからこそ四国から諏訪までの道のりを耐えきれただけの力を蓄えないとな」

私はこの時に、大社の上層部や父親に諏訪救出作戦を実行すべきであると言い続けられよかったのかもしれない。若葉や千尋だけでなく、他の勇者たちも巻き込んで。そうすれば、歌野と水都だけでも助けられたのかもしれない。だけどそれは歴史のIFではない。

それから数日後、諏訪はバーテックスの総攻撃によって陥落した。

勇者と覚悟

2018年9月1日

諏訪との通信を行った翌日は9月1日。つまり新学期である。最近の学校では、もつと早くから新学期が始まったりするが、私たちの学校は9月1日からが学校のスタートである。

ただし私たち勇者に夏休みなど存在しないため、8月の間もお盆以外はほぼ毎日学校で補習と鍛錬を行っていた。社畜も真っ青である。

私は朝に日課のランニングを行ってから登校するため、いつも始業ギリギリで教室に入る。

教室に入ると、すでにほかの勇者や巫女たちは着席していた。

「悠岐さん、あと少ししたら遅刻です」

教室の一番前には金髪のポニーテールをなびかせた少女が座っていた。彼女の名前は乃木若葉。彼女は居合をやっており、顔つきも姿勢も言葉使いも凛とした少女である。素の部分は意外と可愛かったりする。14歳で中学二年生なので、私よりも二つ学年が下であるが、しっかりしている後輩である。一度共闘した事があり、使う武器が同

じなので、私と結構相性が良かったりする。あとうどん好き

「朝の運動も素晴らしいことですが、無理は禁物です」

その隣には、優しそうな笑みを浮かべる黒髪の少女が座っていた。彼女の名前は上里ひなたである。優雅な立ち振る舞いと顔立ちも整っているので、和風お嬢様という言葉が似合う美少女である。若葉と同年であるが、背丈は小さい。しかし、胸には立派な双子山を有している。若葉の幼馴染にして親友であり、二人の関係は微笑ましいが、彼女の若葉へ向ける目つきや行動が、友人のそれとは思えない時がある。彼女は勇者ではなく、巫女である。彼女もうどん好き。

「悠岐〜！タマを見習って教室に一番乗りしてみたらどうだ〜？」

教室の後ろに、私をいじる小柄な少女が座っていた。彼女の名前は土井球子である。身体の大きさは小柄だが、非常にパワフルである。アウトドアが趣味で、ロードバイクやキャンプ用品が彼女の家の中にはとこ狭しと並べてある。男勝りな彼女であるが、髪を下すともものすごい美少女になるのは私の秘密にしておこう。本人が私にタマと呼べというので私は彼女をタマと呼んでいる。猫みたい。うどん好きである。

「悠岐先輩。おはようございます」

タマの隣には穏やかな声であいさつをするロングヘアの少女が座っている。彼女の名前は伊予島杏である。彼女は中学一年生であるが、年齢は若葉たちと同じ14歳で

ある。ひなたと同じく立派な双子山を有しており、よくタマの嫉妬の対象になっている。少し臆病な性格をしているが、読書家であり、非常に思慮深い一面があるため、割と脳筋が多い勇者メンバーの中では立派な参謀役を担ってくれそうである。あとタマと滅茶苦茶仲がいい。見ていて微笑ましい。うどんが大好き。

「悠岐先輩！おはようございます。朝はお疲れ様です。私もぎりぎり到着でした〜」

窓側の席で、元気いっぱいな声を上げる赤髪の少女が座っている。彼女の名前は、高嶋友奈である。彼女を表すなら天真爛漫にして人たらし、コミユカの化物である。出会って数日で勇者メンバーや巫女たちと仲良くなれるコミユカは才能としか思えない。話し上手でもあるが、聞き上手なのが彼女の慕われる要因なのかもしれない。見た目に反して、武道やスポーツが大好きなので、よく私と若葉と共に早朝ランニングに参加している。今日も一緒に走ったのだが、何故か彼女の方が先に学校についていた。なぜかうどんが好き。

「悠岐さん。遅刻は厳禁よ。年上なのだからね」

友奈の隣には、私に注意を促す美しい黒髪の少女が座っている。彼女の名前は郡千景である。クールな美少女であるが、ゲームがかなりうまい。野球ゲームでよく対戦するけど、歯が立たない。いろいろと事情が複雑であり、初めて会ったときはコミユカ化物の友奈以外に心を開いていなかったが、最近は他のメンバーにも心を開いてくれてい

る。こう見えてうどん好き。

「やつはろくろ！おそいよ悠岐。遅刻したら先生怒るよ〜」

私の席の隣にはギャル風の少女が座っている。彼女の名前は秋山千尋である。京都からの私の友人であり、親友である。一見するとギャルでバカっぽく見えるが、おそらくこの教室内で一番頭がいい。見た目からは考えられないほど思慮深いこともあり、見た目とのギャップが激しい。私と同じ高校一年生であり、教室で一番の双子山を有している。彼女は勇者ではなく巫女であり、同じ巫女であるひなたとも仲がいい。最近ひなたに教わっているのか、最近耳かきの技術が上達している。もちろん私専用だが。小学5年生までは香川に住んでいたこともありうどん好き。

以上の5名の勇者と2名の巫女に私を加えた8名が丸亀城内の教室で授業を受けていた。

丸亀城というお城は、3年前までは観光名所として知られていた史跡であったが、現在は大社という組織が管轄する勇者育成機関となっている。とはいっても城の中を少しでもだけ改装した程度で、城としての外観は変わっていない。ただし、観光客は受け入れなくなつたため、稀に観光に来た人が立ち入り禁止の文字を見て引き返していくのを見かける。

私が席に座ると授業を担当する先生が教室に入室し、午前中の授業が始まる。

若葉たちは中学生であり、義務教育の授業を受けているが悠岐と千尋は昨年中学校を卒業している。そのため、二人は中学生の数学や国語といった授業中は別室で高校生向けの授業を受けている。

新学期ということもあり、最初の授業は、バーテックス関連の授業であった。これは中学生組と同じ教室で受けることになっている。

授業内ではバーテックスについてや、現状の四国について復習が行われた。

西暦2015年7月30日。天の神と地の神が戦った結果、天の神が勝利し、同日中にバーテックスが地球上に出現し、人類への総攻撃が実施された。この攻撃によって人類の大半が死滅し、文明は崩壊した。残存した地の神や土着の神様たちは、より力を発揮するべく、四国へと集結し、神樹様として顕現した。

非常に宗教染みた話であるが、実際に勇者や巫女、バーテックスといった科学では説明できない現象が発生しているので、信じざるをえない。

神樹様に力を与えられた少女たち、それが『勇者』である。なぜ勇者というのかは正直わからないが、バーテックスを殺す力を持つ唯一の存在である。そして、勇者にはそれぞれ武器が与えられている。若葉の刀は『生太刀』と呼ばれており、何らかの神話とかかわりが深いのだろう。他の勇者の武器も似たようなものだった。私の武器は、古事記や日本書紀に登場するような日本神話とはほとんど関係ないので、ちよつと仲間外れ

感が否めない。

この神樹様から授かった力と武器で神樹様を、四国を、人類を守るのが私たちの使命である。

千尋やひなたは勇者ではなく、『巫女』である。正直なところ詳しくは分からないが、神樹様の神託を受けたりするのが役目らしい。二人は巫女の力がとりわけ強いため、勇者たちと行動を共にしているが、巫女は他にも沢山いるらしい。

これらの神樹様や勇者、巫女を管理するのが『大社』という組織である。正直気味が悪い組織ではあるが、旧神社本庁系や宗教法人が合体して誕生したらしい。バーテックスが襲来したと同時にどっから湧いてきたという話もあるので、化物に襲われる前から陰で活動していたのかもしれない。

四国の県議会や市議会、主要政党の支部が一体となって成立させた臨時政府は混乱する四国内の内政に精一杯で、バーテックスに対しては政治的解決が不可能であるとしたこともあり、バーテックス関連の全権が委任されている。そのため、この3年間で非常に強力な権力を有するようになった。

丸亀城を管理しているのも『大社』であり、バーテックス関連の授業は『大社』の職員が行っている。また、私たちの使う装備も『大社』の開発したものであり、邪見にはできないが、あまり深入りしたいとは思えない組織でもある。

授業内の映像では、自衛隊がバーテックス（星屑）に対して攻撃を行っている映像が流れていた。

「バーテックスに現代兵器、というよりも私たち人類の兵器は通用しません」

教師の言葉の通り、自衛隊は星屑に対して銃撃、砲撃、ミサイル攻撃、爆撃など、あらゆる攻撃を行ったが、全くの無力であった。私も舞鶴に行つたとき、湾内にいた護衛艦のほとんどが破壊されているのも見た。

因みに私や千尋が明石海峡大橋で見た自衛隊の砲撃は神樹様の力を使った砲弾だつたらしい。莫大な労力がかかる割に、バーテックスにダメージを与えるだけで、消滅させることができないので、現在は生産していない。

自衛隊であるが、四国に残存した部隊を統合し、四国防衛隊として活動している。善通寺駐屯地を中心とした旧陸上自衛隊の第14旅団が中心であるが、悠岐の父親の舞鶴基地の幹部や、広島県呉市の呉基地から退避した護衛艦の乗員などの旧海上自衛隊も力を持っている。

「現在バーテックスに対抗できる力を持つのは『勇者』だけです。あなた方はこの四国を守る使命があるので」

聞き飽きた言葉ではあるが、四国にいる数百万人の人間の命は、この6人の勇者に託されたといつても過言ではない。私たちが頑張らなければ、私たちが戦い続けなければ

ば、四国は、人類は滅ぶ運命にある。

座学が終われば次は訓練である。

基礎体力向上のためのランニングや体幹トレーニング、それぞれの武器にあつた武術や格闘技の訓練（私なら剣術）、座禅や滝行などの精神的な鍛練を受けている。成長期であるため、無理なオーバーワークは行わなかったが、それでも大変のモノは大変であつた。

剣術だと居合をやっている若葉が一番強かつたが、格闘技だと友奈が強かつたりする。タマも千景も身体能力が高いので戦いの技術は向上しつつあつた。杏は運動が苦手であつたが、彼女の武器は射撃武器なので、そこまで問題ならぬだろう。それにタマの武器が盾でもあるので、彼女が盾として戦えば大丈夫だろう。

訓練後は食堂でご飯を食べる。普段は各々が勝手に食べていたが、今日は若葉の提案で、みんなで食べることにした。千景やタマが不満を示したが、友奈や杏、千尋がみんな食べるとうどんが美味しいという謎理論を展開し、全員で食べることにした。食堂では大社の職員を含め、大人たちが数人いたが私たちが全員で食べたいという、大きな机を開けてくれた。

おのおのが好きな食べ物を注文し食べる。今日は定食の気分なので生姜焼き定食を頼むのだが……

「なぜ毎回うどんなの？」

「「「「そこにうどんがあるから？」」「」」「」」

恐るべき香川県人スピリッツ、って確か……

「千尋や若葉は分かるけど友奈って香川出身じゃないよね」

「私は奈良だよ。でもこつちに来てから若葉ちゃんたちに美味しさを布教されちゃつて」

「ラーメンの布教をすべきだった……」

「ゆ、悠岐先輩！私はラーメン好きだよ」

後輩にかばわれてしまった……

昼食中にいろいろと勇者内での確執が露わになったが、いつものことだったので、あまり深入りはしなかった。正直、この問題は戦いが始まれば解決すると思ったからだ。

だけど若葉はかなり深刻にとらえているだろう。結構細かいところまで気にする性格だから。

案の定昼食後に若葉から相談を持ち掛けられる。

「私は、リーダーには向いていないのだろうか……」

「リーダーって誰からも好かれればいいってもんじゃないよ」

正直なところ、若葉にリーダーをやらせるなら、幹部自衛官や管理職の人間が受ける

講習ぐらいいは受けさせるべきだと思う。時間がないのは分かるが、彼女は想像以上にリーダーの責務に苦しんでいることを知っているのだろうか。

若葉には人を引く張っていく才能がある。だからこそ『大社』から勇者たちのリーダーを任されているのだが、それをサポートする、後ろから押し上げる存在がいなくて致命的なのかもしれない。

「年齢が一番上の悠岐さんにリーダーを変わってほしいのは正直な気持ちです」

「私はだれかを引く張っていくのは柄じゃないよ。それに私と千尋は『大社』から好かれていないからね」

私と千尋は諸事情があつて、『大社』から一步引いた組織にも属している。そのため、『大社』からしてみれば操りにくい勇者と巫女でもある。

「ただ、今のチーム内の不和はそのうち解決できるとは思う」

「どうしてそう思うのですか？」

「それぞれの戦いへの覚悟の違いがあるから齟齬や不和が生まれているんだと思うよ」
「覚悟、ですか？」

私と若葉にはバーテックスと戦う覚悟ができていた。少なくとも私は死ぬ可能性は必ず頭の片隅には入れている。厳しいことを言うが、杏たちにはその覚悟ができていないのではないかと思う。当然だ。数年前まで普通の小学生だった少女たちに戦う覚悟

なんてあるわけがない。

私と若葉は進化体とも戦い、バーテックスに何度も殺されかけている。戦いの経験も彼女達とは桁違いに上である。

「どんなに嘆いても、どんなに恨んでも、私たちは勇者になった。勇者になってしまった。戦う力を与えられてしまった。何百万の人間の命を背負うことになってしまった。その運命を呪っても勇者を辞めることなんてできない。だから戦って、戦って勝ち続けるしか私たちが生き残る道はないんだ」

「だから、戦いが始まれば自ずと理解するはずだよ」

「私たちには、戦いしかないことが」

これが、私が3年間の戦いと鍛錬の中で導き出した答えだ。神に選ばれた？人類の守護者？きれいな言葉を並べたところで成人にも満たない少女を戦場へと投入することに変わりはない。だったら奴らを皆殺しにして、生き残ればいい。そうすれば私たちはお役目から解放される。

「若葉、あなたは何のために戦う？」

「私は……私は、クラスメイトの命を、人類の誇りを奪ったバーテックスに報いを受けさせる。そのために戦うつもりだ」

乃木家の家訓は恩義や情けには報いを。攻撃されたら報復をである。正直物騒す

ぎる家訓であるが、若葉の強い意志の中には常にこの家訓を意識しているようである。「伊予島杏は性格的に戦いには向いていないかもしれない。だけど自身を救ってくれた球子が戦えば、彼女は絶対に戦うはずだ。二人は助け助けられつつの関係だから。同じことが友奈と千景でも考えられるよ」

正直、友奈の事はほとんどわからない。気難しい千景をあれだけメロメロにしてしまうほどの人たらしであるが、私生活や心の底で何を思っているのが全く読めない。ただ、争いごとや友人同士の不和やいざこざが嫌いらしく、嫌な空気を変えることができず人間でもある。チーム内の調整役としてはかなり有能な人物である。正直サブリーダーは彼女が務めたほうがいいと思うぐらいだ。

「だからさ、戦い始めたらきつとチームはうまく機能するはず。百の訓練より一の実践。もし誰かが怖気付いたなら、私と若葉で敵を蹴散らせばいいだけの話だよ」

「私たちがその身をもって覚悟を示す、か」

「そうそう。で疲れたらひなたに耳かきしてもらえばいいの」

「そうだな、って耳かきのことは忘れてくださいい！」

これで若葉の不安も少しは減ったかな。まあ彼女の心のケアはひなたに任せればいいのかな。

若葉がいなくなり、空き教室には私一人だけになる。

「みんな戦いが始めればわかるさ。私たちには戦うしか未来が無いってことが……」
勇者のメンバーは、誰一人として欠けてはならない。バーテックスを殲滅するために
は、絶対に誰かを失ってはいけない。
戦いはすぐそこまで迫ってきていた。

戦いの始まり

2018年9月中旬

若葉との相談会（仮）の後も私たちはいつも通りの日常を送り続けていた。

授業を受け、鍛錬をし、ご飯（私以外はうどん）を食べ、寝る。この繰り返しだ。

相変わらず、若葉は固い顔をして勇者たちを引っ張ろうと頑張っているが、少し空回りしてしまっている。彼女にはひなたがいるからフォロワーの必要はないだろう。

少し気になることといえば、諏訪との交信頻度が落ちつつあることである。若葉曰く、通信感度も徐々にだが悪くなりつつあるらしい。

歌野は大丈夫だと言っているが、そろそろ覚悟を決めたほうがいいのかもしれない。何度か『大社』に諏訪救援作戦の発動を要請してみたが、結果は見えての通りであった。

9月も終わりに近づき、もう少しで10月になるといふ頃、若葉に渡すプリントを教師から頼まれたため、彼女を探して丸亀城内を歩いていると、放送室から若葉の声が聞こえてきた。普段の凜とした声ではなく、切羽詰まった声だった。

「こちら乃木若葉。白鳥さん！応答願います！」

急いで教室内に入ると、通信機のスイッチをいじりながら、必死に応答を願う若葉の

声が響いていた。

「若葉、諏訪に何があったの!」

「わからない。だが通信がまったくつながらないんだ。いつもなら頑張れば向こうの声ぐらいは聞こえるのに……」

通信機の故障の可能性があるかもと考え、『大社』の技師に通信機を点検してもらったが、通信機や通信に必要な機材に不具合はなく、問題があるとすると諏訪の方であると判断された。

しばらく二人でスイッチをいじっていると、突然ノイズと共にスピーカーから少女の声が聞こえてきた。

『……ザー……野。こちら白鳥……です。四国、乃木……ザー……聞こえますか?』

「こちら乃木若葉、四国の乃木若葉だ!白鳥さん。そつちは無事ですか?」

『よかった……ザー……見たい。大規模な襲撃があつて、通信……ザー……壊れちゃつたみたいですよ』

「山田悠岐です。諏訪は、歌野さん、水都さんは無事なの!」

『……ザー……みーちゃんは大丈夫。私も……ザー……だけど大丈夫ですよ』

今まで聞いたことが無いほど通信のノイズが酷い。しかもいつも明るい歌野の音が酷くか細くなっているのに私と若葉は気づいていた。

『……通信はできなくなりそうです。二人とも……ザー……だと思えますが、くじけないでください。私たちが守った諏訪の3年間を……ザー……にしてください』

「白鳥さん（歌野）」

私たちが叫びながら彼女の応答を願う。しかしもうこちらの声が届いていないのか、彼女は一歩的に私たちに話していた。

『……ザー……約束してください。四国を、人類を守りぬいてくださ……ザー……のこ
とを忘れないでください』

ノイズが酷くて最後の方は聞き取れる言葉の方が少なかった。しかし、歌野の最後の最後の一言は二人の耳に届いた。

『……ザー……後の事は頼みます。3年間ありがとうございました』

最後の一言の後、通信機からノイズしか聞こえてこなかった。

呆然とした表情で放送室から出た私と若葉は、丸亀城の天守閣の最上階から夕焼けの瀬戸内の海を眺めていた。

「白鳥さん達だけでも救出に行けばよかった。私と若葉とひなたと千尋だけでも諏訪にならたどり着けたはずだ」

私が救出に向かわなかったことを後悔する。

「白鳥さんは諏訪の土地も、人々も見捨てたくなかったんだと思います。歌野さんの実

力なら巫女の藤森さんとともに四国へ来ることも可能でした。しかし、彼女達は故郷を守ることを決意した。その決断を私は尊重したいです」

何故か若葉の隣で立っているひなた（いつの間にか若葉の近くにいることがあるが、もう慣れた）が私の発言を諫める。

「そうだな。たぶん白鳥さんは私たちが救出に向かつても、諏訪の人々の安全が確保できなければ四国へ来ることを断っていたと思う。それだけ彼女は諏訪を愛していた」

彼女には故郷を守るといふ使命があった。そしてそれを最後まで貫き通した。おそらく、自分たちが時間稼ぎの囷として扱われていることにも気づいていただろう。

もし私たちがバーテックスを打倒した後、人類の歴史が続いていくなら、後世の歴史家はこう語るだろう。

☒ 諏訪の勇者のおかげで四国はバーテックスを倒せた ☒

だけど私たちは忘れてはいけない。白鳥歌野は四国の囷として戦ったのではなく、最初から最後まで諏訪を守り抜き、そこに住む人たちに元の平穏を与えるために戦っていたということ。

歌野の意思を引き継ぐなんてかっこいいことは言えないけど、彼女と諏訪が作った3年間を無駄にはいけない。

海を眺めていると、悠岐のスマホに着信が入った。着信相手を見て、すぐに通話を開

始すると、恐れていた言葉がスピーカーから発せられた。

『悠岐……たつた今、沿岸警備隊から連絡が入った。化物が四国結界に向けて進行中だ』

「お父さん。諏訪が陥落したよ」

『こちらも千尋くんの神託で確認した。残念だったが……』

「わかっている。ここからは私たち四国の戦い」

『生きて、帰って来い』

『悠岐？バーテックスには進化体がいるみたい。無理しないでなんて言えないけど、生きて帰ってきてね。それに、みんなのこともお願いね』

父親と千尋からバーテックス襲来の電話を受け取った。私の身を案じてくれている。

「わかった。死なない程度に死ぬほど頑張るよ」

私は死ぬわけにはいかない。誰一人として勇者は死んではいけない。そのために最善を尽くすしかない。

私が通話終了のボタンを押すと同時にスマホから耳障りな警戒音が鳴り響く。スマホの画面には『樹海化警報』という文字が表示されていた。少し離れたところでひなたと話していた若葉もスマホからも警戒音が流れている。

あたりを見渡すと、ひなたは時間が止まったかのように停止していた。おそらく、ひなただけではない。千尋やお父さんを含めた勇者以外の四国全土の全ての人、動物、生

物が静止しているのだろう。

海の方を見ると、海から徐々に巨大な植物の蔦や根に町が覆われていく。樹海化が完了すると、そこは四国ではなかった。丸亀城や、一部の高層建築物以外はすべて植物の蔦や根に覆われていた。

「これが樹海……」

樹海化によって樹海と同化した四国の生物は化物からの攻撃を受けることはない。勇者のみが本来通りに動き、戦うことができる。

しかし、神樹様の力も無限ではない。樹海化し続ければ、それだけエネルギーを失う。さらに樹海内で化物が長時間暴れれば、その痕跡は現実世界にフィードバックされる。さらに、化物が神樹様を倒せばその時は人類の滅亡という結果を迎えるだろう。

私の隣では若葉がさつそく青を基調とした勇者装束に変身しており、私もスマホにダウンロードしてある勇者専用アプリを起動し、勇者装束へと変身する。

別にサードビスシーンなどはないが、私の勇者装束は白を基調とし、赤や黄色などの様々な色の線が走っているデザインだった。正直、若葉の桔梗の青と白を基調とした装束の方がかつこいいと思うが、口にしないでおく。

この戦装束は、神樹様の勇者の力を最大限に利用した、対バーテックス用の装備であり、身体能力が桁違いに上昇する服である。『大社』を中心にした人類の叡智の結晶であ

る。さらに、神樹様の力を利用していてもあり、勇者がそれぞれ持つ武器以外の攻撃もバーテックスに通用するようになっていた。

二人が敵を探そうと瀬戸内海の方を見てみると、少し離れたところから二人の勇者がこちらに向かってきているのが見えた。

一人は赤髪と笑顔が特徴的な高嶋さんちの友奈さんだった。彼女は手に手甲をはめており、近接格闘が得意な友奈らしい武器だった。

もう一人は黒髪ロングのクールビューティー、郡千景であった。彼女は大鎌を携えており、失礼かもしれないが一見すると死神のようであった。

二人の後には「おーい！」というパワフルな声と共に小柄な少女とゆるふわな少女が4人に合流してきた。小柄な少女は土居球子。彼女の武器は盾である。盾を使って防衛しながら、盾を投げて敵を倒すというアメコミヒーローの持っている盾にそっくりな武器を使う。本人や『大社』曰く旋刃盤という名前らしいが、盾にしか見えないので、私は盾と呼んでいる。

もう一人のおびえた顔をしたゆるふわ少女は伊予島杏である。彼女の武器は連射式のクロスボウである。クロスボウというと一発の威力は高くて、連射に不向きであると思うが、彼女のクロスボウは神の力が宿っており、マシンガンの如く連射が可能である。またエネルギーを溜めれば、遠距離狙撃も可能なので、勇者の中では結構重要な戦力と

もいえる。

以上の6名がこの樹海の中でバーテックスを迎撃するメンバーであった。

「これで全員揃ったな。これが私たちの初陣となる」

「今回の敵は威力偵察程度らしい。進化体は矢型のモノだけで、あとは星屑が100体ほどであると沿岸警備隊から報告が入っている。ただし、星屑が融合すれば進化体になるため気を付けたほうがいい」

一応勇者各員のスマホに敵の詳細が送られているらしいが万が一と再確認を兼ねて、若葉の言葉の後に敵勢力の確認を行う。

「……伊予島さんをこのまま前線に出すつもりなの？」

「二人とも殺気というか闘気を出し過ぎて怖いよ」

私と若葉がそのまま突撃しそうだと思った千景や友奈から反論の声上がる。やる気スイッチが二人とも入りすぎていたらしい。

タマの後ろにいる杏を見ると、その体を細かく震えていた。

「とりあえず、現状変身できるメンバーは変身しよう」

取り敢えず、戦装束に変身しなければ、何も始まらないと考えたのか、他の勇者たちに変身することを促す。

「……わかったわ」

「わかりました！」

「わかったぞ」

了承の声と共に三人は戦装束へと変身する。千景は彼岸花を思わせる紅を基調とした戦装束に、友奈は山桜の花を思わせる桜色を基調とした戦装束に、タマは姫百合を思わせる橙を基調とした戦装束にそれぞれ変身した。

唯一杏だけが、変身できなかった。勇者の力は勇者本人の精神状態に大きく左右されるため、戦う覚悟と意思が固まり切らない杏では変身は難しいかった。

このままだと杏が罪悪感や恐怖心でさらに精神面に悪影響が出そうである。

ただ、彼女の精神が落ち着く時間はバーテックスは与えてはくれないようだった。

「バーテックスが来たぞ」

若葉の指さす方には白く醜い化物が蠢いていた。

「とりあえず、私と若葉で攻撃を行う。タマは杏の護衛。千景と友奈は私たち、タマたちがピンチになった時に援護してください。二人は遊撃班と考えてください」

「ちよつと勝手に、「時間がない、文句があるなら最前線で私と戦う？」はあく、わかったわよ」

最初だからちよつと強引に推し進める。タマは杏を守りながら戦ったことがある経

験者である。友奈は正直戦闘経験があるのかわからないけど、たぶん問題ない。千景は杏と同じで初の実戦だと聞いている。たぶん彼女は不安なのだろう。厳しい言葉はその裏返しである。

そんな彼女を私たち二人と共に最前線で戦わせることはできない。

「友奈。千景のことを頼んだよ」

一番の親友に任せた方がいいだろう。友奈と一緒になら千景は絶対に大丈夫なはずだ。

「高嶋友奈、了解しました！ぐんちゃん、一緒に頑張ろう！」

「え、ええ高嶋さん頑張りますよ」

これで二人は大丈夫だろう。

あとはタマと杏だけど、杏は☒いい娘☒だ。だから親友である球子が、3年間共に高め合ってきた勇者のメンバーが戦っている姿を見れば、絶対に戦いに参加するだろう。親友が、友人が戦っていて、それを見捨てることは絶対にできないはずだ。たとえこの戦いで変身ができなくても、何度かバーテックスと戦っているうちに覚悟を決めてくれるはずだ。

「まあ、こんな偉そうに言っている私が真つ先に死んだらお笑いね」

「縁起でもないことを言わないでください……」

遠くに見えていたバーテックスが徐々に近づいているのが見えた。2キロほどに近

づいたとき、私と若葉は一気に駆け出した。

樹海化した蔦や根を踏みしめ一気に跳躍し、猛スピードの勢いそのままに、納刀したままの太刀を振り払った。

一瞬で数体の星屑が吹き飛ばされ、消滅する。空に浮かぶ化物を跳躍しながら切り裂き、次々と消滅させていった。

「うおおおおおー！」

すぐ近くでは若葉が星屑を次々と屠っており、戦闘開始数分で35パーセントほどを削り取ることが出来た。人間の軍隊なら撤退しても可笑しくない損害だが、パーテックスに撤退という言葉はないようで、物量で押しつぶそうと、私と若葉へ突進を繰り返してくる。

私たちの戦闘域から少し離れた場所で星屑とはまた別のパーテックスが二人の間を付いて攻撃を行おうとしていた。矢のようなものを発生させた進化体のパーテックスは若葉が抜刀を終え、化物を斬り裂いた瞬間に「矢」を発射した。高速で迫りくる「矢」は若葉を貫くはずであったが、私は「矢」の発射に気づいていた。3年前にあれだけ苦戦を強いられた敵である。忘れるはずがなかった。あいつはこうやって遠距離から「矢」を撃ち込んでくる厄介な敵である。

そして、その「矢」がこちらにとって攻撃の手段になることも知っている。

「お前のその「矢」、利用させてもらおうぞ！」

私が刀で「矢」をいなす。金属音が響くと同時に、刀身に火花が飛び散り、「矢」の軌道を変えることができた。「矢」は若葉への直撃をコースから外れ、若葉に襲い掛かろうとしていた星屑に命中した。

「あれは邪魔ね。それに杏達に「矢」が飛んでいくと困る」

「そうだな。では倒そう」

「了解！」

星屑の包囲網を跳躍で飛び越え、離れて狙撃を行う矢の進化体に肉薄する。

途中数発の「矢」が二人を掠めたが、最小限の動きで回避し、肉薄する。私と若葉が同時に抜刀し、進化体の周りに浮いている矢のような部分を斬り、消滅させる。

私はそのまま左手に刀を、右手に鞘を持ち、進化体の本体を下にたたき落とす。下に落とされた進化体を待ち受けていたのは、居合の構えをしている若葉であった。

「一閃緋那汰！」

若葉の叫びと共に抜刀された『生太刀』によってパーテックスが真っ二つに斬られる。

何その恥ずかしい技名……

「やったぜ！」

「よー！」

進化体撃破を祝ってハイタッチをしていると、私たちに危機感を覚えたのか残っていた星屑が融合を初め、進化体になり始める。

「あれは、初めて見るタイプだね？」

私も見たことないタイプだった。一見すると「矢」のタイプや角のタイプに比べたら脅威度は少ないように思えるが。

「悠岐さん、どうしますか。とりあえず斬ってみますか？」

若葉が口元をにやりとしながら私に提案する。ちよつと怖いぞ。

「さすがにあれがどんな性能かわからないから、肉薄戦闘は避けたいな……」

「伊予島のクロスボウが遠距離武器ではあるが」

視力を強化して、杏のいる場所を見るが、彼女はまだ変身していないようだ。タマは盾（旋刃盤）を投げながら杏を守っていた。千景と友奈は二人で進化体に合体し損ねた星屑の残党を倒していた。

「仕方がない、こんな事もあるうと用意してきたこいつを使おう」

私は足元から携帯対戦車兵器を取り出す。

「え？ゆ、悠岐先輩、それって？」

「ん？パンツァーフアウスト3。対戦車兵器だよ」

「そういうことは……」

「あ、後ろにいると危ないから離れてね」

「いったいどこから……」

発射器に取り付けてある照準器の照準を定め、引き金を引く。無反動砲なので、大した衝撃なく発射される。弾頭は、発射後に安定翼が展開してロケットモーターに点火、加速しながら飛翔していった。

戦車を撃破できる能力を持つ対戦車弾は、棒状の化物に直撃することなく、化物の前で信管を作動させ、爆発した。棒状のバーテックスから赤く透明な板状の組織が発生し、そこに当たった弾頭が爆発したのだった。効果があるとは思っていなかったが、あのバーテックスの特徴がわかっただけでもよしとしよう。

「棒状のバーテックスの特性は『防御』もしくは『反射』だな。おそらく遠距離武器はすべて反射されるか、防がれる可能性が高い。杏の武器とはかなり相性が悪い……」

「先に矢のバーテックスを倒しておいて正解だな」

防御に特化したバーテックスってことは、耐久力も高いんだろうなあ……

「さて、どうすべきか……」

「ここで切り札は使いたくない。」

出来れば勇者全員の飽和攻撃で倒せればいいのだが、今は難しいだろう。

棒状のバーテックスをみながら対策を考えていると、一人の勇者が猛スピードでバー

テックスに肉薄していた。桜色の戦装束を着ている高嶋友奈である。

「友奈？つてまさか!？」

あれを使う気か？

戦いの始まり 2

バーテックスとの戦いが始めると、若葉と悠岐がバーテックスに突撃していき、星屑を次々と蹴散らしていった。その様子を友奈達は樹海化を免れていたビルの上から見ていた。

「それじゃあ、私もいくねー！」

二人の後に続き、友奈がバーテックスの集団に突っ込んでいく。

「うわー、若葉ちゃんたちすごいなあ。私も頑張らなくちゃ」

二人の暴れっぷりに関心しながらも、友奈が若葉たちの撃ち漏らしの星屑たちを鍛え上げた格闘技で次々と倒していく。友奈はボクシングや空手といった格闘技から、自衛隊や警察組織などの武装組織で訓練されている戦闘格闘術も鍛練していた。

3人が最前線でバーテックス相手に無双をしている中、後方で戦いを眺めている者がいた。変身できず、戦闘能力がない伊予島杏、その杏の護衛をしている土居球子、変身はできたものの、なかなか一步を踏み出すことができない郡千景であった。

千景は3人が激烈な戦いを繰り広げている場所に行くことができなかった。足がどうしても動かなかったのである。

「私は、情けない」

若葉は言葉通り、自ら敵に突撃し、多くのバートックスを屠っていた。悠岐と協力して、3年前には倒せなかった進化体のバートックスも倒していた。一方の千景は、戦うことへの恐怖心から、動くことができなかった。

「ふふ、あれだけ威張っておきながら結局私は動けないのね……」

「あの頃と、何一つとして変わっていないじゃないの」

友奈以外に対して当たりが強かったのは自らの恐怖心や劣等感の反動であった。そのことは千景自身にもわかっていたことだったが、なかなか素直になることはできなかった。

ふと後ろを見ると怯えながら球子の後ろで隠れている伊予島杏の姿が見える。自分も怖くて動けないのに、杏のことを非難する資格などなかった。

「い、伊予島さん、さつきはごめんなさい」

「郡さん……」

「私も動けないの……あれだけ乃木さんに嘯みついておきながら私は戦うことができない」

自分は中学3年生で、勇者の中では2番目に年上である。それなのに、中学1年生で2学年も下である杏に強く当たってしまったことを謝れないほど、千景は恥知らずでは

なかった。

「自分を卑下しないでください……私なんか変身すらできていませんから」

「ごめんなさい……」

「でも郡さんにも頼れる味方がいますよ。若葉さんや悠岐さん。それに、友奈さんも」

杏が指をさす方向を見ると桜色の人影が高速で接近してきていた。

「ぐんちゃん……!!」

声を上げて、二人のところへ向かってきたのは、友奈であった。バレーテックスを戦っていたこともあり、少し息が上がっており、ところどころに擦過傷が付いていたが、まだまだ元気一杯であった。

「ぐんちゃんが来ていなかったから心配になって。大丈夫？」

「高嶋さん、ごめんなさい……私、怖くて……」

「ぐんちゃんは実戦は初めてだもんね。仕方がないよ」

「あれだけ見栄をはったのに、この体たらく……死にたくなるわ。乃木さんや悠岐さんはあれだけすごいのに」

千景と友奈は、すでに大半のバレーテックスを撃滅した二人の勇者の方を見る。

「あの二人は戦闘民族だから参考にしないほうがいいとタマは思うけどな」

旋刃盤を投げて、杏や千景に近づいてきていた星屑を倒していた球子が敵の襲来がひ

と段落したこともあり、杏達の下に駆け寄ってくる。

「居合をやっている若葉さんは分かるとして、悠岐さんってなんであんなに強いのかしら……」

「うーん。格闘技とか剣術だと、私や若葉ちゃんの方が強いけど、純粋な力や体力だと先輩が一番強いよ」

「意外だな。タマてつきり杏タイプかと思ってたけど」

「タマっち先輩。それって私が本しか読まない根暗なオタクって意味で言ってますか？」

杏が少し声のトーンを落として球子に詰め寄る。

「そ、そういうことじゃないぞ。ただ、二人とも図書室が似合いそうなタイプってことだけだ」

話題に上がった悠岐を見ると、どこからともなくバズーカ砲のようなものを取り出し、棒状の進化体バーテックスに発射していた。

高速で飛翔する弾が棒状のバーテックスに命中するが、バリアのようなもので防がれてしまった。

「シールドね。あれでは飛び道具は効かないわね。刀も通用するかどうか……」

「結構固そうだね」

千景と友奈が敵の性能を観察しながら話す。

「だったら、私の拳で叩き潰す！」

「高嶋さん！」

「ぐんちゃん！ちよつと待っててね。あのバーテックスを倒してくるから」

「ええ！ちよつと待って」

「私の力ならあいつを倒せるよ。そうすれば戦いはすぐ終わるから」

千景に言い残すと、猛スピードで跳躍し、そのまま棒状のバーテックスに手甲をはめた拳を叩き込んだ。

「勇者。パーンチ」

安直なネーミングであるが、星屑なら瞬殺できる威力を秘めた拳は、進化体のシールドのような組織に当たった。しかし、シールドには傷一つ入っていなかった。

「だったらこれで！」

戦装束や勇者の使用する武器のほかに、勇者にはもう一つの戦うためのシステムが組み込まれている。それはまさに切り札といってもいいシステムであり、使えば通常の何倍もの力を引き出すことができる力であった。

「力を貸して！『一目連』」

国津神や土地神の集合体である神樹様には、膨大な量の民間伝承の記憶が宿ってい

る。その中で、自分に最適だと思いう記憶を抽出し、自らに与えることが勇者には可能であった。その中で、友奈が選択したのは稲光や暴風雨をもたらす暴風神である『一目連』であった。

台風の如くすさまじいパワーと速度を得た友奈は、猛烈な速度で、両手の拳をバテックスに叩き込み始めた。

「この力があれば……」

私は圧倒的な力を見せつけている同僚の勇者を見ていた。

「あれが精霊の憑依させるってことなのか」

隣で若葉が驚いていたが、あまり好ましい状況ではなかった。

この精霊システムは、莫大な力を得る代わりに、体力や精神力をこっそりと奪われるシステムである。まだ解明できていない部分も多いため、できるだけ使用は控えるように千尋やひなたから言われていた。

「友奈……」

友奈は誰かが困っていたり、悲しんでいるのを嫌がる性格の持ち主だ。だからこと率先して敵を叩こうとしているのだろう。

「本当は使いたくなかったけど……」

私に力を与えてくれる神様はちよつと特殊だが、一応は神樹様の一員として四国を守護しているらしい。私の戦装束を通じて、神樹様の記憶を探る。

ふむ、刀を使うならこいつがいいかな……

「ハッ！ 『宮本武蔵』」

多くの決闘に勝利し、多くの演劇、小説といった様々な作品の題材になった二刀流の剣士の力を顕現させる。

圧倒的な力と、二刀流に関する知識が頭の中に流入し、頭痛が走るが、耐えられるレベルである。

地面を蹴り、勢いをつけて一気にパーテックスに肉薄し、友奈の攻撃で傷がついていた場所を一気に斬りつける。亜音速に達した一撃によって、シールドに深い傷が入った。そのままもう片方の手に持っていた鞘を傷が入っている部分にフルパワーで叩きつけた。それを繰り返し行くと、シールド組織はボロボロになっていた。

最後の攻撃とばかりに、友奈が猛スピードでパンチを進化体の身体に加えると、進化体の身体はボロボロにひび割れ、バラバラになって消えていった。

進化体を倒すと、すぐに近くにいた残党の星屑を一瞬にして片づけ、残党狩りは終了した。その途中に若葉が問題行動をしたが、後で追及することにしよう。

しばらくすると樹海には化物一匹いなくなっていた。

「作戦終了」

「悠岐先輩！勝利のはいたーっち！」

「いえーい！」

友奈のノリに突き合ってしまったが、私も友奈も息が荒く、目や鼻から血が流れていた。

精霊を使った代償は大きかったらしい。だが、これなら何日も昏睡する必要はないだろう。

戦闘がすべて終わり、私と友奈の下に他の勇者のメンバーが集まる。

「高嶋さん!?大丈夫なの」

「悠岐さんも大丈夫ですか?」

千景と杏が私と友奈の状態を見て困惑していた。

「私は大丈夫だよ」

精神的にも肉体的にも疲れていたが、倒れるほどではない。それよりも……

「若葉、あなたはバカなの?」

若葉は何故かバーテックスを斬った後にその体の一部を口にしたのである。本人曰く味の悪いイカのようなものであり、食べたものではないらしい。

「バーテックスは白鳥さんやみんなを食い殺した。だから奴らにも同じことを……」

若葉の家は普段一体何と戦っていたのだろうか。この武士娘はバーテックスの襲来が無ければどんな人間になっていたのだろうか……

樹海化が解け、丸亀城に戻ると、今日の戦闘報告を若葉が『大社』に行く。私と、友奈は精霊の行使の影響を調べるために、検査入院することになった。若葉も戦闘で負った傷を病院で治療してもらっていた。

次の日になり、病院のベッドの上でお見舞いに来た千尋とひなたの巫女コンビに、昨日のバーテックス戦について話した。

「若葉ったら星屑を口にしたみたい。あの娘って生まれる時代を間違えているんじゃないの？」

「若葉ちゃんはいいい意味でも悪い意味でも極端だからねえ」

「それが若葉ちゃんのかわいいところです。バーテックスを食べるのはいただけませんが」

「どうやら若葉はひなたに雷を落とされたらしい。さすがの野武士娘も幼馴染には頭が上がらないらしい。」

「友奈さんですが、悠岐さんよりも肉体的、精神的なダメージが大きいようです」

「二人とも同じように精霊の力を使ったのよね。でもなんで？」

「おそらくだが、顕現させた精霊の質によつて勇者にフィードバックされる負担量も変わるのだと思う」

私は『宮本武蔵』という400年前の実在した剣士の記憶を利用した。一方の友奈は『一目連』という稲光や暴風雨をもたらす暴風神を利用していた。精霊の質としては圧倒的に『一目連』の方が上である。一目連は知名度は劣っているかもしれないが、神格も有している。

「つまり、あまり強い精霊を使わないほうがいいことになりますね」

「それはそうだが……」

このレベルの戦いであれば、勇者の連携能力を強化していけば問題ないだろう。しかし、進化体の更なる進化体が現れた場合、強力な精霊を利用する必要があるだろう。

「それでは、私たちは友奈さんのお見舞いがあるのでお先に失礼します」

「ゆっくりしていいってね、悠岐」

二人が友奈の部屋に行き、病室には私一人だけになる。

「友奈……」

今回の戦いでも彼女は真つ先に精霊の力を行使していた。それもかなり強力な精霊を顕現させた。今後の戦いでは友奈に無理をさせ過ぎないように注意したほうがいいかもしれない。

友奈が倒れれば、千景に影響が出る。それに、勇者の中でもっともコミュニケーション能力が高く、空気が読める友奈がいなくなるとチームワークに支障が出るだろう。

病室のテレビをつけると、昨日の勇者たちの活躍を報じていた。四国のテレビ局、新聞社などのマスメディアが次々と勇者を讃えていた。人々は私たちのことを英雄扱いしていた。

諏訪地域もバーテックスの襲来から逃れていたことも報道していたが、諏訪が陥落した可能性が高いという報道は行っていないかった。

「報道統制ねえ。『大社』の力は強くなったものだよ」

胸糞が悪くなったためテレビを消し、今回の戦いの報告書を作成し始めた。一応『大社』には若葉が報告を行っているが、私は父親達に提出する必要があるためだ。

「若葉のバーテックス食いは報告したほうがいいかな？」

一通り書き終えた時にはすでに消灯時間となっており、私は戦闘の疲れや精霊の力の影響もあり、すぐに就寝した。

2日後に私は退院することが出来た。友奈も私が退院した数日後に退院しており、身体のダメージは完全に消え切っていた。

最初の戦いから一週間後には、通常の日常が戻っていた。いつも通り昼食を食べよう

と食堂に向かうと、珍しく人がいなかった。

「今日はみんな忙しいのかな？」

誰かいないか探していると、食堂の調理室からエプロンを着たポニーテールの少女が出てきた。

「悠岐さん、今蕎麦を作っているんだ。これが結構難しくてな」

「若葉ちゃん。火から離れてはいけませんよ」

「どうやら調理室にはひなたもいるらしい。」

部屋に入ると、蕎麦の香りが充満していた。奥には蕎麦打ち包丁を巧みに使いこなした蕎麦をひたすら作っているひなたがいた。

「若葉が蕎麦つて、バーテックスとの戦闘で頭でも打ったの？」

「私は正気だ！失礼な……」

「だってうどん王国の王子様つて言ってたし」

「私はそんなことは言ってません」

「冗談は置いておいて、蕎麦は歌野のため？」

「……そうです。せめてもの弔いに」

諏訪を3年間守護し続けた勇者、白鳥歌野。蕎麦王国の主にして、諏訪を愛した勇者だった。結果的ではあったが、彼女が3年間バーテックスと戦っていたおかげで、四国

は迎撃隊背を整えることが出来た。

声しか知らない仲であったが、間違はなく私たちの戦友であった。

「……みんなを呼んでくるよ。『大社』の職員も。いま城にいる人全員」

「さすがにそんな量は作ってませんよ」

「ほかの勇者のメンバーを呼んでくるよ。足りないならスーパーで麺を買ってくる」

私が教室に残って課題をこなしていた千尋、千景、友奈、杏、タマに声をかけた。全員うどん王国の人間だったが、蕎麦造りも興味があるらしく、協力してくれるようだった。

調理室に置いてあった蕎麦粉（若葉がどこからか調達したらしい）だけでは時間も人でも足りないのです、近くのスーパーで蕎麦の麺と麺つゆを大量に購入した。

若葉たちが調理を行う間に、私と千尋とひなたで『大社』の面々に、今回の若葉の開催する蕎麦会に参加する様にお願ひした。諏訪には思うところがあるのは私たちと変わらなかつたらしく、特に反対はされなかつた。

しばらくすると、『大社』の職員や勇者、巫女が食堂に集合し、蕎麦が全員に配られていた。かけそばであったが、それなりに美味しそうな出来栄であった。

千景と友奈が作つたらしい、壇上の上に若葉が立つと、食堂内の全員が彼女を話しを聞き始めた。

「みなさん。今日は集まっていたいただき、ありがとうございます」

「いつもならお昼はうどんを食べるのが当たり前なのですが、今日は蕎麦を食べたいと思います」

「いつもうどんを食べているのは勇者や巫女だけではない。『大社』の職員も昼ご飯はうどんを食べている。ラーメンや定食を食べるのは私ぐらいである。」

「諏訪の勇者の白鳥さんとのやり取りが切っ掛けで、皆さんと蕎麦と食べようと思いましたが」

「周知のことかと思いますが、諏訪地方はつい先日バーテックスの攻撃によって陥落しました。同時にそこで戦っていた勇者の白鳥歌野さんも亡くなった可能性が高いです」

「彼女は蕎麦が大好きでした。うどんを愛している私に、蕎麦の魅力をたびたび伝えてくるほどです」

「いつか私は彼女とうどん、そばを食べ合いたいと思っていました。その約束もしました」

「しかし、その約束は果たすことができませんでした」
「情報統制によって、四国の人間は諏訪の現状は知らされていません。ですが、彼女達を知っている私たちだけでも、彼女達を弔いたいと考えました」

全員が若葉の一言一句に注目していた。

「これより、諏訪の人々、白鳥歌野、藤森水都へ黙禱を捧げます」

私も含め、全員が立ち上がる。

「黙禱」

若葉の声と共に私は目をつぶり、諏訪の人々を思いながら黙禱を行った。誰一人として声を発さず、沈黙が食堂内を支配していた。

「ご着席ください」

一分ほどの黙禱が終わった。目の前には湯気を発する蕎麦が置いてある。

「それでは、合掌、いただきます」

『いただきます』

その日の蕎麦は少し塩辛い味がした。

千尋と私と約束と

2018年10月某日

バーテックスの戦いが終わり、いろいろな雑務が終わったある日、私たち勇者に特別休暇が与えられた。若葉たちは各々休暇を楽しむようだが、私と千尋には休暇の前にやるべきことがあった。今はその場所へと向かっている最中だった。

私は千尋と共に四国防衛隊の本部に来ていた。黒塗りの高級車から降りると、制服を着た職員の家内で、本部の建物に入っていく。

『四国防衛隊』

- ・ 第14旅団を中心とした陸上自衛隊。
- ・ 呉から退避して生きた護衛艦部隊と徳島、小松島の航空基地、舞鶴から退避してきた悠岐の父親達を中心とした海上自衛隊。
- ・ 数は少ないが土佐清水や、別の地域から退避した航空機部隊を中心とした航空自衛隊。
- ・ 海上の安全及び治安の確保を主任務としている警察機関の海上保安庁。
- ・ 四国4県の県警察の一部。

3年前にバーテックスの攻撃から逃れた四国の自衛隊や四国へと退避した自衛隊の残存部隊等が中心となって創られた組織である。名目上は四国防衛を主任務としており、旧海自、海保は『壁』の外でバーテックスの警戒を行っていたりと勇者達にも関わりのある組織である。

ただし、現状四国に脅威となるモノはバーテックスのみである。そして、対バーテックスに関して全権を有しているのは『大社』である。本来であれば存在意義を問われる組織であるが、『大社』の権力の強大化を恐れた旧自衛隊、海保、警察幹部や政治家の思惑もあり、規模を縮小されながらも組織として維持されていた。さらに、対バーテックスの要である『勇者』と『巫女』が所属している組織でもある。その『勇者』と『巫女』というのが私と千尋である。『巫女』に関しては千尋のほかに数人所属している。

『勇者』である私の父親は、旧海上自衛隊の幹部だ。そして私の親友である千尋も強力な力を持つ『巫女』である。そのため、私たち二人は四国防衛隊の『勇者』、『巫女』として活動を行うことになった。

『大社』に対バーテックスの要である『勇者』を独占させたくないという思惑も私たちが防衛隊に所属している理由に含まれるだろう。

もちろん『大社』としては、防衛隊のような実力組織とは関わりになりたくないというのが本音だろう。しかし、私が『勇者』の力を、千尋が『巫女』の力を使って『大社』

に協力する代わりに、『大社』の持つ、対バーテックス用の装備や情報を四国防衛隊に提供してもらおうという関係を築くことができていた。

『大社』のような宗教色の濃い組織と、自衛隊や警察系の武力も持つ組織。どっちを信頼するかだよな」

「どっちも過度に信頼しすぎるとろくでもないことになるから、バランスが大事だな」

宗教結社に対して日本人はあまりいい反応を示さない。『大社』が受け入れられているのは、神道という日本人になじみ深い宗教であることと、現状では対バーテックスのみでその権限を行使しているだけだからである。

一方の自衛隊や警察組織に対してもいい反応を示さない人々はある。それは仕方がないことだし、謙虚に過ごしていくしかない。

大きな会議室に入ると、中には父親や日高さん、西本さんといった旧海上自衛隊の知り合いや、旧陸自、旧空自、旧海保、警察関係者、政治家といった、四国のお偉いさんが終結していた（一部はテレビ越しであったが）。

「山田悠岐様、秋山千尋様。本日はお越しいただき、誠にありがとうございます」

私と千尋が高級そうな椅子に座り、会議が始まるのを待っていた。

十分ほどすると、予定の時間通り会議が始まった。

「では、2018年〇月〇日に行われた対バーテックス戦の詳細報告をお願いします」

西本さんの言葉と共に、私の父親である裕紀と私、千尋が立ち上がる。私たちは高校生なので、こういった会議のルールや言葉使いが完ぺきではないので、報告の詳細は父親が行うことになっていた。

父親が先日のバーテックス戦の戦鬪の詳細を報告し始めた。私は当事者だし、千尋も私から散々聞かされているので、特に目新しい報告はなかった。

「以上が『勇者』の初陣であります」

父親の報告が終わると、全員が手にした報告書を見る。ここから私に質問が飛んでくる時間だ……

予想通り、私には進化体バーテックスについてや他の勇者の事を聞かれた。

バーテックスの話が終わると、あとは四国内の治安状況といった話になったので、私と千尋は会議室から退出し、別の部屋で待機していた。

「はく。やっぱり年上の人達と話すと疲れるよね……」

「みんな私たちを気遣ってか滅茶苦茶優しい言葉で話しかけてくれるけどねえ」

15歳の少女に威圧的な態度で迫るほど人間ができていない人達ではなかった。ましてや二人は組織維持の要であり、自分たちの、四国の生活を守る守護者である。蔑ろにできるはずがなかった。

今日私たちを定例会議に呼んだのも、純粹に『話』が聞きたかったからだろう。

「悠岐さん、お久しぶりです！」

二人が待機室にいますと、巫女服をきた女の娘が入ってきました。

「渚ちゃん！元気だった〜」

「渚ちゃん。お久しぶりですね」

彼女の名前は和田渚。中学一年生の13歳で、長い栗色の髪の毛が特徴的な可愛らしい少女である。彼女の両親も旧陸自の一員であったため、『巫女』として『四国防衛隊』に所属することになったらしい。いつもは『巫女』として、千尋と共に神樹様の神託を受けている。あとかわいい。

「バーテックスとの戦闘お疲れ様でした」

「いいよ〜それが私の役目だからねえ〜」

渚ちゃんの柔らかい髪の毛をもふもふしながら彼女を可愛がる。私や千尋だけでなく、みんな彼女を可愛がっていた。

「あとで、食堂でご飯食べませんか？」

「賛成〜」

3人で話していると休憩に入ったらしく、父親と日高さん、山崎さん、西本さんの、舞鶴組が部屋の中に戻ってきた。

「悠岐。いろいろお疲れ様。こっちの都合に付き合わせてしまって申し訳ないな」

「いいよ。私もその辺は覚悟しているから」

父親とは面と向かつて話したのは自分が入院した時以来だった。久しぶりに夕食でも一緒に食べようかと思つたが、今日もお偉いさんたちとの会合などで忙しいらしい。

「それじゃあ、私たちは食堂でご飯を食べてくるよ」

「わかつた。あと、今日はどうするんだ？」

「今日、明日は千尋の実家で過ぐすよ」

「そうか。すまん、そばにいてやれなくて……」

「私は大丈夫。それよりも暴飲暴食と運動不足の方を何とかしてよね」

「うっ！善処するよ……」

私は父親の立派なお腹を指でつつく。生活習慣病になつても知らないぞ。

父親達と別れた後は、千尋と渚ちゃんと食堂に向かつた。相変わらず二人はカレーうどんを注文していた。

「悠岐さん達の活躍はいろいろ聞きました。すつごく活躍したそうですね」

「若葉と友奈が一番頑張っていただけだよ。私はそのサポートをしただけ」

私たちが食堂で昼ご飯を食べている間も、遠目で防衛隊の職員、隊員が見てくるのがわかつた。

私たち『勇者』の活躍は『大社』によって大々的に報道されている。「最後の砦」だの、

「人類の救世主」だのとセンセーショナルな内容であった。リーダーの若葉に至っては顔写真付きで報道されている。本人が「私の顔だけで、四国の人が元気になるのであれば構わない」と言っていたのかもしれないが過熱しすぎではないだろうか。

「若葉ちゃんはいいとしても、千景ちゃんや杏ちゃんは目立つのは好きじゃなさそうだしね。過熱しすぎなければいいけど」

「そうだな。希望には絶望が伴うものだ。それに若葉も千景も美人だからな。変な虫が付きかねない」

「悠岐さんも十分写真映えすると思いますが……」

「悠岐や私、それに渚ちゃんにちよつかいかけたら四国の治安組織を敵に回すことだからたぶん大丈夫、かも」

「何にせよ、芸能人や政治家になったつもりで、気を付けて日常を過ごす必要があるな」
有名になればなるほど、他人をバカすることで、快感を得る層に狙われる可能性が高くなる。そういう層から守るために、後輩達にはネットの接続を制限したほうがいいのかもしれない。SNSや掲示板なんかは層の集まりだし。

昼食後は渚ちゃんと少し遊び、夕方になる前に、千尋の実家へと向かった。黒塗りの高級車に載せてもくれたこともあり、夜になる前に千尋の実家に行くことができた。

千尋の実家は四国の田舎にある家だった。千尋の祖母と、母親の姉の家族が農家を営んでいる。みな優しい人たちだった。千尋のことを可愛がっており、私の事も家族のように扱ってくれる。

美味しいごはんを食べ、風呂に入ろうと思ったら、千尋から一緒に入ろうといわれ、特に断る理由もないので、風呂に入る。

「あゝ、丸亀城の風呂とは違ってこういう風呂も風情があつていいな〜」

丸亀城の寄宿舎での風呂は、個人用のシャワーを利用するか、銭湯のような浴場を利用していた。千尋の実家の風呂は、檜の風呂で私と千尋が入るのがやつという大きさであつた。

身体を洗い終えて、湯船につかっていると、千尋が湯船に入ってきた。

「ちよつと、狭いよ」

「これぐらいいいでしょう。それに女の子同士だし」

対面して座られると、どうしても千尋の胸部に搭載されている立派な連装ミサイルが目に入る。

「それにしても何を食べたならこんなに大きくなるんだ?」

「え〜うどんだよ」

「即答されても……:というかそれならタマヤ若葉だつて大きくなるんじゃない?」

「冗談、冗談。まあ遺伝かな」

そういえば千尋の母親も、その姉も大きい山を持っていた。遺伝か……

「そういう悠岐だつてそれなりのモノを持っているじゃないの」

そういつて千尋が私の胸を触ってくる。それは嫌味にしか聞こえないぞ……

私の胸で遊ぶのをやめると、腕や足に残っている傷跡や痣を彼女は優しく撫で始めた。私は、一般人よりも治癒力の高いが、それでも先日のパーツクス戦で負った細かな傷は完治していなかった。

「悠岐、私には『無理をしないで』なんて言えない。でも死んでほしくない。私の前から消えないでほしいよ」

彼女の両親はなくなつた。多くの友人を失つた。だからこそ誰かを失うことを恐れているのだろう。だが、それは私も同じだ。

「もう誰も死なせないし、私はパーツクスを殲滅するまでは死ねない。もちろん千尋も若葉たちも死なせないし、四国も守り通して見せる」

「悠岐……」

「そのために私は3年間戦い続けた。すべてを訓練に費やした」

私は3年間、『大社』の鍛練、それに自衛隊の訓練を受け続けた。生き残るため、死なないうため、みんなを守るため。生き甲斐であったソフトボールもしばらくやっていな

い。バットもボールも握っていない。

「私は生まれたときから『勇者』になる運命だった……。いや、宿命だったのかもしれない。だけど『勇者』としてどのように生きるかは決められてはいないと思う」

私が『勇者』になったのは宿命だったのかもしれない。変えようがなく、生まれつき勇者になる未来だったのかもしれない。

だが、運命は自分の意思や行動によって、いかようにも変えることができる。

「悠岐の運命は悠岐のモノだよ。それに私の運命も私のモノ」

「そうだな」

私がこの戦いで死ぬ運命なら、その運命を変えればいいだけの事だ。私だけではない、みんなの力で。

「でも、私は悠岐と共にバーテックスと戦うことはできない。私は『巫女』だから『巫女』の役目は神樹様からの神託を授かることである。千尋とひなたはその力が非常に強いこと、私たち勇者と親しい者だったこともあり、丸亀城で『勇者』と共に過ごしている。しかし、『大社』や防衛隊には『巫女』が何人も存在しており、彼女たちも修業を行っているのである。

だが、『巫女』には、バーテックスと直接戦う能力は与えられていない。あくまで神託を授かり、修行を行い、信仰心を高めることで、神樹様の力を高めることしかできない

のである。

「千尋だけじゃない、ひなたや渚ちゃん、真鈴といった多くの『巫女』が私たちと共に戦っていると思おう」

「だけど、どんなに頑張っても傷つくのは『勇者』のみんな。だからね、悠岐。約束して『約束？』」

「必ず、生きて私たちの下に帰ってきて」

「生きて帰る……」

よく考えてみればその『約束』をしたことはなかった。私たちの間の『約束』は、絶対に破ってはいけない大切な儀式だ。

「当たり前だ。私は死ぬつもりなどない。それに誰一人として殺させない」

「ありがとう。約束の指切りしましょう」

「ああ、そうだな」

二人で湯舟から立ち上がる。体から水滴が流れる中、私たちは約束の指切りを行う。「指切りげんまん、嘘ついたらはりせんぼんのます、指切った」

この後に「死んだら後免」という「命ある限り約束を果たす」という覚悟を示したフレーズが入る。だが、私たちは死ぬつもりはない。

「さて、のぼせる前に上がるか」

「そうだね。あと、友奈ちゃんにマッサージ習ったんだ。耳かきと一緒にやってあげるよ」

「期待しないで待ってる」

「む、結構筋がいいって褒められたんだからね」

その後、布団の上で千尋のマッサージを受けたが、しばらく動けなくなるほど上手だった。千尋曰く、友奈の腕はさらに数段階上とのこと。耳かきもかなり気持ち良かった。他の人によってみたらと言ったら、私だけにしかないとのこと。うれしい。

マッサージの後はすぐに消灯して寝ることになった。布団に入ってもすぐには眠れないため、千尋と話し始めた。

「そういえばみんなどうしているんだろう」

「休暇の過ごし方か？」

「そうそう。ひなたちゃんは若葉ちゃんと一緒に遊んでいるらしいけど」

「あの二人らしいな。タマと杏は高松でショッピングを楽しむって言っていたな」

「へへ。千景ちゃんと友奈ちゃんは？」

「それが……」

千景は地元に戻省したらしい。私と千尋は彼女の複雑な事情をある程度は知っている。

「実家って……千景ちゃん大丈夫なの？」

「一応友奈についていくようには提案していた」

千景はかなり嫌がっていた。たぶんだけど、自分のつらい過去を親友に見せたくはないのかもしれない。友奈も千景が嫌がっていたこともあり、ついてはいいかなかったようだ。

「千景ちゃん、大丈夫かな」

「正直胸糞悪い話ではあるが、専門家でない私が関わることはできない。唯一彼女を助けることができるのは友奈だと思う」

「それは違うと思うよ。私たちには千景ちゃんの気持ちを理解できても共感することはできない。だけど共に戦い、寄り添うことはできると思うの。だから、味方であることを伝え続けるしかないよ」

「共に寄り添う、か」

色々考えていたら眠くなった。千尋はもう寝ているらしい。私も寝るとしよう。

また明日からバーテックスとの戦いの日々が始まる。だからこそ日常を大切にしないといけないのかもしれない。

今後はみんなでお泊りをしたいものだ。

翌日から、いつも通りの日常が始まった。リフレッシュできたこともあり、みんな元気だった。

千景や杏がこれまでにないほど積極的に訓練に励んでおり、休暇中に何かあったのかもしれない。これなら次は大丈夫かもしれない。

そして数日後、バーテックスがやってきた……

千景と勇者

2018年10月某日

特別休暇を与えられた勇者たちは、各々自由に過ごし、身体的、精神的にもリフレッシュをしていた。

久しぶりの休暇を満喫していたのは悠岐や千尋だけではなかった。

若葉とひなたは香川のうどんの名店を巡っており、勇者アプリに内蔵されている、連絡機能で写真と食べた店のレビューを投稿していた。悠岐以外には大変好評であった。

友奈は千景が帰省していたこともあり、誰かと行動するということはなく、近くの公園で清掃ボランティアを行ったりしていた。

杏と球子の二人は、高松市内でシヨツピングをしていた。杏は香川で一番大きな書店で本をたくさん購入し、球子も書店でアウトドア雑誌といった趣味の本を購入していた。書店のほかにもアウトドア専門店やロードバイク専門店などにもより、いろいろ買い物を行っていた。

『勇者』には給料は存在しない。常識の範疇であれば基本的に『大社』が『勇者』が購入した料金を支払っていた。中学生の身分で、家や車を欲しがらる欲望に忠実な人間はおら

ず、そこまで高い買い物をする勇者はいなかった。

勇者の一人である郡千景は実家に帰省していた。千景にとって故郷は、暗い過去しか存在しない場所であった。

特別休暇が与えられた時に、彼女の親友である高嶋友奈が、自分の故郷と一緒にいきたいと言ってきたが、自分の過去、そして現在も問題を抱える場所に彼女を連れていきたくはなかった。たとえ唯一心を開いている親友であっても。いや、親友だからこそ自分の暗部を見せたくはなかったのかもしれない。

故郷では、父親と天空恐怖症候群に侵された母親の顔を見るだけで、すぐに帰る予定だったが、予想外の出来事が起きたのだった。

千景を拒絶し続けた『故郷』が、彼女を称賛し始めたのである。

『勇者』であれば自分は評価される

『勇者』であれば人は私に平伏する

『勇者』であれば私はみんなに愛される

彼女の『勇者』にこだわる姿勢はこの時から始まった。

見かけの功績や強い者へ媚びを売ることでも生まれた評価は、得てして裏切られやすい。その評価や称賛、価値は、自らが苦境に立った時、正反対になる。

しかし、今まで誰からも認められず、自らの価値を見出すことができなかつた少女は、

この心地よい感覚に酔いしれていくのだった。

それが破滅への一歩とは知らずに。

休暇を終え、丸亀城での日常が戻り始めたある日、バーテックスが襲来した。

その日は教室で授業を受けている最中であった。神樹様の神託によって、戦いが近いことを想定していた勇者達は、樹海化警報発令と同時に、変身し、戦いに備えた。

「今回襲来したバーテックスの規模は、前回の倍程度だ。ただし進化体が一体存在しており、警戒が必要だな」

「前回の倍の敵か……進化体のタイプは？」

「棒状のシールドを持った進化体だね。非常に防御力が高いし、反射の性質を持っているから射撃武器は使わない方がいい。だが、それ自体の攻撃能力は低い」

「なら攻撃は私と悠岐さん、友奈が行おう」

四国防衛隊からの事前情報を共有し、悠岐と若葉が今回の戦いの方針を決めていた。

「タマは杏と千景の護衛についてほしい」

「悠岐さん。今回、私は戦えます。タマっち先輩を、みんなを守るって決めたんです」

「私は戦えるわ。私は『勇者』だもの」

杏は前回とは異なり、戦装束の姿に変身することができていた。千景も大鎌を構えな

がら臨戦態勢に入っていた。

「それなら千景は友奈と共に星屑の掃討に当たってほしい。私たちの後ろを守ってくれ

」

「了解したわ。高嶋さん、一緒に頑張らしましょう。それに、若葉さんも……」

「うん。一緒に頑張ろう！ぐんちゃん！」

千景と友奈が頷く。

「杏は遠距離から狙撃を行いつつ、援護を行ってほしい。タマは無防備な杏の護衛を行うようにして」

「了解！（です！）」

千景と杏は初戦闘であるが、千景は訓練を見ている限り、戦闘のセンスが高く、友奈と一緒に戦えると悠岐は判断して、彼女を星屑の掃討を任せた。

杏は近接戦闘の能力は低いが、射撃訓練ではかなりの成績をたたき出しており、実戦でも戦えると判断したのであった。

「それじゃあ、若葉！、いくよ」

「いきましようー！」

悠岐と若葉が樹海の根を足場にし、跳躍しながら一気に星屑の群れの中に突入する。遅れて友奈と千景が同時に走り出し、突撃した二人が打ち漏らした星屑を撃破していっ

た。

友奈がパンチやキックで星屑を次々と倒していく隣で、千景は彼女の獲物である大鎌を振るい、次々と星屑を倒した。

「これなら、いける！」

前の戦いで怯えていたのがウソのように敵を鎌で斬り払うことができた。

「私は『勇者』よ。『勇者』なのよ！」

今の千景にとって『勇者』として戦うことが自分の存在価値であった。だから彼女は戦うのである。それに千景の隣には高嶋友奈がいる。それだけで彼女は戦うことができた。

友奈と千景が星屑を掃討している間、突撃した悠岐と若葉の二人は、太刀を使って星屑の大半を消滅させていた。後方からの杏や球子の援護攻撃も行われており、戦況は勇者が圧倒的に有利であった。

「進化体を攻撃する。悠岐さん、友奈、ついてこい」

「了解！」

3人が一気にシールドを持つ進化体に近づく。

「皆さん、止まってください！」

3人が攻撃を行おうとした瞬間、後方で、クロスボウで狙撃を行っていた伊予島杏か

ら制止するように指示が入る。

「新しい進化体が生まれます。警戒を！」

全員が杏の指差す方向を見ると、星屑をさらに巨大化させたような大きな口を持つ進化体が空に浮かんでいた。口は星屑のようにかみ砕くためのモノか、何かは発射するためのモノかどうかまではわからなかった。

「どうする若葉？」

「あれがどういう進化体かわからないが……」

二人が今後の方針を相談していた瞬間、先ほど誕生した進化体の口から何かが発射されるのを友奈は見逃さなかった。

「危ないー！」

「っ!!」

友奈の声に反応した二人は、勇者の驚異的な動体視力と反射神経をフル稼働して自分たちがいた場所から移動する。その瞬間、二人がいた場所を謎の射出体を通り過ぎた。少しでも遅かったら、二人は貫かれていただろう。

落ち着く暇もなく、第二射、第三射が発射され、猛スピードで勇者たちを襲った。

杏は球子に守られており、問題はなかった。しかし盾など持っていない他の勇者たちは動き続けて攻撃を避けるしかなかった。

「シールドのある進化体にも注意しろ！」

若葉の言葉通り、進化体の持つシールド組織を反射した「矢」が勇者たちに降り注いだ。これによって2方向以上から攻撃が加わることになり、ますます身動きが取れなくなっていた。

（精霊の力を使うか……）

悠岐や若葉が精霊の力を使おうかと考えていた瞬間、一人の勇者が「矢」型の進化体に猛スピードで肉薄し始めた。紅の戦装束を纏った勇者、郡千景であった。

（こい、『七人御先』！）

千景が神樹から抽出し、顕現させた精霊は『七人御先』。高知県を初めとする四国地方や中国地方に伝わる集団亡霊で、七人ミサキに遭った人間は高熱に見舞われ、死んでしまふ「1」。1人を取り殺すと七人ミサキの内の霊の1人が成仏し、替わって取り殺された者が七人ミサキの内の1人となる。そのために七人ミサキの人数は常に7人組で、増減することはないという（注釈1）。

千景が進化体に近づいた瞬間、猛烈な弾幕が彼女を襲った。そのうちの数発が千景の体を通った。

「ぐんちゃん！」

友奈をはじめとした勇者たちが悲鳴を上げる。すぐに駆け寄ろうとするが貫かれた

千景の体からは血が出ていなかった。

それどころか、千景の身体は七つも存在していた。猛烈な弾幕によって、何十人もの千景の身体が貫かれ消滅するが、すぐに身体が復活し、常に七人の千景が空を舞っていた。

「今だ！ シールドのやつをやるぞ」

「矢」の攻撃が千景に集中しているすきにシールドを持つ進化体を攻撃しようとする3人が突撃をかけるが、「矢」型の進化体は目ざとく3人に攻撃を行ってくる。

千景に向っている弾幕に比べたら幾分ましな攻撃であったが、近接戦闘が得意な3人にとっては面倒くさいことこの上ない攻撃であった。

「私が守ります！」

後方で球子に守られながら星屑を狙撃していた杏は、悠岐達に向かって飛翔していた攻撃をクロスボウで次々と撃ち落としていった。進化体と杏の「矢」が次々とぶつかり合い、相殺し合って、消滅する。

「あんちゃん！ ありがとう」

「友奈、若葉！ いくよ！」

「了解！」

3人が跳躍し、進化体に攻撃を開始する。友奈は手甲で殴り続け、若葉と悠岐は太刀

で斬り続けた。

3人がシールドを持つ進化体を攻撃している間、千景は弾幕を張り続ける進化体に総攻撃を行っていた。一人が貫かれても、すぐに千景の身体は補充される。彼女を殺すには七人全員を同時に殺す必要があった。それは進化体のバーテックスといえど無理であった。

「これで、終わりよー！」

7人全員で「矢」を発射するバーテックスを大鎌で斬り裂いた。圧倒的な攻撃力によって進化体のバーテックスは一瞬にして消滅した。

「私は……もつと強くなる」

千景がバーテックスを倒したと同時に、悠岐達が攻撃を行っている進化体も徐々に傷が付き始めていた。3人の刀と拳による連続攻撃と、杏の遠距離狙撃、球子の旋刃盤、そして途中から参加した千景の攻撃によって、バラバラになって消滅した。

倒し損ねていた星屑は杏の狙撃によって片づけられ、二回目のバーテックスの攻撃は終わった。

「みな無事のようにだな」

若葉が、樹海化が解けつつある中で全員の顔を見る。顔に疲労感を感じさせていたが、目立った外傷は受けていなかった。ただ精霊の力を利用した千景が、一番ダメージ

が多いように見えた。

樹海化が解けると、周りの景色はいつもの丸亀の景色であった。

若葉が『大社』に今回の戦いの報告を行い、全員が検査と戦いの疲労を回復するために、病院に入院することになった。

戦闘から数日後

千景が精霊の力を利用したこともあり、ほかの勇者よりも検査入院が長引いていた。そのため、悠岐達でお見舞いに行くところになった。

病室に入ると、ベッドの上で最新の携帯ゲームで遊んでいる千景がいた。

「ぐんちゃんー！」

「た、高嶋さん!？」

千景が最も親しくしている高嶋友奈が彼女の下に寄り添う。どうやら千景はみんなで見舞いに来ることを知らなかったようだ。

「おい、若葉。千景に見舞いに行くって連絡するって言っていたよな」

「あ……」

「あ……いやない。これはひなた案件ですね。ということではひなた、やっておしまい」

「若葉ちゃん。あれほど報連相は大事だと言いましたよね」

「ひ、ひなた。私が悪かった。なんでもするから許してくれ」

「なんでも……」

「なんだその怪しい笑みは！」

ひなたと若葉の夫婦漫才はいつものことだったので、二人を無視して、お見舞いのフルーツを机の上におく。

「来るなら来るって言ってください」

「若葉に任せた私がバカだった。すまんね」

悠岐と千尋がフルーツを適当に切り分けでいる間、友奈と千景がここ数日の出来事を話していた。そこに一人の少女が加わっていた。

「千景さん！このゲームどうでした？」

「これね、女性向け恋愛シミュレーションゲームだけど……」

「これ、結構話題作でやりたかったんです！どうでした？」

「話題作というだけあって良作だったわ。私はシューティングとかの方が好みだけど。もう少しでCGコンプできるから終わったら貸しましょうか？」

「いいんですか!？」

「別に構わないわよ。その代わりにあなたのおすすめの小説を貸してくださいさる？」

「傑作を用意しますね」

二人が仲良くしているのがうれしいのか友奈が満面の笑みで二人を見つめていた。「友奈く杏って千景とあんなに仲良かったか？」

球子が親友の杏の変化に驚きながら、事情を知っていいような友奈に聞く。

「うん。結構前から仲良かったよ」

「初めての戦闘の時、私は伊予島さんにひどいことを言ってしまった……」

「それで後で謝ってもらったんです。私は気にしていませんでしたけど」

二人は初戦闘で戦うことができなかった組である。千景はその時に変身できない杏を批判していたことを反省していた。友奈の仲介で杏と和解していたのだった。

「結構前から千景さんの遊んでいるゲームに興味あったんです。それで思い切って話してみたら恋愛ゲームとかで盛り上がっちゃって」

「私も伊予島さんから貸してもらった小説が思いのほか面白くて……」

「千尋く杏が遠くへ行ってしまっぞ〜」

二人が仲良くなることに文句はないが、杏がどこかに行ってしまう感じがした球子が嘆く。千尋に抱き着き、悲しんでいるように見えるが、どさくさに紛れて彼女の胸を触っていた。

「はいはい。杏ちゃんの成長を見守りましょうね〜」

「おい……」

「あああああ」

千尋の胸を触られるのが気に食わないのか、悠岐が球子を千尋から引っぺがす。

しばらく8人で楽しく過ごしていたが、騒ぎすぎたのか病院の人から注意を受けた。夕方になっていたこともあり、友奈を除く8人は先に帰ったのであった。友奈と千景を二人つきりにしてあげた方がいいという気遣いでもあった。

「ぐんちゃん。前の戦いはかつこよかったよ！」

「ありがとう。乃木さんや悠岐さん、それに高嶋さん達に負けられないようにもつと頑張るつもりだよ」

「MVPはぐんちゃんだったと思うし、これからも頑張ろうね」

「ええ。私は『勇者』なのだから」

この時、千景の『勇者』という言葉に重い意味が込められていることは、さすがの友奈でも気が付かなかった。しかし、故郷に帰省した後に、ここまで戦いに積極的になった理由は何かあるだろうと彼女は考えていた。

（ぐんちゃんの口から言ってくれるまでは聞かない方がいいかもね）

勇者の中でもっとも空気の読める友奈は千景の意志を尊重した。

「それじゃあ、私もそろそろ行くね。また明日もお見舞いに来るね」

「ええ。また明日。今日はありがとう」

友奈が病室から出ていくと、千景は残っていたフルーツを食べながらゲームを再開した。

(高嶋さんと一緒に戦える。もつと強くならなくては……)

この数日後に千景は退院し、より一層の特訓に励むことになる。若葉や悠岐、友奈と肩を並べて戦えるように。

『勇者』として価値ある自分になるために……

バーテックスとうどん

2018年10月下旬

二回目の襲撃によって負ったケガも治り、検査入院していた千景も退院し、丸亀城にはいつもの日常が戻ってきた。

「そういうえげなんぞ杏は戦えるようになったの?」

初めての戦闘では変身すらできなかった杏が、前の戦いではその射撃能力をいかにうまく発揮して、活躍していた。

「ちよつとした心の変化つてやつだよな」

「この前の休暇で高松に買い物に行つたんです。その時にたくさん人がいたんですけど、この人達は私たち『勇者』の力を頼りにしているつて考えたら頑張らなくちゃつて思つたんです」

バーテックスに対抗できる力を持っているのは私たち『勇者』だけである。四国の数百万人の運命を私たちが握っているといつても過言ではない。

「それに、今まで私はタマっち先輩に助けられてばかりでした。初めて会った時、初めての戦闘の時も。だけど、もしタマっち先輩がピンチになつて倒れて、その時に私は怖い

からという理由だけで動けなかったら私は一生後悔する……。そう思ったら不思議と力が湧いてくるんです」

「あんず〜タマは嬉しいぞ〜」

身近な友人を守るために戦う。この意志だけで十分だ。

前にタマから私は、戦う理由を聞いていた。彼女は初めての戦闘でもバーテックスの大群を恐れることなく戦い、戦えない杏や千景を守っていた。

彼女の戦う理由は杏を守るためである。もちろん四国を、人類を守るために戦うという理由もしつかりと持っている。

自分にはない女の子らしさを持つ杏の事を絶対に守るべき存在と考えているらしい。私からしたらタマも十分可愛い女の子だと思うけど……

タマは杏がいるから戦える。杏はタマがいるから戦える。だからこそ、どちらかが欠けることは絶対に防がなければならない。

二人は抱き合いながら片耳イヤホンで音楽を聴いていた。傍から見れば、彼女たちは仲の良い姉妹である。

「本当に仲がいいんだな……」

「あの二人は寄宿舎も隣同士でよくお互いの部屋を出入りしているしね」

「そうなのか」

「因みに若葉ちゃんもひなたちゃん、千景ちゃんと友奈ちゃんもお互いの部屋の合鍵を持っているぐらいだよ」

千尋の謎情報を聞く。仲がいいなあ……

「悠岐は基本的に家に行かないことが多いから合鍵持っていない面白くないのよね」

「私はいろいろ忙しいんだ」

私は基本的に寄宿舎の部屋は寝泊まりにしか使っていない。勉強は丸亀城内の図書館を利用すればいいし、食事は食堂でとればいい。あとは外でひたすら訓練をするから寄宿舎に私物はあまり置いていない。

「確かに悠岐先輩っていつも学校にいる気がする……」

「そうね。朝早くから運動しているし、夜遅くまで訓練しているわね」

千景と友奈も心当たりがあるのか私たちの会話に参加してくる。

「信じられないかもしれないけど、これが悠岐の部屋よ……」

千尋がスマホで写真をみんなに見せる。なんだなんだと若葉やひなた、タマ、杏もスマホの写真を見に集まってくる。

「別に恥ずかしいものは置いていないぞ」

私の部屋には見られて恥ずかしいものは置いていない。生活に必要なものしか置い

ていない。

ちなみに私の部屋の感想は以下の通りである。

「いや、これは……」とひきつった顔の若葉

「悠岐さん。いくらなんでもこれはひどいと思います」と先ほどまで浮かべていた笑みがなくなった顔のひなた

「さすがのタマもこれはないと思うな」と苦笑いのタマ

「花の女子高生の部屋とは思えません……」と目をつぶりながら結構辛辣なことをいう杏

「ちよつとこれは擁護できないなあ」と天使のほほ笑みのまま私を見捨てる友奈

「恥ずかしいものを置く以前の問題だわ」と真顔で部屋の写真を見つめる千景

全員一致で酷評だった。

「まず家具がベッドとクローゼットしか置いていないのがおかしい」

「そしてフローリング一面にトレーニング用具が置かれているのも女子力を下げる要因ですね」

「キツチンにプロテインの袋しかないのは悲しすぎます」

千尋、ひなた、杏の女子力高い組の酷評である。

「一人暮らしの男性でももっといい部屋に住んでいるぞ……」

「プロレスラーの部屋みたいだな」

若葉、タマの女子力低い組にも酷評される。

「そこまで言うことないでしょう……」

無性に恥ずかしい気持ちになったので、私は逃げるように教室から出てトイレに向かった。

しばらくして教室に戻ると、後日私の部屋の模様替えを行うことが全員一致で決まった。ひどい……

私の部屋が他の7人に酷評された数時間後、午後の授業が終わった後、パーテックスが進行してきた。3回目の侵攻である。

丸亀城が、香川が、四国が静止し、樹海化が始まる。

樹海化が終わると、そこはそろそろ見慣れ始めた光景だった。

「前の襲来からまだ少ししか立っていない」

「そうだね。敵も本腰を入れて叩き潰しに来たのかもね」

スマホには今回の敵の規模が通知されていた。

「今回のパーテックスの規模は大体前の襲撃と同じくらい。進化体は「矢」型が一体いるみたい」

「あの遠距離攻撃の進化体か……厄介だな」

猛烈な弾幕の中を突っ込んでいく気はさすがに私も若葉も起きない。

「なら私の『七人御先』で」

「千景。今回は精霊は使ってはダメ」

「どうして！あの力があれば……」

「前回の使用から時間が空いていなさすぎる。あれは肉体的だけではなく、精神的にもダメージが入る」

ただでさえ不安定な千景の精神をより一層不安定にしかねない。小さな積み重ねが致命傷になることもあるのだから。

「でも……」

「今日はそれなりに対策も考えてきているから。それにゲームでも強い技を連続して使えばいすぎると必ず悪影響って起きるでしょう？」

「……わかったわ。確かにあれだけの力を連続で使ったらデメリットも多そうね」

「ありがとう。千景」

千景の説得はできた。今回は襲撃の規模も少ないし、精霊は使わないでいいかな？

「ん？あれを見てください」

クロスボウを構えて、周辺を警戒していた杏が何かを見つけたようだ。

彼女が指さす方向を見ると二足歩行のパーテックスが高速でこちらに接近してきていた。

「なんというか気味の悪いデザインだな」

人間の胴体から下半身だけを残した姿であり、奇抜なデザインであった。しかし樹海の根や蔦、建物といった障害物を軽々とよけ、猛スピードでどこかに向かっていた。

小さいから探知から逃れていたのかもしれない。

「おいおい、あいつ神樹様のところに行こうってんじゃないよな」

タマの考えは正しいかもしれない。パーテックスによつて神樹様が攻撃を食らえば四国は終わりである。

「止めるぞー！」

「まていー！」

若葉が突撃しようとしていたところをタマが止める。

「ここはタマに任せたまえ」

「こんなこともあるのかと『これ』を用意してきたぞ」

そういつてタマが懐から取り出したのは一袋のうどんであった。

「「「うん、これは!!」」」

「そう、これは讃岐うどんの申し子吉田麵蔵が丹精込めて作った究極の一品、『うどん』だ

あー!!」

「こ、これならいけるぞ」

タマは全力で二足歩行のバーテックスの前に一袋のうどんを投げる、がバーテックスはそれを無視し、猛スピードで通り過ぎていった。

「う、嘘だろ……」

「バカな!!」

「バカはお前ら全員じゃない!!」

コントをしている場合か! 5人とも脳みそまでうどんできてくるんじゃないのか

……

「だってうどんが、うどんが」

「うどんはどうでもいい。あれを止めるぞ」

うどんにこだわるタマを諫め、対策を考える。

「遠距離攻撃で倒してみたほうがいいかもな」

「若葉の意見に賛成だ。二足歩行のやつを接近戦で戦っている間に「矢」型に攻撃されたらひとたまりもない。タマと杏が攻撃を行って、残りのみんなは二人を星屑や「矢」型から守るって感じでいいかな」

私と若葉、友奈、千景が「矢」型のバーテックスや星屑の攻撃から、遠距離攻撃がで

きる勇者を守り、杏とタマには進化体の相手をしてもらうという作戦であった。

「さすがに盾役がいないとあの弾幕から二人は守れないわ。その辺はどうするの悠岐さん」

「案ずるな。タマの武器だけでは防御不足だと思っただけでな。防衛隊と大社に新装備を造ってもらった」

「「「新装備?」「」」」

私がそういい、近くにあつた樹海化から免れていた建物の屋上に設置してあるコンテナから新しい装備を取り出した。

「悠岐先輩、盾ですか?」

かなりの大きさと、分厚く、重量感のある盾を私は両手で持ち上げていた。

「盾だ。これでパーテックスの攻撃はそれなりに防げるぞ」

もともと四国にあつた戦車の装甲を利用して制作された盾であつた。複合装甲と外装式モジュール装甲で構成された盾であり、非常に重い。勇者の力で強化された私の能力でもこれを持ち上げて俊敏に動くことはできない。

ただ、神樹様の加護を受けており、星屑のかみ砕き程度では全く傷がつかない強度を有している。

「攻撃が来る!」

「矢」型のバーテックスの射程に入ったのか、高速の射出体がつぎつぎと私たちのいる場所へと着弾する。巨大な盾の後ろに隠れた6人の勇者にはその攻撃は届かなかった。

着弾と同時にすさまじい衝撃が走る。4人の勇者が支えながら攻撃から耐えていた。

さすが主力戦車の高速の砲弾をはじき返すために造られた装甲だ。勇者の力と神樹様の加護が加われればこれぐらいの攻撃なら大丈夫そうだな。ただ、あまり時間は掛けられない。

「あんまり時間をかけると、星屑が近づいてくる。あと進化体がさらに生まれる可能性がある。速く二足歩行型を……」

杏とタマの二人はクロスボウと旋刃盤をつかって進化体を攻撃するが、俊敏な軌道で避けられてしまう。

「そろそろ不味いぞ」

「やばっ！」

定期的に盾の外に出て近づいてきた星屑を倒していた若葉と悠岐が盾が壊れ始めているのを見て顔を青くする。少しでも油断すると「矢」の攻撃が行われるため、勇者たちを苦しめていた。

星屑と遠距離攻撃のバーテックスで私たちを足止めし、移動速度の速いバーテックスで神樹様を攻撃する。

「それを補う反射を持つ進化体はここにはいない」

「死ね!!」

背中の建物を足場に一気に進化体に肉薄する。足場にした建物が衝撃で壊れたが、コラテラルダメージだ。神樹様のための致し方ない犠牲だ。

一気に亜音速まで加速した私と若葉は納刀した刀から高速で抜刀する

「一閃緋那汰!」

「桜花!」

若葉が放った左からの斬撃と私が放った右からの斬撃によつて「矢」型のバーテックスが切断される。

バーテックスの消滅する様を見ながら樹海の蔦の上に立つ。

「若葉に合わせてやってみたけど、結構これ、フィードバックがひどいな……」

「戦装束が無ければ腕がちぎれていたかもな」

私は左手が、若葉は右手の装束がズタズタに引き裂かれていた。力も入らないため、手がぶらぶらしている。また、身体が露出していた方の部分には結構深い傷が付いていた。

「これ、音速超えていたかも」

「なら飛ぶ斬撃も打てるな」

「はっはっは」

二人で笑っていると、残りの勇者4人が星屑の残党を倒し終わってたようだった。

「なんとか勝てたね〜」

「あの盾重すぎるわよ……」

さすがに盾は放棄してきたのか、疲れた顔をしながら友奈と千景がやってきた。遅れてタマと杏も集まる。タマの手にはちゃっかり投げ捨てたはずの袋詰めのおどんが握られていた。

樹海化が解けると同時に、私と若葉は病院行きとなった。盾を持ち続けた千景と友奈も手がしびれていたらしく、診察を受けることになっていた。

戦いから数日後

「悠岐、はい、あ〜ん」

「もううどんは飽きたぞ……」

「明日はちゃんとラーメンにしてあげるから……」

私は肩が脱臼したようで、しばらく腕をつかうことは禁止されていた。正直すでに動かすことはできるのだが、千尋に絶対に動かすなと念を押されたため、使っていない。利き手の左手が使えなくなっただけ、食事を千尋に手伝ってもらっている。ただ、毎日う

どんは勘弁してほしい。

「若葉ちゃん、最高級釜揚げうどんですよ」

「ありがとう、ひなた。うん、美味しい！」

「これは讃岐うどんの申し子こと吉田麵藏さんが（以下略）ですからね」

私と同じく肩を怪我した若葉が、ひなたにうどんを食べさせてもらっていた。相変わらず熟年夫婦のような雰囲気を出している。若葉は毎日うどんを食べているがうどん王国の王子様にはご褒美だろう。

「はい、ぐんちゃん。あ〜ん」

「た、高嶋さん、恥ずかしいわ」

「大丈夫だよみんなやっているよ」

「あ、ありがとう」

手のしびれが中々とれないため、箸が握れない千景にすでに回復した友奈が食事を口元に運ぶ。千景もなんだかんだで状況を楽しんでいるようだった。

そんな状況を羨ましそうに見る二人がいた。杏とタマである。

「なんかピンク色の空気が見えるぞ〜」

「ああ〜ひな×わか、ちひ×ゆう、ゆう×ちか、いいです」

「なんかあんずが怖いぞ」

二人は先日の戦いで負傷をしてなかったため、普通にうどんを食べていた。

「タマっち先輩。☒あゝん☒しまししょうか？」

「んな！わ、私は別にうらやましくはないぞ」

「もうそういつて。ほら、熱々のうどんをどうぞ」

「うううう、つて熱！」

「あ、冷まし忘れていました」

「あんず〜！」

二人もイチャイチャしていた。

こうしてしばらく平和な時間を過ごした。

あと、盾が壊れましたと防衛隊と大社の人に報告したらかなり青い顔をされた。開発費を聞いたら卒倒しそうになった。でも結構使えたからまた使えるといいけど……

勇者たちの休息

2019年1月初旬

バーテックスの初襲来から数か月が経ち、すでに新しい年を迎えていた。バーテックスとの戦いがいったん落ち着き、『巫女』の神託でもしばらく襲撃が行われないことが告げられたこともあり、『大社』が慰安の為に、温泉旅行を提供してくれた。

温泉の候補地としては、松山の道後温泉や高松の塩江温泉があるが、丸亀から近い場所の方が緊急時に対応しやすいということで高松の温泉宿が選択された。

バスや列車に乗って、長旅を楽しむのも旅行の楽しみの中のひとつと豪語していた千尋や、愛媛の温泉に行きたがっていた杏達は残念がっていた。

旅館は『勇者』一行で貸し切りになっており、広い露天風呂や、旅館施設が貸し切りになっていた。気を使わなくていい反面、少し寂しい気もするが、仕方がないだろう。

「あああああゝゝゝゝ」

「悠岐、汚い声を上げないの」

私が大浴場につきかり、中年のおっさんのような声をあげていると、その声に引いた千尋が注意をする。

「いいじゃないですか。千尋さんもこういう場所でリラックスしておけば」

「若葉ちゃんも悠岐を甘やかさないで」

温泉の気持ちよさにすっかり蕩けきっている若葉が頭に手ぬぐいを乗せた古き良き温泉スタイルでお湯に浸かっていた。

「温泉若葉ちゃんも可愛いです」

「ひなたちゃん。流石に写真撮影はNGだよ……」

「わかつてます。ですが歯がゆいです……」

しばらく温泉につかっていると、脱衣所の扉が開き、ぞろぞろと4人の少女が現れた。タマ、杏、友奈、千景であった。

「おお、これはすごいぞ」

「タマっち先輩。まずは身体を洗わないと……」

「うーむ、それもそうだ」

4人はシャワーが置いてある場所へ向かっていた。

「若葉。背、伸びた？」

「あ、やっぱりわかりますか。ちよつとだけ伸びていました」

「成長期だねえ……」

「悠岐さんも背丈大きいじゃないですか」

若葉は大体160センチよりちょっと大きいかなくてくらいである。中学2年生の平均身長よりも大きいのが本人は特に気にしてはいないらしい。ひなたが小柄なので、隣に並ぶと男女のカップルのようにも見える。

「まあ両親が結構大柄の人だったからね」

「そうなんですか」

そんな話をしていると、隣に小柄な少女が近づいてきていた。

「うーん。高校生組は二人とも大きいのか……」

タマであった。身体を洗っている間、杏の双子山を登頂していたらしい。言い方が非常にセクハラおやし風である。

「私はともかく、千尋のを揉んだら千景と一緒にクソゲーRTAをやってもらってからね」
「ヒッ！あれはもう勘弁だ〜」

そういつてタマは杏の方へと帰ってきた。撃退完了。

「クソゲーって」

「いろいろあつたのだよ」

舌を噛み切りたくなるようなクソゲー、マゾゲーをなぜか千景は結構持っているで、それを利用したRTAを行うことである。一度千景と私とゲームなら任せろというので一緒に連れてきたタマと共に、とある作品を走破したことがある。タマは二度とや

りたくない」と泣きながら帰って行ったことを覚えている。

「あれはあれで趣があるのに……」

「ぐんちゃん？」

私たちの話を聞いていた千景が、あの時のことを思い出している。千景もいろいろな意味ですごくいいと思う。

「悠岐さんってお風呂だと眼鏡外していますけど、みんなの顔とか見えるんですか？」
「私はかなり近い近視だね。今もほとんど見えないよ。声やシルエツトで判断している」

杏が、私がいっつも使っている眼鏡がないこと違和感があるのか、私の「眼」について聞いてくる。そういえば話したことはなかったな。

「それだと戦闘の時や運動の時に邪魔になりませんか？」

「いろいろな眼鏡に工夫がしてあるから大丈夫。それに勇者の力を利用すれば見えるようになるから」

「そういえば私も前までよく体調を悪くしがちだったのですが、最近はそういうこともないです」

「まあ、これも神樹様の加護ってことかな」

杏も含め、身体に何かしらの異常があった者が、それが治っている。

ぼーっと空を眺めていると、私の胸部を触ろうとしてきた不届きものがいたため、拘

束してくすぐりの刑に処してやった。

近くで笑いつかれて倒れているタマを片目に露天風呂から上がり、冬の外気で火照った身体を覚ます。

「ああ、気持ちがいい……」

その後も温泉を楽しんでいると復活したタマがサウナを見つけ、サウナにどれだけ長くいられるか勝負を持ち掛けられた。ちなみに一番長くいたのは友奈だった。どうかサウナで我慢大会を開いていたら、『大社』の人に危ないから辞めろと滅茶苦茶怒られた……

温泉から上がると食事の時間までは自由時間である。私と若葉、千景と友奈、タマと杏の3組でペアを組み、温泉卓球大会を開くことになった。ひなたは撮影班、千尋は審判をすることになった。

「ただの卓球じゃ面白くないな」

「それなら古今東西卓球をやりませんか？」

ただの卓球だと思わないと感じたのか、杏が古今東西卓球を提案してくる。

古今東西卓球とは、自分が球を打つ際に、古今東西のお題にこたえるという運動神経と、教養が必要なゲームである。

「罰ゲームも決めた方がいいな」

「ならハイポート走「もつと可愛い罰ゲームで」……ごめんなさい」

私の罰ゲームは大変不評らしい。

「なら、壁ドンで！勝ったチームの人が負けたチームの人に壁ドンをするか、されるか決める権利で！」

「壁ドンって」

壁ドンとは、壁を背にした女性の脇に手をつき『ドン』と音を発生させ、腕で覆われるように顔を接近させ、恥ずかしいセリフをイケボで相手の耳元で囁く行為である。隣の部屋がうるさい時に、壁を蹴りつける行為のことも壁ドンというらしい。

私は、不良が相手にガンつけながら足で相手の逃げる先をふさぐ行為も壁ドンの亜種だと思っている。

千景や若葉、タマは少し抵抗感があつたようだが、私と杏が「負けるのが怖いのか？」というと全員ラケットを持ち、臨戦態勢に入った。ちよろい。

「お題はみんなで決めようか」

千尋の提案で、私たち6人がそれぞれ自分の得意分野を書き、中身がわからない箱に入れる。

全員が箱の中に紙を入れ終わると、千尋がゲーム開始を宣言する。

「それじゃあ5点先取で行くよ」

「「「了解」」」」

千尋審判のルール説明と罰ゲーム説明が行われ、第一戦目が始められる。第一戦目は私・若葉チームVS友奈・千景チームである。いきなり強敵である。

「それじゃあ始めるね。最初のお題は……天王星の衛星の名前！はじめ！」

千尋のお題設定と共に若葉がサーブを放つ

「アリエル！」（若葉）

「ウンブリエル！」（友奈）

「チタニア！」（私）

「え！えつとエンケラドス！」（千景）

千景が打ち返すが、若葉はそのボールを手で受け取る。

「ぐんちゃん！エンケラドスは土星の衛星だよ！」

「くっ……つてわかるわけじゃないじゃない！」

「さあ次にいくよ！」

千景の不当アピールを無視し、千尋が次のお題を発表する。

「お題は……世界の黒人大統領の名前。なお2015年時点のものとする。はじめ！」

今度は友奈からサーブが始める。

「ケニア共和国大統領、ウフル・ケニヤツタ」(友奈)

「コンゴ民主共和国大統領、ジョセフ・カビラ・カバンゲ」(私)

「お、オバマ大統領」(千景)

「タンザニア連合共和国大統領、ジャカヤ・ムリシヨ・キクウエテ」(若葉)

「南アフリカ共和国大統領、ジェイコブ・ズマ」(友奈)

「ナミビア共和国大統領、ヒフイケプニエ・ポハンバ」(私)

「え、えーと」

千景が、答えがわからず、ピンポン玉をスルーしてしまう。これで2点目だ。

「友奈・千景チームのポイントです」

「ええ！なんで千尋！」

「ナミビア共和国の大統領は、2015年3月からハーゲ・ガインゴブ大統領になっていきます」

「ああくそうだった……」

「残念だったね」

敵チームの友奈に慰められる。結構友奈もやるな……

「なんであなたたちわかるのよ！」

「これくらいは一般常識だと思うけど。畜生、初歩的なミスを犯してしまった……」

次に集中だ。

「次いくよ！お題は、歴代沢村賞受賞者。受賞年と共に答えよ。はじめ！」

よし、これは得意分野だ！私がサーブを打ち、ゲームを始める。

「福岡ダイエーホークス、斉藤和巳、2003年」（私）

「東北楽天ゴールデンイーグルス、岩隈久志、2008年」（千景）

「埼玉西武ライオンズ、松坂大輔、2001年」（若葉）

「オリックスバファローズ、金子千尋、2014年」（友奈）

ここから2000年代、1990年代と年代が古くなりながら、それぞれの年代を代表した投手名が次々と挙げられていった。

「国鉄スワローズ、金田正一、1956年」（私）

「……」（千景）

千景が無言でボールをキャッチする。ただ私と若葉に喜びはない。仕方がない、なぜなら……

「この勝負引き分け」

1947年〜2014年の受賞投手を、全員言ってしまったのだ。これでは勝負の判定のしようがない……

「さあ、勝負はこれからだぞ！」

この後、「アメリカ海軍、フレッチャー級駆逐艦の名前」や「日本の城の名前」、「日本の私立大学名」の古今東西が行われ、私たちが3連勝をして、勝利した。

千景が2回連続でミスをしてしまったことが一番の敗因で、かなり悔しそうな顔をしていた。

「じゃあ私は千景に壁ドンをしようかな」

「それなら私は友奈にしよう」

若葉が友奈を指名したためか、若葉に対する千景の顔が恐ろしいことになっていたが、たぶん問題ない……はず。

その後、私・若葉チームはタマ・杏チームと戦ったが、負けてしまった。「世界の登山家の名前」や「直木賞受賞作家」など、向こうのチームに有利なゲームとなってしまう。一応古今東西のお題はランダムなんだが……

「ああ、悠岐さんか、若葉さん。どっちに壁ドンしてもらいましょう。タマっち先輩、先に決めていいですか？」

「あー、私はあんずが決めなかった方で壁ドンされるでもいいぞ」

さんざん悩んだ結果、杏は私を選んだようで、タマは自動的に若葉に壁ドンをされることになった。

最終戦は友奈・千景VSタマ・杏チームだったが、勝敗は5対4で友奈・千景チームが勝利した。始めは古今東西が苦手な千景を有する友奈・千景チームが4連敗を喫するなどかなり不利だったが、ゲームに関する問題が連続して出題されたり、タマのケアレスミスが重なり、5連勝して二人は勝利したのであった。

千景は杏を壁ドンすることになり、友奈はタマに壁ドンされることになった。

「なんだかこれって杏だけが得しているような……」

卓球に熱中していると時間を忘れてしまうようで、すでに食事の時間を大きく過ぎていた。急いで部屋に戻り、豪華な食事を私たちは堪能した。

「ああ。カニなんて久しぶりに食べたなあ。毎日食べたいぐらいだ」

「おいしかったよね。こういう贅沢はたまにするからより感動を味わえるのよ」

「確かにそうだな。毎日食べたら飽きるしね」

私が先ほどのカニ鍋の感想を千尋と話していると、千景がどこからともなく黒い箱を取り出した。というかゲームの本体を取り出していた。

「やけにでかい荷物を持っていると思ったら……」

「あら？久しぶりにやらない。実況パワフルプロ野球」

「千景が強すぎて相手にならないよ」

「悠岐さんは私のオリジナルチーム使っていいわよ」

「まあそれならいいかな」

私と千景は対戦を選択し試合を行う。操作がうますぎて、手も足も出ない状況であったが、途中千景がトイレの為に席を立った。すぐに私は試合を中断して、オリジナル選手のデータを見る。

「うーん、高嶋友奈ばかり。あ、でも私や若葉、それにタマや杏もいるな」

郡千景が投手で、高嶋友奈が捕手として作成されていた。あと私の能力値高！パワーSかい……

「うーん。ここまでは予想の範疇だなあ」

「何が予想の範疇ですって？」

「いや、千景ならもつと厨二病、って千景さん……」

後ろには黒いオーラを纏った千景がいた。

「死になさい」

「ぎやつー！」

枕で顔をフルスイングで打ち抜かれた。千景はそのまま友奈の方に行き、友奈と二人でゲームを再開していた。流石に悪かったって……

ふらふらしていたので、千尋を見つけると、そのまま膝枕をねだる。

「それは千景ちゃん、怒るわよ」

「後で謝るよ」

二人でイチヤイチャしていると、若葉と千景たちがトランプや将棋、ボードゲームを始めた。私たちもそれに参加したが、圧倒的実力を持つ千景にことごとく蹴散らされてしまった。

あと、寝る前に、恒例行事の枕投げを行った。なぜか今は『勇者ゲーム』というらしい。私・ひなた・杏・友奈チームと若葉・千尋・タマ・千景チームに分かれて、大きな広間で勇者ゲームを始めた。

全員に枕が行き渡ると、若葉が豪速球を私に向かって投げつけてきた。私はその枕をキヤツチすると、バックホームをする要領で力の限り枕を投げつける。

「みんな、隠れろー！」

ちやぶ台も後ろに隠れ、私の枕から隠れる。

「悠岐、もう少し手加減して投げてくれる？」

ひなたのお願いに相手チームの全員がうんうんと頷く。

「じゃあ右手で投げるよ」

「そうしてくれるとありがたい」

若葉も私の剛速球に冷や汗を掻きながらゲームを再開する。結局私は後方から枕で狙撃をしつつ、若葉たちの突撃を躲し、その隙について杏が相手陣地のフラッグを奪つ

た。

「これで私たちの勝利です」

杏の言葉ととのに私たちは勝利宣言を行う。

みんな汗だくになって枕投げを行ったこともあり、もう一度温泉に入りなおした。

風呂から上がった後も、いろいろなゲームをして遊び、杏や友奈がうとうとし始めたこともあり、消灯となった。

消灯してからは恒例の怪談話をしたが、杏の話がうますぎて死ぬかと思った。それもあるのか千景やひなたは自分の親友に抱き着きながら寝ていた。

一方の私は全員寝たのを確認した後、高松の町に繰り出していた。

「とくしはつゝらつゝ」

「いよーねーちゃんいい声」

私は高松の場末のスナックで酒に酔いながら歌っていた。ウィッグを被り、メイクをばっちり決め、眼鏡をコンタクトに変えれば全く別人になれる。

こうやって酒に酔って歌を歌うのが最近の密かな楽しみであった。私の部屋の合鍵をみんなに渡さないのは夜中の外出を千尋に勘づかれないようにするためでもある。

別に毎日酒を飲むわけではない。それに泥酔するわけでもない。ただ酔っぱらうという感覚が無性に楽しいのだ。あと未成年なのに酒を飲むという背徳感も。

「偉い別嬪さんね〜歌もうまいし姉ちゃん芸能人？」

「え〜秘密」

「おいおいそりやねないよ」

見ず知らずのおっさんと野球の話で盛り上がっていた。しばらく飲み明かし、ほくほく顔で旅館に帰り、変装を解いて、あらかじめ用意していた別の部屋に入る。

酒の匂いで千尋たちにばれると面倒なため、酔いを醒ますための部屋を用意していたのだ。

「ふ〜。楽しかった」

部屋の電気をつけると、そこには浴衣を着た二人の少女が仁王立ちして私を待っていた。

「悠岐さん。お話があります」

「悠岐。私たちが怒っている意味、分かるよね」

「な、なんでばれた……」

私は二人が見たことがない顔で怒っているのに怯える。

すると千尋は自分のスマホの画面を私に見せつける。

「GPS!?!スマホは置いていったはず」

「スマホじゃないよ。悠岐のこれ」

千尋は私の愛用する財布のキーホルダーを手に取る。もしかして……

「これね、発信機が入っているの」

「最近、悠岐さんが夜どこかに出かけていると相談されました。私愛用の発信機を貸してあげました」

「ああああ……」

こうして私の夜の楽しみは奪われたのであった。

二人のお説教の後、『大社』によるお説教、そして父親によるお説教を受け、怒られまくった。

本来であれば法律違反で警察に補導されても可笑しくないが、『勇者』であること、反省していること、初犯であったこともあり、捕まることはなかった。

千尋が怖かったのもう二度とやらない……

戦う理由

2018年1月下旬

私たちが高松の温泉を楽しんでからおおよそ半月後、バーテックスが四国へと侵攻してきた。前回の襲撃から時間が経過しており、嫌な予感はしていたが、それが的中することとなった。

樹海化した空間で、私たちは戦装束に変身する。

バーテックスが侵攻して来る方向を見ると、そこには白い壁ができていた。勇者の力によって視力を強化してみると、それは星屑の塊で合った。数が多すぎて遠目からは壁のように見えるのである。

「いくら何でも多すぎる」

若葉の嘆きに全員が同意する。

「襲撃がストツプしていたのは戦力を蓄えるためか……」

戦力の逐次投入では『勇者』の防衛網を突破できないと考えたのかもしれない。今回は本気で『勇者』ごと四国を叩き潰すつもりだ。

スマホのマップには表示しきれないほどの敵影が映っていた。防衛隊の情報を照ら

し合わせると今回四国に侵入したバーテックスの総量は約3000体とのことである。

「情報によると約3000体らしいけど、たぶんそれ以上いるね」

「ええ。おそらく4000くらいはいるわね」

「悠岐さん。どうします?」

私と千景と杏が4000近くの星屑とどのように戦うかを決める。一応物量で攻められた時の対策を考えてはいるけど……

「進化体が生まれる前に電撃的に敵を叩き潰した方がいいかもしれない。精霊の使用も検討したほうがいいな」

今までも精神、肉体を摩耗させる精霊の力はなるべく使わないようにしてきた。だが、この物量だと、全部倒しきるのに数時間以上はかかるだろう。なら精霊の力を利用して一気に片を付ける方がいいのかもしれない。

「悠岐さん、行きましょう」

私が高今日の作戦を告げようとした瞬間、一人の勇者が飛び出して行った。

「え? つて待ちなさい!」

すでに若葉は敵の中心部へ突撃を行っていた。

これまでの戦いで、私と若葉が先に突撃して、打ち漏らしを友奈と千景が倒して、後方からタマと杏で援護するというパターンが確立していた。今まで星屑の数が多くて

も3000〜4000体程度だったから、この戦法が通じていただけあって、この物量を相手にする場合の戦法ではない。しかし、今まで通りに若葉は突撃してしまった。

「とりあえず、私と千景、それに友奈は若葉の救出、杏とタマは私の用意したものを準備して。準備でき次第、援護をお願い。あの突撃バカを連れ戻しに行くぞ」

「了解！」

全員の掛け声と共に、私と千景と友奈がハーテックスの群れの中に突入しようとする。しかし杏から突入に待ったがかけられた。

「待ってください。およそ1000体程度が神樹様方面へと侵攻中です」

「べ、別動隊？」

よく見ると若葉を包囲している場所からやや離れた場所を白い軍団が動いていた。

「どうやら敵さんは『勇者』を殺すことに本腰を入れ始めたらしいな」

今までの作戦では、勇者のうち二人が最初に突撃を行っていた。それを予測して、それを物量で包囲して殲滅する。別動隊は四国防衛の要である神樹様の下へ向かわせ、包囲された『勇者』を救出できないように戦力を分散させる。

「戦略や戦術といった概念がバーテックスにはあるようだね」

「悠岐さん。どうしますか。乃木さんを見捨てるわけにはいかないでしょう」

「若葉ちゃんを見捨てるなんてできないよ」

「見捨てるわけじゃない！勇者は全員いるから戦えるんだ。絶対に助ける必要がある」
時間が過ぎれば過ぎるほど状況は不利になる。

「千景と友奈は別動隊を迎撃。しばらく二人だけの戦いになる。苦しいが耐えてくれ」

「わかったわ。高嶋さん、頑張りましょう」

「了解です。でも悠岐先輩だけではあの数を相手にするのは……」

「大丈夫。タマと杏の援護してもらおうから」

「わかりました若葉ちゃんのことをお願いします。ぐんちゃんいくよ！」

二人は神樹様に向かうバーテックスの迎撃に向かった。

準備が終わったのか、杏とタマが私の近くに駆け寄ってくる。

「終わったぞ。若葉はどうなった？」

「終わりました。若葉さんは大丈夫ですか？」

「二人の協力が必要だ。今から作戦を説明する」

若葉の救出作戦は、第一段階としてタマが精霊の力を行使して一気に包囲している星屑の軍団を消滅させる。第二段階にその空白地帯を利用して私がスピードタイプの精霊の力を行使し、一気に若葉の下へ向かい、彼女を確保する。第三段階に、杏、タマの援護射撃で空白地帯を埋めようとするバーテックスを妨害し、私が若葉を抱えてこの拠点まで戻る。

以上が急造ではあるが若葉救出作戦の内容である。

「精霊か……」

「すまん。負担を大きくしてしまうかもしれない」

「精霊を使つて若葉を助けられるなら喜んで使うさ。一発大きいのをぶちかましてやんよ！」

「杏はいつも通り狙撃で私たちの援護を。あと余力があれば友奈達の援護もしてほしい」

「わかりました。悠岐さんも気を付けて」

二人のいる場所には大きな盾が置いてあった。一応、10月の戦いで使った使い捨て装甲版（神樹様の加護付き）を防御用にとってきておいてよかった。あれならバーテックスの攻撃からタマの防御が無くても、ある程度までなら耐えることができるだろう。

「さあ時間との勝負だ」

マップで確認すると、若葉はまだ大暴れしており、星屑を次々と屠っているようだ。

若葉はおそらく私たち勇者の中で一番強い。純粹なフィジカル面だけなら私の方が強いかもしれないけど、ことに戦闘という意味では、彼女は尋常じゃないほど強い。

実際に囲まれていながらすでに数百体近い星屑を倒している。だが、数というものは絶対的な差を生み出す。

「一人で戦っても戦争には勝てないんだよ、若葉……」

そう、これは人類とバーテックスとの戦争だ。戦争ではどれだけ戦力を集中させ、連携をとれたかによって勝敗が決まる。スタンドプレーでは勝てない。

「いつけえええ!!」

タマの叫び声と共に、彼女の身長も何倍もの大きさになった旋刃盤をハンマー投げの要領で回転しながら遠心力をつけ、思いつき投げつける。

彼女が顕現させた『精霊』は『輪入道』。炎に包まれた車輪の中央に顔が付いた姿をしており、夜な夜な街を徘徊し、その姿を見た者の魂を奪っていくという妖怪である。その性質の通り、高速で回転する旋刃盤は炎を纏っていた。

タマによって投げられた旋刃盤は、猛スピードで星屑の塊に突っ込んでいき、一瞬にして外側の星屑を真っ二つに切断していった。

旋刃盤は星屑程度では止められなかったらしく、中心部まで到達すると、なかなか倒れない若葉を倒すために合体し、進化体に成長しようとしていた星屑の塊を切り裂き、バラバラにしてしまった。

タマの旋刃盤は、しばらく星屑の包囲網で暴れまわっていた。

多くの星屑が倒され、若葉を覆う包囲網に穴ができたのを私は見逃さなかった。

今回は速度を重視する。なら、つむじ風とともに現れるこの妖怪で決まりだ。

神樹様の概念的記憶にアクセスし、そこに宿るとある『精霊』の記憶を引っ張りだす。
「はいー『鎌鼬』」

鎌鼬は旋風に乗って現れ、両手の鋭い爪で人に切りつける妖怪であり、「素早さ」が印象的な妖怪である。

樹海の根を蹴りつけ、一気にタマが明けてくれた空白地帯へと進む。轟くような大音響が鳴り響き、音速を一気に突破する。戦装束を着ていなければ私の身体はズタズタになっただろう。

「わくわくばああああ!!」

若葉の近くの星屑に蹴りを入れ、樹海の根や蔦を使って一気に減速する。一気に減速したせいでかなり気分が悪いが、そんなこと言っている暇はない。

すぐに若葉の下に駆け寄り、彼女を確保する。

「悠岐さん！なんでここに……」

すでに全身ボロボロの若葉であったが、まだ一人で戦い続けるつもりらしい。

「さっさと戻るぞ」

「しかし……」

「あと1000体近くを一人で倒せるなら好きにどうぞ。でもいくら若葉が強くても無理だ。戦略的撤退だ」

「……わかりました、つて何を」

私は有無を言わず若葉を抱えると、飛んできた道のりをそのまま戻った。

途中、星屑の攻撃を受けそうになるが、私のスピードと、杏の遠距離狙撃で何とか無傷で生還することができた。

「あく成功！」

「よっしや〜」

「喜んでいる暇はないですよ、タマっち先輩、悠岐さん」

杏の指さす方向には神樹様を守る友奈と千景、そして、まだ1500体以上いる星屑の塊であった。

「若葉、今はあなたには何も言わない。敵を倒すのを最優先にするぞ」

「悠岐さん、怪我が……」

「いいからー！」

若葉が無言でうなづく。精霊の力を使ったせいかわ、目や鼻から血が流れる。息もかなり上がっているが、まだ戦うことはできる。

タマもかなり疲労しているようだが、旋刃盤を投げる余力はあるようだ。杏は冷静に千景や友奈の死角から攻撃を加えようとする星屑を精密に狙撃していた。

「行くぞー！」

私と若葉が千景たちのところへと飛び込む。すでに数百体は倒していた二人であったが、かなり消耗をしていた。

「友奈、千景、大丈夫だったか」

「大丈夫、とは言えないけど、疲れた程度よ」

「うん、私もぐんちゃんもまだまだいけるよ」

千景は私の後ろで星屑を切り伏せていた若葉を見つけ、何か言おうとしていた。

「千景、今は敵を倒すことに集中しよう。若葉へのお説教は後だ」

「……そうね。今は戦闘に集中ね」

あまりもたもたしていると、杏たちも危ないので、さっさと蹴りをつけるべく、二回目の精霊行使を行う。今回はスピードよりも戦いを重視することもあり、顕現させたの『宮本武蔵』であった。

一気に数十体を切り伏せると、隣にいた友奈も精霊を顕現させた。

「勇者ガトリングパUNCH」

ガトリング砲のように連続でパンチを繰り返し、星屑たちを一瞬にしてペシャンコにしていく。

さらに友奈が精霊の力を使ったのを見て、千景も精霊を顕現する。

7人になった千景は次々と周りにいた星屑を大鎌で切り捨てていった。

3人の精霊の力によって、神樹様の近くにいた別動隊の星屑たちはすぐに消滅させることができた。

「さて、あとはあの塊だな」

まだ1500体近い星屑が残っている。

「長丁場になりそうね」

「一応長期戦用に色々準備してきたけど、役に立つかどうか……」

長期戦の想定としては杏とタマが遠距離で援護しつつ、私・若葉チームと友奈・千景チームが交代しながら戦い続けるというものであった。

私は、遠距離のバーテックスから休憩スペースを守るために使い捨て装甲板を用意していた。

ここからは長い長い戦いであった。一応、樹海化をすると、樹海化が解けるまでは外部では時間が停止しているらしいが、樹海で戦っている私たちには関係ない。

私・若葉が疲弊すれば、友奈・千景が戦い、彼女たちが疲弊すれば、休憩した私たちが闘うことで、波状攻撃に対応していった。

私が目にしたカセットコンロとうどんセットは勇者たちに大好評で、これだけで百年は戦えるとタマは豪語していた。なんでうどんで士気が回復するの？

そんなこんなで無数の星屑を倒し、何とか誰一人として欠けることなく戦闘を終える

ことができた。

「勝った〜」

私はそう言って腕も天に掲げたまま、意識を手放した。やはり精霊の連続行使は思った以上に身体に負担をかけたらしい。

次に私が目を覚ましたのは数日後だったらしい。覚醒してすぐにMRIだのメンタルチェックだのといった検査を受けさせられ、ほかの勇者のことを知ったのは、しばらくしてお見舞いに来た千尋に教えてもらった時だった。

若葉は疲労骨折と全身の関節炎と打撲、友奈と千景、タマは精霊の力を使ったから、私と同じように検査入院。意識もはっきりして元気ではあるが、疲労骨折や打撲などで、しばらく激しい運動はできないようである。杏は戦い続けた疲労からか戦いの後、一日寝込んでいたらしいが、命に別状はない。それどころか、すでにひなたや千尋と共に日常性格を送っているとのことだった。

私も左手の脱臼、左足の疲労骨折、全身打撲とかなり重症であったが、命に別状はないらしい。ただ数日の入院としばらくの車椅子生活が待っているらしい。

勇者の治癒力なら、1週間で完治するだろう。

「若葉ちゃん、かなり落ち込んでいるみたいで」

「まあ、千景が相当怒っていたからな。タマヤ杏も」

「それにひなたちゃんも……」

どうやら千景はあの戦いの後、若葉を攻め立てたらしい。彼女にとつて、親友である友奈や、最近親しくなってきた杏を危険にさらすリーダーは認めたくないらしい。ただ、杏や友奈に諫められたこともあり、後で言い過ぎたと謝ったらしい。

「若葉は憎しみと怒りで動いているからね。怒りは力になるけど、冷静さを失ったらだめだよ」

「ひなたちゃんに心のケアを頼もうかと思ったら、彼女も用事で丸亀から離れなければいけないみたいで」

「今の若葉からひなたがいなくなったら廃人になつてしまうぞ」

「どうも自分で戦う理由を見つけないと意味がないと思つているらしく、あえて突っぱねているみたいです」

「大丈夫なの？それ……」

「一応は。それに若葉ちゃんは少し道を誤っているだけだから。今の四国を見れば彼女は見つけてくれるはずだよ」

「今の四国……ああそういうことか」

それなら大丈夫そうだな。

私の容態の確認と若葉や勇者のみんなの現状を話すのが今回のお見舞いの目的だったらしく、いろいろやる必要があると千尋はすぐに病室から出ていった。

そろそろ退院が近づいてきたある日、一人の少女が私の病室にやってきた。

「悠岐さん、お久しぶりです。お見舞いに行けなくてすみませんでした」

「いやいいよ。あと別に敬語はいらないよ」

「これは癖みたいなものなので……」

若葉は自分が憎しみにとらわれて戦っていたこと、過去にとらわれていたことを告白していた。

若葉は確かに憎しみと敵への報いを与えるという義務感から戦っていた節がある。

「悠岐さんは、どうして戦えているのですか？」

「私は若葉と同じでバーテックスを殲滅して外の世界を取り戻すためだよ。だけどね、私は一人でもうにかでできるとは思っていないよ。いくら勇者の力があっても、一人で戦えばすぐに負けてしまう」

私は明石海峡大橋でそれが嫌というほど理解できた。戦装束を手に入れ、強力な武器や精霊を手に入れた今でもその認識は変わっていない。私や若葉なら一人で星屑程度なら数百体ぐらいいは倒せるだろう。だが、今回のように数千もの敵が現れたらどうす

役目だ」

私の戦う理由、それはバーテックスの殲滅だ。そのためには勇者は誰一人として欠けてはいけない。そして、四国を失ってはいけない。

「まあ、あとで杏と千尋が案内したい場所があるって言っていたし、そこで自分の生き方を見直してみるといいよ」

「わかりました……悠岐さんは強いんですね」

そういつて若葉は病室から去って行った。

雲一つない冬の乾いた青空を見ながら私は呟いた。

「別に強くななんてないよ。私は若葉と同じで敵を倒すことを最優先に考えている。ただ、私が若葉と違うところは、一人ではなくみんなと協力したほうが、生存率が高く、敵をより多く倒せると判断しているだけ」

「だけど、私だつて千尋を守りたい。お父さんを守りたい。四国を守りたいと思つていよ。そのことに気づければ、若葉はもつと強くなれるはず」
後は杏と千尋に任せろしかない。

みんなの力

最終的に悠岐は一週間程度で退院することができた。

疲労骨折も脱臼もすでに完治に近く、人知を超えていると医者から言われたが、実際人知を超えた力が勇者たちには宿っているのだから納得するしかないだろう。

悠岐が久しぶりに丸亀城のクラスに登校すると、ほかのみんなが退院を祝ってくれた。同じく入院していた千景も友奈も包帯を巻いてはいたが、元氣そうであった。

若葉も自分の戦う理由を見つけることができたらしい。

結局のところ、悠岐たちは四国を守るために戦っているのである。四国全土には『勇者』に助けられ、そして助けを必要としている人が何百万人と存在している。

彼ら、彼女らを守りぬく。若葉を含めた『勇者』が背負っているのは過去だけでなく、現在、そして未来であることを自覚できたようだ。

「あとは私たちが若葉の仲間として相応しいか、だね」

「それはどういふことなの」

千景が悠岐に聞いてくる。若葉との和解は済んだようだ。ツンデレである。

「いや、若葉って私たちの中で、近接戦闘だと一番強いじゃん？」

「それは否定できないけど……」

「たぶん無意識でみんなを庇護下に置いているんじゃないかな。私と友奈は違うかもしれないけど、最初の戦いで戦えなかった杏や千景、それに若葉と連携して戦っていないタマに関してはその気があると思うんだよね」

だからこそ、一番に突撃して、バーテックスの数を減らそうと躍起になっているのかもしれないと考えていた。若葉が悠岐達と共に戦うためには、お互いの実力を認め合う必要がある。

「だから怪我が完治したら模擬戦闘を行いたいと思う」

「私や高嶋さん、それにあなたは乃木さんと同じ条件で戦えると思うわ。でも、土居さん伊予島さんは戦い方そのものが違うわ。勝負にならない」

「その辺は私やタマ、杏と相談するよ」

「本人たちが納得するならいいけど」

「ありがとう」

このあと、悠岐は友奈やタマ、杏にも模擬戦闘の実施を確認し、OKサインをもらった。みんな意外と若葉と戦ってみたかったらしく、ノリノリであった。

あとは『大社』や『防衛隊』の人たちと調整をする必要があった。そのため悠岐は数日間は忙しかった。

数日後、模擬戦闘が実際に行われることになった。

若葉と悠岐たちが戦い、どれだけの力を彼女に示せるかが今後チームで戦う上で重要となるだろう。言葉ではない、身体と技術で彼女と共に戦うことができると示すのである。

第一回戦は先の戦いで一番疲労や怪我が少なかった伊予島杏と若葉の試合である。若葉もすでに怪我が完治しており、万全の状態であった。

射撃武器である杏と、近接戦闘を得意とする若葉では試合が成立しないため、悠岐と杏、それに若葉が考えた戦いは、『鬼ごっこ』である。

鬼ごっこといっても普通の鬼ごっこではない。

丸亀城の頂上から杏がクロスボウを打ち、若葉に命中したら若葉の負けである。一方で、半径2.5キロメートル圏外に若葉が脱出できれば若葉の勝利である。

今回の戦いの為に、丸亀城周辺の住民は一時的に避難してもらっている。

『大社』の権力を最大限利用した決戦であった。

『射程や弾速は対バーテックス用だが、威力はおもちゃの弓レベルまで落としています。あとは戦装束に変身しない程度に勇者の力を使っても構いません』

『了解した』

『わかりました』

二人が通信機越しに了承する。

『それでは、試合開始！』

若葉は丸亀城から200mほど離れた場所からスタートしていた。

すぐに勇者の力を使い、家の上に登って、一気に勝利条件である2.5キロ圏外へと出ようと考えたのだった。素早く移動すれば、さすがの杏も狙撃できないと考えていた。

しかし高速で家々をジャンプして移動する若葉を杏は見逃さなかった。

「っ!!」

猛スピードで飛んできた金色の矢を、すれすれで回避するとすぐに若葉は路地裏への避難する。

「危なかった。少し遅れていたら撃ち抜かれていた」

「これからは慎重に行動する必要があるな」

若葉は杏の力を侮っていたわけではなかったが、高速で移動する自分を一発で狙撃できるとは思っていなかった。

その姿を悠岐達が丸亀城の天守閣から見物していた。

「うわ〜あの狙撃をよけるとか、若葉って化物？」

「勘が野生動物並みだ」

勇者の力で強化された視力で、先ほどの攻防を見ていた悠岐と球子が若葉の能力に驚く。

「ここで仕留めきれなかったのは痛いわね。伊予島さんも隠れている相手を撃ち抜くのは難しいのでは」

「タマはあんずを信じているからな。このくらいでは終わらないさ」

その言葉通り、天守閣の頂上から数発の金色の矢が発射された。

発射された3本の矢は、路地裏から脱出し、善通寺方面へと逃げていた若葉の足の近くに着弾した。

少しでも丸亀城から見える場所にいと、数秒で矢が飛んでくるため、慎重に進むしかなかった。

「だが、丸亀城から見えない場所なら問題はない」

若葉は家や塀の壁に沿って動くようになっていた。しかし道路を横断するため、壁を離れた瞬間、金色の矢が若葉の肩に向かって飛んできた。

とつさに太刀ではじき返すが第二射、第三射と次々と若葉の身体に正確に飛翔してきており、さすがに迎撃できないため、家の塀の中に飛び込んで隠れる。

「はあ、はあ。なんで撃ってこれるんだ」

杏は地図を確認しながら若葉の姿が確認できた地点から、どのようなルートを通るかを導き出し、その方向へ曲射弾道で矢を発射していた。

高い狙撃能力、そして杏の武器特有の速射能力があるからこそ可能な技であった。

「このままだとまずい、あと一キロ以上はある」

ここから若葉と杏の戦いは過熱化し、若葉が偽装ルートを通ればそれを杏が見抜いて攻撃をするといった攻防が何度も行われた。

しかし、決定打を杏は打つことができなかった。

「はあく、少し休憩だ」

流石の若葉もいつ降ってくるかわからない金色の矢を警戒し、緊張し続けることになりの疲労感を感じていた。

「だが、もうあと100メートル程度で圏外だ」

若葉が移動しようとした瞬間に、一本の矢が彼女の眼の前に現れた。

「うわー！」

驚きながらも太刀で矢をはじき返すが、今度は後ろからも矢が迫っていた。

明らかに丸亀城の方向ではない方角から矢が飛んできていた。

周囲を警戒し、矢の飛んでくる方角を見ると、近くに設置された電柱と地面を跳弾して若葉の方に矢が迫ってくるのが見えた。

「跳弾！不味い！」

これで若葉の死角はなくなった。

時間をかければかけるほど不利になると判断した若葉は近くの通りに出て、一気に走り出す。跳弾した矢が数発命中しかけるが、太刀ではじき返していた。

もう少しでゴールだという瞬間、1本の矢が若葉の身体に命中した。

その時、杏が発射した矢の数は7本であった。近くの電柱や、地面、店の壁、信号機を、そして角度を付けて発射した曲射弾道の矢は同時に若葉の身体に着弾するように計算されていた。そして若葉が太刀で迎撃できた矢は6本であった。

『試合終了。勝者、伊予島杏！』

試合が終わって暫くすると、若葉や杏が丸亀城の広場に戻ってきた。

「二人ともお疲れ様」

「あんずくすごかったぞ〜」

球子が勝利した杏に抱き着きながら勝利を称える。

「若葉ちゃん、惜しかったですね。あと少しでしたが……」

ひなたも、若葉の健闘をたたえるが若葉は苦い顔をしていた。

「いや、この戦い。始めから私の負けだ」

「若葉ちゃん、それってどういう意味？」

頭にはてなマークを浮かべた友奈が若葉に聞く。

「私は始めから通るルートを見通されていた。いや、その場所を通るように誘導されていた」

「正解です。さすが若葉さんです。あれだけの矢を迎撃され続けたのはちよつとシヨックでしたけど」

「それに始めから跳弾できる矢を使わなかったのはなぜだ？」

「切る札は最後まで取っておくものですよ」

最後の最後で若葉は焦った。あと少しのところまでゴールだったからか、不用意に広い道路に出てしまったのだ。そこに、跳弾を利用した杏の波状攻撃が行われ、若葉に矢が命中したのであった。

「杏の本気の前にはどこに逃げ隠れても無駄だな……」

「タマっち先輩が逃げても、私はどこまでも狙い続けます」

「怖いこと言うなよ〜」

杏のクロスボウの射程圏内は檻のようなものである。檻から逃げようとすれば金色の矢が降り注いでくる。そんな檻である。

「射撃や狙撃スキルは高いと思っていただけ、ここまですごいとは……」

「伊予島さんを侮っていたのは私の方だったみたいね……」

悠岐と千景が杏の能力に戦慄していた。

若葉に力を見せつけてやろうぜというのが今回の企画だったが、どうやら若葉以外にも効果があつたらしい。

第一試合 若葉VS伊予島杏

勝者 伊予島杏

翌日、丸亀城の広場にて第二回戦が行われた。第二回戦は若葉VS球子であった。普段、後方で杏を護衛しつつ、旋刃盤で中遠距離の援護を行ってくれる頼れる味方である。

球子が構わないということもあり、武道の試合形式で戦いは行われることとなった。

球子の手には旋刃盤とおなじギミックが施された盾が与えられ、若葉は刃の部分が硬質のゴム製でできた刀と鞘を与えられていた。

勝敗は、審判が実戦の場合に戦闘不能になる一撃を加えられるか、どちらかが自主的に降参するかで決まる。

「それでは、始め！」

審判の友奈の掛け声と共に、二人が動き出す。

若葉は抜刀をし、球子の脇下へ一撃を加えようとするが、その一撃は球子の盾によつ

ていなされる。しかし、もう片方の手に持っていた鞘を盾で守られていない足の部分へ振るった。

その鞘を球子はジャンプしてよけると、持っていた盾で若葉の腹部を殴りつける。

若葉は球子のシールドバツシュを刀で防ぐと後ろに二歩ほど下がり、距離をとる。

球子は左足を蹴って後ろに飛びながら盾を、手裏剣を投げる要領で若葉へと投げた。

「っ甘い!!」

若葉はそれをすれすれでよけると、無防備な球子の身体へ刀を打ち込む。

「かかった!」

球子が腕を動かすと盾とつながっていたゴム製のワイヤーが若葉の腹部に当たる。

「ぐっ……」

ワイヤーが当たった瞬間に横っ飛びをして、腹部への衝撃を和らげた若葉であったが、体制を立て直すころには手に盾を持った球子が目の前に迫って来ていた。

「させるか!」

若葉は左手に持った鞘でその盾を防ぎ、右手に持っていた太刀で、球子の膝の部分へ突く。刺突攻撃に対応しきれなかった球子は足を動かして何とか膝蓋骨への直撃を免れたが、太刀が掠ったらしく、距離をとった後も掠った部分を擦っていた。

「さすがに強いな〜若葉」

「タマっち先輩！がんばです！」

「土居さんも流石ね。盾の使い方が上手だわ」

「私はたぶんタマちゃんと相性が悪そうだなあ」

外から一進一退の攻防を見ていた勇者たちが思い思いの感想を述べる。ただ、全体的に若葉が攻め立っている展開であった。

何度か盾と太刀がぶつかる音が響き渡ると、若葉が距離を詰めて抜刀を行う。球子は待つてましたとばかりに盾を斜めに傾け、若葉の太刀をいなす。しかし若葉は抜刀の勢いをそのままに左足を軸足に右足で球子を蹴りつけた。

予想外の蹴りによって態勢を崩され、倒れてしまった球子は急いで起き上がった。その瞬間、球子の目の前には剣先をむける若葉がいた。

「……降参だ」

球子は、消耗しており、もう戦えないと判断し、負けを宣言した。

「勝負あり、勝者、乃木若葉」

球子の敗北宣言と同時にギャラリーの4人が二人に駆け寄る。

「さすが若葉だ。体術まで心得得ているとは」

「タマっち先輩、惜しかったです」

「若葉には流石にかなわなかったな」

杏と悠岐に球子は戦いの感想を述べる。結果は負けであったが顔には笑顔があり、楽しんでいたようである。

「土居さんは健闘したほうよ。相手は人間兵器だったのだから」

「千景、さすがの私も泣くぞ……」

「冗談よ」

もともと球子は中遠距離と防御を得意とする勇者だ。近接戦闘で化者のような能力を持つ若葉にここまで戦えるなら十分である。それに若葉の☒太刀☒は最後まで防ぎ続けていた。

第二試合 乃木若葉VS土居球子

勝者 乃木若葉

二日後、第三回戦として、千景VS若葉の勝負が行われた。それなりに因縁のある相手なので注目カードであった。

「乃木さん。あなたの目から見て、私は仲間として信頼できる存在ですか」

「それは、当たり前だ」

「私は全力であなたを叩き潰します。私程度に負けるようなら、私はあなたをリーダーとは認めない」

「面白い。なら、私も全力で叩き潰してやろう」

二人が試合前から挑発しあっており、得も言われぬオーラが漂っていた。

「千景も挑発するね〜」

「千景さんも若葉さんに本気で戦ってほしいみたいです。若葉さんはわりと挑発に乗りやすいタイプですので」

悠岐と杏が二人の口上を分析していた。

今度も審判役の友奈が試合開始の合図を行い試合が開始された。

「それでは、始め！」

友奈の開始の掛け声が丸亀城の広場に響き渡る。

若葉と千景はお互いの武器を構えたまま、動かなかつた。10秒ほど沈黙が続き、先に動き出したのは千景であった。

大鎌は若葉の胴体部分を切り裂くように振るつたが、若葉は一步後ろに下がってそれを回避する。千景は踏み込みながら返す形で鎌を振りぬく。

千景の第二撃をしゃがんでよけた若葉はそのまま蹲踞の姿勢から抜刀を行う。

千景は第二撃の勢いそのままに高速で一回転し、若葉の抜刀した刀を大鎌の口金の部分でぶつけ、若葉の一撃を防いだ。

本来であれば甲高い金属音が聞こえるはずだが、今はゴム製の刃を装備しているため

☒バチン☒という音が広場に響き渡る。二人の渾身の一撃がぶつかりあったのである。

若葉が上段から太刀を振り下ろせば、千景は大鎌の柄の部分で防御を行い、千景は長いリーチを生かして若葉を攻撃していた。

若葉が大鎌の柄の部分に太刀を当てて防御をすれば、千景は大鎌を自分の方向へ引つ張り、鎌の刃の部分で若葉の背後を切り裂く攻撃を行うなど、本来武器として利用されにくい鎌を生かした戦いを行っていた。勇者の力によつて強化された筋力が、使い勝手悪い大鎌を一流の武器へと進化させていた。

大型の武器なので隙も大きいと判断していた若葉であったが、鎌と柄、そして遠心力をうまく使いこなす千景に苦戦していた。

「はあ、はあ。やるな、千景」

「はあ、はあ。あなたには負けられないのよ」

互角の戦いを繰り返していた二人であったが、少しずつだが若葉が優勢になっていた。若葉の居合と剣術の実力は達人の域に達しているうえ、体力や経験が若葉の方が上であった。

「終わりだ！」

体術も織り交ぜながら千景を攻め、彼女の体力を消耗させる。

体力が消耗したことで、大鎌を振るう力が弱まった一瞬の隙を突き、千景の鼻先に剣

先を向けた。しかし千景も若葉が勝利を確信した隙を突き、鎌の柄の部分若葉の左手を打ち付けていた。

「はあ……私の負けよ」

「いや、私の負けだな。油断した」

流石にこれ以上は戦えないと判断した千景が降参宣言をする。若葉も千景の最後の
一撃で左手がしびれているらしく、試合続行は不可能だと判断していた。

「引き分けってことでいいかな？」

審判の友奈が二人に確認をとる。二人が無言で頷いたこともあり、勝負は引き分けとなつた。

「さすがに体力が違ったか」

「そうね、私も基礎体力の訓練を怠ってはいなかったのだけど」

千景は肩で息をしながら体力不足を反省していた。

「ぐんちゃん。朝一緒に走る？」

「

「高嶋さん達って朝10km以上走っているわよね……」

「うん。私と悠岐先輩と若葉ちゃんまで走っているよ。最初は仲良くペースを守って走っているんだけど、最後の方になるとどうしても競争になっちゃって」

「前に短距離走みたいいな速さで走っているのを見て、参加するのを躊躇ったのよ」

悠岐は戦闘のセンスが一番高いのは千景なのかもしれないと思っていた。大鎌という扱いにくい武器でここまで人間兵器の若葉と戦っていた。

千景も顔には出していないが、若葉相手に一撃入れることができたのが相当うれいようだった。言葉の節々にうれしさがにじみ出ていた。

第三試合 乃木若葉VS郡千景

引き分け

翌日と翌々日に悠岐、友奈と模擬試合を行う予定だったが、それはできなかつた。

千景と若葉の試合の後に巫女服をきたひなたと千尋が大規模なバーテックスの襲来の神託を授かったという報告が勇者たちに告げられたからだつた。

「大規模って、前の戦いが大規模じゃないのかよ」

「最終的に数えたら4200体ほど出現していたわよ」

球子と千景が、前回の苦戦を思い出し、渋い顔をする。

「おそらく前回の倍以上の敵が襲来すると思われれます。進化体も相当数出現するかと」
「それならそれ相応の準備が必要だな」

「悠岐さん、全員で作戦や陣形を考えましょう」

「そうだな」

前回の数倍の規模の侵攻が行われるため、前回のような独り相撲はできないと痛感していた若葉も積極的に今後の方針を決める作戦に参加してきた。

決戦の数日前の話である。

決戦前夜

2019年2月中旬

戦闘兵器である若葉に私たちの實力を見せてやろうという目的で行われた模擬戦闘であるが、友奈と私の戦いは延期されることになった。

『大社』本部へ行っていたひなた、千尋が神樹様から恐ろしい神託を授かったからだ。神託の内容は「近日中にバーテックスの総攻撃が行われる」というものであった。そして、この総攻撃はかつてない規模の大攻勢であることが告げられた。

今回ばかりは「戦死」という言葉が全員の中の頭に浮かんだ。

だが、私たちには「逃げる」という選択肢は選べないのである。なぜなら私たちは『勇者』だからだ。

「総攻撃か……」

「この間の攻撃が総攻撃じゃないのかよ〜」

若葉とタマが総攻撃と聞いて嘆く。

「あの規模で前哨戦となると、次の攻撃では数倍の敵が来るって考えた方がいいな」
「ええ。おそらく前回の数倍の敵の襲来を覚悟した方がいいかもしれないわね」

前回の攻撃を思い出し、渋い顔をする私と千景であった。

「若葉、分かっていると思うけど……」

「悠岐さん、私もそこまでバカではない。今回は本当に作戦と連携が必要だ」

前回の戦いで、脳筋の若葉も物量という攻撃の恐ろしさを思い知ったようである。

ここにいる6人の勇者の力を合わせて何百倍もの敵を殲滅する必要がある。だから綿密な準備が必要だ。

「前回の戦いで途中から私たち行っていた交代制を今回の戦いでも採用したいと思いません」

「私もそれは考えていた」

「おそらく持久戦になると思いますので、3つのチームを組み合わせたいと思います。1つ目は若葉さん、悠岐さんの大火力チーム。2つ目は友奈さん、千景さんの連携力が高いチーム。3つ目は丸亀城の防衛と、後方援護を行う私、タマっち先輩チームです」

丸亀城を拠点とし、6人の勇者を3つのチームに分けて戦力を運用する作戦である。

連携力が高く、囲まれても戦うことが可能な友奈・千景が星屑などの雑魚の敵を掃討し、二人が負傷、疲労した場合は若葉・私が交代で出撃する。また、進化体が出現した場合は4人同時に出撃して対応することが決められた。

杏と球子は拠点である丸亀城の防衛と、旋刃盤、クロスボウで援護を行う役割が与え

られた。

今回ばかりは進化体も大量投入されてくると推測されるため、精霊の力も出し惜しみはできないだろう。

丸亀城の中には、救急用の道具や戦闘糧食（うどん）を大量に用意することが決まった。

さらに、バーテックスの奇襲や「矢」型の進化体の遠距離攻撃を警戒して、丸亀城そのものも強化されることも決まった。

「とりあえず、私と杏は戦闘面の作戦をさらに練ることにする」

若葉と杏は作戦を考えるため、教室で香川の地図などを確認していた。

「じゃあ、私と千尋は丸亀城強化のための使い捨て装甲板を防衛隊から取り寄せてくるよ。確か何枚か残っていたはずだから。あとは、救急用の道具もいろいろ用意しよう」

私たちは防衛隊から利用できそうな武器や道具を調達しに行くことにする。

「わたしは『大社』にある簡易結界のお札を用意します」

ひなたは『大社』相手に神樹様の力が宿った結界を張る道具を用意することになった。

「じゃあ、私とぐんちゃんもは休憩用のうどんとかを用意するね」

「うどんとカセットコンロ、うどんの薬味を買いに行けばいいわね」

「カセットコンロならタマが持っているぞ。キャンプ用品だからな」

他の3人は休憩時に必要な道具を揃えに行くようである。うどんは、私以外の体力や士気が回復する魔法の食べ物である。

私は私で食料を用意しておこう。

襲撃が行われるという神託を告げられた翌日、私たちは四国防衛隊善通寺本部に来ていた。

「ええーあの装甲板が欲しい。流石に難しいな……全部壊れてしまったしな」

「そこを何とか……」

主力戦車の複合装甲を利用した装甲であるため製造が難しいようである。神樹様の加護を付与するために莫大な時間もかかるため、ホイホイと作れるものではない。製造されて保管されていた分はすべてパーテックスとの戦いで壊れてしまっている。

何とか交渉して、旧式戦車の装甲を利用した使い捨て装甲板を数セット確保することに成功した。

因みにこいつらは、防衛隊がまだ自衛隊だったところに『勇者』の力ではなく、自衛隊の力でパーテックスを倒すために造られた兵器だったらしい。今は予算と人員の無駄というところで計画は廃棄されているが、それなりに利用できそうな兵器が各地の駐屯地の倉庫で眠っているらしい。

「あとは救急系の道具を用意すれば大丈夫かな」

お父さん達に必要なモノを用意してもらうように交渉し、私たちは丸亀城に戻った。丸亀城に戻ると、若葉とタマに、骨付鳥の店に行かないかと誘われたので、私と千尋、それに家で一人でゲームをしていた千景も誘って行くことにした。

「初めて来たが、美味しいな」

「だろ〜？この町のグルメはうどんだけじゃあないんだな〜」

「ご飯が、進むぞー！」

「本当ね。来てよかったわ」

「みんなよく食べるね……」

私と若葉とタマは何皿もお替りをして、骨付鳥を食べる。外見では小食そうな千景もガッツリと食べており、勇者の食欲旺盛さに千尋が若干引いていた。

タマと若葉は「おや」か「ひな」のどちらの美味しさが上かで揉めていたが、私にとつてはどちらも美味しいのでどうでもよかった。

しかも二人が同じ店に来ていた小さな子共に喧嘩がしてはいけないと注意まで受けていた。

みつともないぞ……

「それにしても若葉やタマ、千景の知名度は高いみたいだね」

「あれだけ顔を出しているから仕方がないだろう」

因みに私は名前だけしかメディアでは報じられていないので、一部の人しか知らない。防衛隊の方針でメディア露出は控えろと言われているからである。

私がいちろとやんちゃでできたのも、顔が割れていないからである。

「軽率な行動は控えるべきね……」

千景の冷たい目がタマと若葉を貫く。

「すいませんでした……」

襲撃があることが告げられてから丸亀城は慌ただしくなった。

『大社』の職員が結界を張り巡らす準備をするために、走り回っていた。また、使い捨て装甲板を用意するために防衛隊の職員も東奔西走していた。

「さて、こんなもんだらう」

勇者、巫女の8人も天守閣の最上階の部屋を『大社』の職員と共に改造していた。私と若葉は救急用の道具や戦闘中の食料などが整理していた。

「さて、千景。流石にゲームは無理だ」

「私にとつての休憩はゲームをすることよ」

「友奈、GO！」

「ぐんちゃん。それはだめだよ」

「ああ、高嶋さん待つて……」

友奈が千景のゲームを没収する。流石に戦闘中は遊ぶ暇はないと思うぞ……

「タマ、寝袋つて必要なの……」

「これは最高品質の寝袋だぞ。今はもう手に入らない海外のアウトドアメーカーの最高級品だ！体力が一瞬にして回復するぞ」

「タマ、そんな大事なモノが私たちの血で染まってもいいのか」

「げげーそれは勘弁だ」

タマは横になれるスペースを作っていた。私たちは多かれ少なかれ怪我をするだろう。タマの宝物を汚すのはさすがに気が引ける。私がそのことを確認すると、すぐに撤去していた。

とりあえず保健室のベッドを移動してこようか。

「この射角なら大丈夫かな」

杏は、射撃ポイントを綿密にチェックしていた。そのほかにも彼女は対バーテックスの戦闘行動なども策定しており、一番忙しそうにしていた。私や若葉などの他のメンバーとも相談しながら、作戦を練っていた。

数日かけて丸亀城は、戦闘用の城へと変わっていった。

「千景が妙にミリオタっぽかったのはゲームの影響だったのか」

「ミリオタではないわ。ちよつと興味があるだけよ」

『敵潜水艦を発見』

無機質なアナウンスがスピーカーから発せられる。

「ああああ、こいつらゴキブリみたいに湧いてくる……」

「ふふふ、これがこのゲームの面白いところよ」

「ゲームバランスが崩壊している……」

「あなたもまだまだクソゲーマスターを名乗るには早いわね」

「私はそんな称号を名乗った覚えはない……」

私は千景と共に名クソゲーマスターをプレイしていた。先ほどまで千景は、若葉と名作ゲームの協力プレイをしており、二人の雰囲気は和気藹々としていた。

何この差……

その後も二人で舌をかみ切りたくなるようなゲームをプレイしていた。

「なあ、千景は『勇者』になってよかったか？」

「愚問ね。当たり前前よ」

「そうか」

千景の戦う理由は私にはわからない。だけど、彼女は戦闘に対して積極的だ。だからこそ、若葉のように一人で突っ走ってしまふ可能性があるかもしれない。

「私は乃木さんのように一人では戦わないわよ。そこまで自惚れてはいないわ。高嶋さん、それに乃木さん、悠岐さん、伊予島さん、土居さんの5人と協力しないと、バーテックスは倒せないわ」

その気持ちを察したのかどうかはわからないが、一人で戦うつもりはないと宣言した。

「そうか……なら安心だ」

結局クリアはできなかった。私の精神の方が持たなかったからだ。千景は何度も攻略しているらしい。

もうプロだよ、彼女は……

千景とゲームを行った翌日、ひなたと千尋が英気を養うために、食事を振舞ってくれた。

「できましたよ〜」

丸亀城の食堂には勇者6人が座っており、配膳される食事を楽しみにしていた。そして振舞われた料理はうどんであった。

「香川の名店の人来ていただいて、作ってもらった最高級の一品です。召し上がってください」

「「「いただきます」」」

6人が同時に湯気が立ち上るうどんをすすする。

「こ、これは」

「美味しい」

「おいしすぎるぞ」

各々語彙力を失いながらうどんを啜る。人は本当に美味しいものを食べると無言になるらしい。私も別にうどんは嫌いでもないし、むしろ好きな方であるから喜んで食べた。

数分で全員汁の一滴も残さず食べ終わると、調理室から千尋が出てくる。

「悠岐、次の戦いは頑張ってね」

そう言っただけで私の前に出されたのは、どんぶりに入った一杯のラーメンであった。しかもただの醤油ラーメンではない。徳島ラーメンでもない。私の一番の好物の京都ラーメンであった。

「こ、これはあの名店の……」

「そう、悠岐が大好きだったあの店を再現したラーメンだよ。流石に細かいところまで

は再現できなかったけどね」

スープに浮かびあがるほどの背油と、柔らかい面は間違いなく京都のラーメンである。

「京都出身の人や、四国中のラーメン店の人達と協力してつくったんだよ」

「あゝ千尋、愛しているぞ」

私はすぐに麺を啜り、スープを飲み干す。見た目はこつてりしているのに、不思議と飲めてしまう。不思議な感覚に酔いしれることができるのがこのラーメンの特徴であった。

「3年ぶりの味だ……」

私の食べっぷりに影響されたのか他の勇者たちもラーメンを食べたいと千尋に注文する。これも想定していたのか、すぐに5杯分が用意され、全員食べることができた。

それぞれの感想は、

「前々から勧められていたが、いざ食べてみるとうまいな」と若葉

「見た目と違ってスープまで飲めてしまいます」と杏

「ご飯と合わせて食べてもうまいかもな」とタマ

「おいしいわ。でもかなり健康に悪そうね……」と千景

「でもまた食べたいね」と友奈

と呟いており、高評価のようだった。

今までうどんばかり布教されてきたから、これからはラーメンの反撃の時が来たのかもしれない。

こうして楽しい食事の時間が過ぎていった。

夜、『勇者』6人と『巫女』2人が若葉の部屋に集まっていた。

決起集会を行いたいこのことで、若葉が全員を集めたのである。

「壁の外で警戒をしている防衛隊の人から先ほど情報が入った」

一応全員のスマホにも共有されていることだが、若葉が再確認を行っていた。

「バーテックスが瀬戸大橋付近で集結中とのことだ。おそらく早くて明日、遅くても明後日までには四国へと侵攻してくるだろう」

「敵の数は数えきれないらしい。だが、明らかに前回よりも多いことはたしかだ」

「次の戦いは長く、苦しいものになる」

精霊の力も利用しないとイケないだろう。そうなれば肉体、精神へのダメージは大きくなるだろう。

「前回、私は自分の力を過信しすぎていた。そして、みんなの力を信用、信頼できていなかった」

「この通りだ、すまなかった」

若葉がそういつて私たちに頭を下げてきた。

「だから、次の戦いではみんなまで戦いたいと思う。そして、誰一人として欠けることなく教室に戻つてこれるようになりたい。そのために、私はリーダーとして、『勇者』としての義務を全うするつもりだ」

「だから、みんなも協力してほしい」

私たちの回答は当然

「」「」「当たり前だ（です）」「」

⊗Y e s ⊗だ。

こうして私たちは戦いへの士気を高めるのであった。

翌日の朝、戦いが近いので日課のトレーニングは休みにしていたが、早起きが習慣になつていたこともあり、私は朝早くに起床してしまった。

二度寝するのも面倒なので、軽く散歩がてら外の空気を吸いに行く。

外に出ると、冷たい風が身体を震わせた。

「寒い……やっぱりやめようかな」

予想以上に寒かったので、部屋に戻ろうとすると、隣の部屋のドアが開く。

「悠岐、おはよう」

「千尋？おはよう……」

「どうせ悠岐のことだから、朝起きて散歩でも行くかと思つてね。早起きしていたんだよ」

「わかりやすいなあ、私は」

二人で散歩をすることになった。

朝早くの丸亀の町は静かであった。

「悠岐、『約束』、覚えてる？」

「忘れるわけないよ」

「そう……」

「誰も死なせない。絶対に生きて帰るから」

「お願いね……必ず帰つて来てね」

「ああ……」

散歩を終えると、すでに太陽も登り、朝食の時間になっていた。着替えをするために一度自分の部屋に入る。

その時、私はふと思つてしまった。

「別にこの戦いが最後つてわけではないんだよね……」

勝手に私たちはこの戦いが最終決戦のように思いこんでいる。だけど、この戦いはあくまで防衛戦のようなものである。まだ、敵の本拠地も叩けていない。あくまで防衛をしているだけなのだ。

だけど、戦って戦って戦い続ければ、いつか敵の親玉が出てくるはずだ。

「その時まで死ぬわけにはいかない」

そう、死ぬわけにはいかないんだ。

決戦、丸亀城

空を埋め尽くす無数の星々

星の数はまさに無限。

星のいくつかは重なり合い、より輝きを増していく。

それらは流星のように墜ち、大地を破壊する。

千尋とひなたが神樹様から授かった神託の内容である。

『星』は、星屑のことである。

無数の星屑と進化体のバーテックスが四国へと襲い掛かってくることを知らせる内容であった。

この神託を授かってからは、忙しかった。決戦に備え、様々な準備を行った。『勇者』も『巫女』も『大社』も『四国防衛隊』も、すべてが総動員（二重言葉）されたのであった。

そして神託を受けてから十日ほどで決戦の日は訪れた……

2019年2月下旬

決戦の日は、2月も終わりに近い日であった。四国で暮らしている人間のほとんどは、平穏な日常を過ごしていた。

そんな中、最大級の警戒を行っている組織があった。一つは『大社』である。そしてもう一つは『四国防衛隊』であった。

瀬戸大橋は明石海峡大橋と違って、いくつかの島を経由して本土へとつながっている。四国を守る境界は岩黒島という小さな島の中央を分断する形で貼られていた。瀬戸大橋そのものは岡山県側の入り口付近まで境界に守られているため、瀬戸大橋からかからであれば壁の、境界の外を観測することが可能であった。

通常ならば、壁の外では沿岸警備隊などが警戒を行っている。しかし、バーテックスの集結に危険を感じたため、壁の外での警戒を行っておらず、境界が守られている瀬戸大橋からのみ観測を行っていた。

「敵の様子は？」

「相変わらず気持ち悪いぐらいいますね」

「これが四国に来るのか……」

数名の職員が壁の外を映す映像を監視していた。モニターには大量の星屑が蠢いている様子が映し出されており、見ているだけでも気分が悪くなる映像であった。

「『勇者』が心配だな……」

「先輩は『勇者』様にあつたことがあるんですか？」

「一度な。本部にいったときに食堂で飯を食っていたよ」

先輩と呼ばれた男は、善通寺の本部に行った際に偶然、防衛隊に所属している『勇者』の山田悠岐を見たことがあつた。

「どんな人でした？」

「普通の女の子だったよ。眼鏡を掛けていて。図書館とかで本を読んでいそうな感じの娘だったな」

「へへ。もつとゴリラみたいな人だと思っていました」

「乃木若葉や土居球子を見ていたらそんな発想は生まれなと思うが……」

乃木若葉といった『大社』に所属している勇者のことは、監視所にいる全員が知っている。それどころか、四国中の人間が知っているだろう。臨時政府の首班の名前はわからなくても、『勇者』の名前はわかるという人が今の四国では当たり前のように存在する。

暫く監視を続けていると、水島灘方面に集結していたバーテックスの集団が一斉に壁の方へと進み始めた。海と空を覆いつくすほどの大群が四国へと侵攻を開始したのである。

「おいおい、来やがったぞ」

「本部に連絡だ。敵の数は不明。白が九分に、空が一分！白が九分に空が一分だ！」

一応、全監視所の映像は本部でも確認できるが、万が一の可能性もあるため報告は怠らないようにする。

「頼んだぞ、『勇者』……」

バーテックス襲来の一報を受け、防衛隊の本部は慌ただしくなっていた。

「瀬戸大橋観測所から報告です。バーテックスの侵攻を確認しました」

「すぐに情報を大社と共有しろ。すぐに勇者たちに連絡を」

「了解です」

指令室のモニターには白い塊が壁に向けてゆっくりと進んでいる様子が見て取れた。

数分後、部屋に耳障りな音が響き渡る。モニターには『樹海化警報』の文字が映し出された。

「山田司令、樹海化警報が発令されました」

「そうか」

この司令室を監督する山田裕紀はこれから始まる戦いに身を投じる娘の身を案じていた。樹海化が始まれば、勇者以外は一切の干渉ができなくなる。戦いの結果は樹海化が解けた後にしかわからないのである。

(生きて、帰ってこい)

丸亀城では、いつバーテックスが襲来してもいいように最大級の警戒を行っていた。バーテックスの襲来はそんな警戒のなか始まった。

丸亀城内にサイレンが鳴り響いたとき、悠岐達は準備した部屋で待機していた。

「来たか……」

「敵の数は不明。白が九分に、空が一分か、実にわかりやすい表現ね」

若葉と千景がスマホに表示された敵の情報を見ていた。

「さて、行こうか」

悠岐が全員に呼びかけた瞬間、樹海化警報が鳴り響いた。

ここにして、西暦時代の人類とバーテックスとの戦争において「丸亀城の戦い」と呼ばれる激戦が始まったのであった。

樹海化が終わると、見慣れた世界が広がっていた。しかし、瀬戸内海の方を見ると空が真っ白に染まっていた。

「天の光はすべて敵か……いい得て妙だな」

「すさまじい数だな」

スマホのアプリには敵影が映し出されているが、敵が多すぎて表示することができなかった。

前回の数倍という規模ではなかった。少なく見積もっても6桁の敵がいると推測できた。

若葉と悠岐も大規模な襲撃が来るとわかっていたが、想像を絶する量の敵影を見て眉間にしわを寄せながら嘆いていた。

リーダー格の二人が険しい顔をしているとチームのまとめ役の友奈が元気な声をかけてくる。

「二人とも、険しい顔をしているよ。諦めたら試合終了だよ」

「そうだな、まだ戦いは始まっていないものな」

悠岐と若葉が頷く。

友奈の音頭で勇者6名が円陣を組む。組み終わると、若葉が話し始める。

「よし、みんな聞いてくれ。これから私たちは四国を守るために戦う。おそらく辛い戦いになるだろう。だが、みんなで戦おう」

私たちは戦友だ

言うなれば運命共同体だ

互いに頼り 互いに庇い合い、互いに助け合う

一人が六人の為に 六人が一人の為に

「さあ、武器をとれ！戦いの始まりだ！」

「「「オーオーツ!!」」」

勇者たち6人の声が重なる。

決戦は始まった。

白い塊の軍勢、星屑の数が多すぎて遠目からはそのように見えるだけだが、その集団の中には進化体も混じっていた。

「12時の方向、「矢」型2体、「シールド」型2体確認！突出してきます」

杏のクロスボウの先には4体の進化体が悠々と丸亀城へと進んでいる姿が見えていた。

「私と悠岐さん、友奈と千景で迎撃に当たる。「矢」型を倒し終わったらシールド型はいったん放置する。千景と友奈も退避してくれ」

「「了解」」

「球子と杏は各人の判断で援護、防衛を行ってくれ」

「「了解」」

若葉が想定した作戦通りの指示を5人に与える。

「みんな、行くぞー！」

若葉と悠岐、友奈、千景の近接戦闘の能力の高い組が城から飛び出し、一気にバーテックスの下へと向かった。

途中、進化体から放たれた猛烈な弾幕に行き足が止まりかけるが、杏の正確な射撃で、4人に当たる直撃弾だけがビリヤードの如く弾かれていった。

「ひなたーっ!」

「桜花ー!」

悠岐と若葉が加速し、神速の抜刀を一体の「矢」型の進化体に叩き込んだ。

「勇者くパーンチ!!」

「彼岸に送ろう………落命死葬!」

友奈の手甲の一撃と千景の大鎌の一撃が別の「矢」型の進化体に叩き込まれた。

悠岐と若葉の攻撃で傷がついた進化体に、追撃の一撃として杏の金色の矢が降り注いだ。もう一体にも球子の旋刃盤が命中し、4人の勇者によってつけられた傷をさらに深めた。

「もう一回行くぞ!」

「了解!」

再生する暇を与えず、追加の攻撃を4人の勇者が行い、そこに杏と球子が援護を行った。その結果、進化体は連続攻撃に耐えきれず粉々になって消滅した。

「それじゃあ私たちは一旦お城に戻るね」

「あとは任せたわよ」

遠距離攻撃が可能な進化体を倒したため、友奈・千景チームは一旦城へと退避するこ
とになった。

「任せてくれ」

「私たちが戻るまでに体力を回復させておいて」

二人が後方に下がっていくのを見ながら、正面の敵を見つめる。この間にも杏は次々と狙撃で星屑を撃墜していた。

二人は息を合わせ、城に迫る星屑の群れへと突入した。

本丸である城では、2人の勇者が城に近づく星屑を迎撃していた。

「タマっち先輩、3時の方向から敵が接近中です。迎撃を」

「わかったぞー！ いっけー」

指定された方向に旋刃盤を投げ、前線の二人を突破してきた星屑を屠る。

杏は、城に近づく星屑を迎撃しつつ若葉や悠岐を狙撃で援護していた。前線の二人は白い壁のような星屑の中から突出してくる星屑の集団の中で暴れまわっており、彼女たちの隙を突こうとしていた星屑を狙撃で倒していた。

杏はこの戦いで、戦鬪の推移や敵の動きの観測、前線の勇者の援護、城の防衛と非常に仕事が多かった。しかし、勇者の力で強化された思考能力や演算能力によつて対処していた。

戦いが始まつて半時ほどが経つと、前線の二人に疲労感が見られ始めた。

何とか事前策定した防衛ラインの死守には成功していたが、あまりに数が多すぎたため、数が減っているようには見えなかった。

(全体的に侵攻スピードがゆっくり過ぎます。何かあるのかも……)

これだけの物量ならば四国中に星屑を展開することも可能であるが、バーテックスの主軍団は相変わらず瀬戸大橋と丸亀付近で停止していた。

杏は何が起きているのか、バーテックスの狙いを探っていた。

しかし、四国へと上陸する星屑の数が多く、『勇者』たちの迎撃をすり抜けた一部のバーテックスはすでに丸亀以外の方面にも侵攻を開始していた。

彼らが暴れまわれば、現実世界でのフィードバックが恐ろしいことになる可能性もあった。

「千景、友奈、任せただぞ」

「高嶋友奈、任せられました！」

「乃木さん、悠岐さん、あとは任せてもらうわ」

交代した二人が城に迫りくる星屑の集団の中に突入していった。二人は城に近づくと星屑を倒しつつ、丸亀以外の方面に向かう星屑を迎撃していた。

高松方面に向かう星屑も、愛媛方面に向かう星屑も、城の方に向かう星屑も迎撃しないといけないため、勇者にかかる負担が大きくなってしまいが、神樹様へのダメージを考慮すると無視することはできなかつた。

千景たちが前線で奮戦している間、若葉と悠岐は城で体力を回復させていた。

「杏、やはりおかしいと思わないか？敵が本気で攻撃していないように思えるのだが」

若葉が敵の行動を訝しみ、後方から戦闘の推移を確認している杏に実際に戦っていて感じたことを話した。

「私も同様のことを考えていました」

「この城は強化されていますが、数万の星屑の攻撃には耐えられません。ですがバーテックスはすべての戦力で攻撃を仕掛けず、ずっと奥で固まっています」

杏の指をさす方向には白い壁のように密集した星屑が存在していた。

若葉も精霊の力をあの白い塊に対して使おうか悩んでいた。バーテックスがどのような攻撃を行ってくるかわからない状況では、切り札をやすやすとは使えないのが実情であつた。

「恐らくですが、バーテックスは『精霊』の力を恐れています。あの力を使った場合、一

人の勇者でおおよそ数千単位で星屑は倒せます」

「不用意に戦力を投入せず、あの白い壁の中で何かを行っているのではないかと考えます」

冷静な分析を行いつつも、援護射撃を行う杏であった。彼女は、前線の二人がピンチでないときは、用意した銃座の上にクロスボウを乗せ、重機関銃のように敵に向けて金色の矢を発射していた。

「どんだけ数があるんだよ」

「数えない方がいいよ。死にたくなってくるから」

球子と悠岐は、千景たちが戦っているさらに奥を見る。そこには積乱雲のように密集した星屑の集団が見える。

「十中八九進化しているだろうな」

若葉の言葉に城にいる全員が頷く。

「進化なら外でやればいいと思うんだけどな」

球子が疑問をぶつけてくる。

「いきなり進化体で突入して、精霊の力を使われて殲滅されたら困るからなのでは？」

「進化体一体つくるのに、相当数の星屑が必要だしな……」

正直なところ、バーテックスの考えなんて理解できないが、彼らに知性があることは

確認されている。知性といっても人間のようなものではなく、戦闘用のプログラムのような無機質な知性ではあるが。

「なら今から精霊の力で殲滅してしまうか」

「うーん、それはやめた方がいいと思うぞ」

「タマっち先輩に賛成です。あれだけの星屑を倒すだけでみんな消耗してしまいます。その後に進化体が現れた場合、対処できなくなります」

杏の意見が正しいと感じたのか、若葉も不用意に切り札の使用しないようにする。

「消耗戦でこちらが不利なんてわかりきっている。なるべく疲労や怪我をしないように戦う必要があるな」

若葉の言葉通り、雑魚の星屑たちで勇者を消耗させ、疲労したところを一気に進化体で攻撃してくる可能性があった。そのため精霊の力を使うまでは、なるべく消耗しないように戦う必要があった。

しかし、勇者を消耗させるための捨て駒といっても、1万程度の星屑が丸亀城へと迫っていた。

勇者6人に対しては無数ともいえる数である。

「悠岐さん、星屑が融合して進化体が生まれるんですよね」

「そうだね。基本的に数十〜数百が融合して進化体は生まれるね」

「なら、進化体を大量に誕生させて、そこを精霊の力で一気に殲滅するのはどうでしょう？」

「いくら進化体を造るのに星屑を大量に使用するといつても、あれだけ星屑がいたら融合して減る数なんてたかがしれているでしょう……」

「それもそうですね。となると普通に数万の敵相手に消耗戦をする必要があるのか……」

「もともとそのつもりで準備してきたし、仕方がない。樹海が破壊されて、現実世界にダメージがフィードバックされるかもしれないけど、四国を守るための仕方がない犠牲だと割り切るしかない」

若葉と悠岐が、戦いが当初の予定通り、長丁場になりそうだと考えていた。

ムリをして勇者が戦闘不能になれば、神樹様にとつては大ダメージである。それならば、多少の犠牲を払ってでも、勇者の損耗を防ぐことの方が重要である。

小を切り捨てる覚悟が必要であった。

暫くすると、前線で戦っていた二人に疲労の色が見え始めたため、若葉達と交代することになった。

「千景、友奈。今回は、ほぼ100パーセント全員が精霊の力を使う。準備しておいてくれ」

「あと、作戦は☒ガンガン行こうぜ☒から☒体力温存☒に変更する」

若葉の言葉に二人は無言でうなずくと、城に戻っていった。

「さて、あとはバーテックスの様子を見ながら戦うしかないかな。

悠岐と若葉の二人は再び星屑の軍団に突撃は行わず、城へ向かう星屑に重点的に殲滅していった。

数時間にわたり、星屑の先兵との攻防が繰り返され、6人の勇者の顔に疲労が見られ始めたとき、星屑の集団に動きが見られた。

「皆さん！前方の集団に注意してください」

いち早く動きに気づいた杏が全員に指示を送る。

白い塊から、星屑たちを押しつけて巨大なバーテックスが次々と出現したのである。

「進化体出現しました！」

杏の支持する方向から、進化体の軍勢が迫りつつあった。「矢」型が4体、「シールド」型が4体を視認していた。

倒すための戦力が足らなかつたため、放置していた最初の進化体（「シールド」型）を含めれば、合計10体の進化体が出現したのである。

4体の「矢」型は、前線で戦っている悠岐と若葉を攻撃しつつ、杏達がいる城の方に

も無数の「矢」を発射し始めた。6人の身動きが取れない間に、6体の「シールド」型は、城の周りを囲むように動いていた。

「不味い、包囲されたぞ」

「この弾幕じゃあ攻撃なんて不可能だ」

若葉と悠岐は、樹海化を免れていた建築物にあらかじめ設置してあった使い捨て装甲板に隠れながら、敵が包囲網を完成させていく様子を見ていた。

「こちら悠岐、杏、応答せよ」

『杏です。私たちも弾幕で動けません……』

スマホを利用して、杏と通信を行う。『大社』の必死の努力によつて、今回の戦いからスマホを介した樹海内の通信が可能となっていた。

4体の「矢」型の進化体から放たれた無数の「矢」は、6体の「シールド」型の反射を利用することで、四方八方からの攻撃が可能となっていた。

この状況を打開すべく、球子が精霊の力を使うと宣言した。

『タマに任せたまえ！』

『タマの精霊の力であいつらを蹴散らすぞ』

球子の輪入道の力ならば広範囲の敵を蹴散らすことが可能である。しかし切り札をここで利用していいものかと悠岐は悩んでいた。

「球子、精霊の力を使ってくれ。今がその時だ」

「若葉、いいのか？」

「今使わないでいつ使う。このままだとじり貧だ。城もこの盾ももう持たないだろう……」

『いいんだな？ タマの活躍を刮目しタマえ！』

「ああ、頼むぞ球子！」

球子は神樹様の概念記憶にアクセスし、一体の精霊を顕現させる。1月の戦いでも世話になった『輸入道』である。

普段はそこまで大きいわけではない旋刃盤が、球子の体軀をはるかに上回る大きさまで大きくなる。

「いくぞ、タマの魂を受け取りやがれ!!」

最終的に自分の身長の10倍以上の大きさになった旋刃盤を、球子は、全身を使ってバーテックスに向けて放った。

炎を纏いながら高速で回転して飛んでいく旋刃盤は、4体の「矢」を発射する進化体を切り裂くと、ズタズタに引き裂いた。旋刃盤は、近くで蠢いていた星屑を巻き込みながら意志を持ったかのように回転と移動を続けていた。「シールド」型の進化体に命中すると、高い防御力を有するシールドを突き破り、バラバラに切断してしまった。高速

で回転する巨大な旋刃盤は丸亀城の周りで暴れまわっていたが、球子の操作によって、そのまま城から離れ、高松方面や愛媛方面に侵攻していた星屑の別動隊を焼き払い、切り刻んだ。

一人で10体の進化体と、数千の星屑を殲滅した球子であったが、精霊の力を全力で、長時間使用したフィードバックは確実に彼女の身体を蝕んでいた。

「ッ！」

口から吐血をすると共に、崩れ落ちるように地面に膝をついた。

「タマっち先輩！」

「タマちゃん!？」

「土居さん、大丈夫?！」

近くで球子に近づく撃ち漏らしの星屑を迎撃していた3人の勇者が球子に駆け寄る。

「大丈夫だ! あんずも友奈も千景も戦いに集中してくれ」

「でも……」

「タマの根性をなめるな!!」

『悪いお知らせだ、進化体の追加が来たぞ』

『「角」型が数十体、「ムカデ」型も数十体、それに、あれは……蛇か?』

『それに「矢」型も確認できる。本気でこちらを叩き潰しに来たぞ!』

城から離れた場所にいた二人の勇者が、新しいバーテックスの侵攻を全員に知らせる。

二人の視線の先には見たこともないほど数で構成された進化体の集団であった。

見慣れた「矢」型の進化体バーテックス、明石海峡で苦戦させられた「角」型、「ムカデ」型、それに巨大な蛇のような体躯を持つ進化体が空を飛んで城へと迫ってきた。

その圧倒的ともいえる軍勢の近くには、無数の星屑が護衛のようにまとわりついていた。

「皆さん、進化体の後ろのあれを……」

杏が指示した方向を見ると、今まで白い壁に覆われていた中身が徐々にあらわになる。

「あれは……バーテックスなの？」

数千以上の、無数の星屑が融合し、超巨大な進化体が誕生をしようとしている光景であった。

「超大型の進化体です。あれが本当の切り札です！」

杏の言葉通り超巨大な進化体は、バーテックス側の最終兵器であった。

「満を超える星屑、百を超える進化体、そして超巨大な進化体……」

「あんなのどうやって倒すのよ……」

杏と千景が声を震わせながらつぶやく。今まで見たこともない巨大な敵に二人は怯んでいた。

「さすがの、タママも、あれは無理だ……」

巨大化した旋刃盤を操作して、星屑を掃討していた球子も息を絶え絶えにしながら圧倒的な敵の軍勢を見ていた。

「……諦めたら終わりだよ」

「みんな、力をあわせて戦おう！」

「私たちは四国の運命を背負っている。だからあきらめちゃだめだよ」

「みんなで勝とうよ！」

「勝って元気で教室で顔を合わそうって言ったよ！だから、勇気をもって戦おう。私たちなら勝てるよ！」

友奈が怯んでいた勇者たちを鼓舞する。彼女はどんな状況になっても絶対にあきらめない強靱な精神力と、果てしない勇気の持ち主であった。

『友奈の言うとおりだ。まだ私たちには切り札が残っている』

若葉が精霊の力の事を全員に伝える。

『あの進化体はまだ完成していない』

奥の方で存在感を放っていた超巨大進化体は、いまだに融合を続けている最中であつ

た。ところどころにもろい部分や未完成の部分が存在していた。

攻撃が止んだ隙に、城に戻ってきた若葉がスマホ片手に天守閣の上に立っていた。その隣には悠岐も並んでいた。

その後ろには友奈に肩を貸されながら立っている球子が、肩を貸している友奈、その隣で大鎌を構えている千景、クロスボウを持った杏がいた。

「おかえりなさい、リーダー。それでどうするの?」

「あれを電撃的に叩く。最優先はあの大きな進化体だ」

千景に若葉がこれからの方針を説明する。

「あれを完成させるためにかなりの星屑を使ったみたいだな。何万もの雑魚を相手取る手間が省けた」

「この人、この状況をチャンスとか言っているぞ」

「さすが戦闘民族……」

若葉がにやりと笑いながら超巨大な進化体を見つめていた。その顔に球子と千景が引いていた。

「さすがにあそこまで行くのは骨が折れそうだ」

目標の前には少なくなつとはいえ、大量の星屑と進化体が進路をふさいでいた。

「それなら、タマの武器の上に乗っていけばいいぞ」

球子の巨大な旋刃盤の上に乗れば一気に目標に行けると考えた球子が旋刃盤を天守閣の近くに寄せてくる。

「他の進化体はどうしましょう」

杏が若葉に疑問をぶつける。進化体は他にも大量に存在する。

「私と悠岐さん、友奈、千景が超大型へ攻撃を加える。球子は、私たちが降りたらそのまま他の進化体へ攻撃を加えてくれ。杏は進化体を狙撃で仕留めてくれ」

「若葉さん、何気に難しいことを言いますね……」

「すまない。特に球子と杏には負担を強いてしまつて」

若葉が二人に頭を下げる。

「タマが頑張ればそれだけ敵を倒せるんだろ？ だつたら頑張るだけだ」

「私の力で皆さんが守れるなら、なんだつてできます」

「そうか、頼んだぞ……」

「お話はここまでのようね。そろそろ敵が来るわ」

「そうだな、勇者よ、私に続け！」

若葉の掛け声と共に、全員が球子の旋刃盤の上に乗るこむ。

6人の視界には無数の星屑、100を超える進化体、そして超大型の進化体が見えていた。

「最後の戦いだ、気合い入れるぞ！」

「「「オーーーーーッ!!」」」」

6人の勇者を乗せた旋刃盤は高速で敵に突っ込んでいった。

決戦、丸亀城 2

超大型の進化体を中心に100を超える通常の進化体、無数の星屑が勇者の行く手を阻んでいた。これをすべて撃破しないことには、勇者たちに、そして四国に明るい未来は訪れなかった。

バーテックスを撃滅するため、球子の精霊の力によって巨大になった旋刃盤の上に6人の勇者が乗った。

全員が旋刃盤の上に乗ると、一気に加速してバーテックスの軍団の中へ突入した。

しかし、目標である超大型の進化体の前に、多数の通常の進化体が行く手をふさぐように出現した。

「私に任せてくださいー！」

この状況を打破するため、伊予島杏は精霊の力を行使する。

神樹様の概念記憶にアクセスし、彼女に適合する精霊を抽出し、それを顕現させた。

「力を借ります、『源為朝』様」

杏が顕現させた『精霊』は、源為朝という平安時代の武将であった。弓使いの知名度

としては同じ時代を生きた那須与一の方が高いかもしれない。しかし、「保元物語」などの源平を巡る戦いを記した物語において、弓で船を沈めたなど、超人的な伝説を残しており、弓使いとしては彼もまた最上級の英雄である。

精霊の力を顕現させた瞬間、杏の持っていたクロスボウが巨大化し、彼女自身の力もけた違いに上昇していた。

「みんなには手を出させません！」

杏の巨大なクロスボウから放たれた巨大な金色の矢は、勇者の力で強化された若葉、悠岐の動体視力をもつてしても反応することができないほどの速度で前をふさいでいた。「シールド」型の進化体のシールド部分に直撃した。

非常に高い防御力を持つ「シールド」型であったが、精霊の力によって強化された巨大な矢は進化体を貫徹した。杏の攻撃が直撃した進化体は一瞬にして砕け散った。

さらに、貫通した矢は後ろにいた数十もの星屑を巻き込みながら、「シールド」型に隠れるように動いていた「蛇」型の進化体に直撃する。

進化体の巨大な体躯に金色の矢が突き刺さると同時に大爆発が発生し、一瞬にして「蛇」型の進化体が消滅した。

「すごいな、まるで戦艦の砲撃だ……」

球子の旋刃盤は、杏の主砲が加わったことで巨大な大砲を有する戦艦になっていた。

「第二射、行きます」

間髪入れて杏が先ほどと同様の攻撃を行く手を塞ぐバレーテックス達に加えた。

「杏、進路方向の敵だけを狙ってくれ。それ以外は無視しても構わん」

「了解です！」

若葉の指示で杏の攻撃は、旋刃盤の進路をふさぐバレーテックスのみを標的とした。

「若葉、そろそろ私たちも準備をしようか」

「そうですね、千景と友奈も戦闘準備だ」

ここで若葉の言う戦闘準備とは、精霊の力を使う準備をしろという意味であった。

友奈と千景が頷くと、4人が一気に精霊を顕現させる。

悠岐は『宮本武蔵』を

千景は『七人御先』を

友奈は『一目連』を

そして、若葉は『源義経』を顕現させた。

「そろそろ到着だ！あとは任せたぞ！」

「ありがとう、球子。杏も後ろは任せたぞ！」

「援護は任せてください」

球子の合図と共に、一気に超大型の進化体へと4人の勇者が飛んで行った。

「千景と私が雑魚を殲滅する。悠岐さんと友奈は超大型を頼む」

「了解」

若葉の指示に3人の勇者が返事をする。

若葉と千景が超大型の進化体の周りで護衛するように蠢いている星屑、そして「ムカデ」型の巨大な進化体へと向かっていった。

若葉が神樹様の記憶にアクセスして彼女に顕現させた精霊は『源義経』である。平安時代の武将であり、源平合戦において数々の伝説を残した英雄である。彼の伝説は現代においても数多くの物語で語られている。

「邪魔だあああーーーーー」

若葉が星屑を蹴り、跳躍して、目にもとまらぬ速さでバーテックスを殲滅し始めた。一瞬にして数十もの星屑を倒し終わると、若葉の目の前にいた「ムカデ」型の進化体の多数の体節をすべて切断し、再生する暇もなく消滅させた。

義経の八艘飛び伝説の如き機動力を経た若葉は、後方で援護を行っていた杏や球子に近づこうとするバーテックスや超大型の進化体を攻撃している悠岐、友奈の隙を突いて攻撃しようとしていたバーテックスを次々と倒し、縦横無尽に樹海内を移動していた。

「千景、援護するぞー」

多数の進化体に囲まれ、ピンチに陥っていた千景を若葉が援護する。目にもとまらぬ速さで切り付けられた「蛇」型、「矢」型は、千景への攻撃の手を緩めた。

その隙に、7人の千景が一気に大鎌を振り下ろし、進化体を次々と消滅させていった。(乃木さん、助かるわ)

言葉を交わす暇もなかったが、若葉の助太刀に感謝した千景は七人の自分を使い、友奈に近づこうとしていた星屑たちを次々と倒していった。

「私も負けていけない」

「ありがとう、ぐんちゃん」

助けられた友奈は、『一目連』の力を利用して数百発のパンチを超大型の進化体に加えていた。

しかし、未完成の部分を攻撃しているとはいえ進化体の大きさは数百メートル近いため、ダメージが中々入らなかった。

それは悠岐も同じことで、刀と鞘で連続攻撃を行っていたが、有効なダメージを与えることができていなかった。それどころか星屑が合体して、進化体の未完成の部分が完成していく速度の方が速いぐらいであった。

「若葉、このままだとじり貧だ。どうする」

悠岐の声に反応して、敵を掃討していた若葉が彼女の下にやってくる。

「そうですね……」

『若葉さん、悠岐さん。意見具申です』

スマホから声が聞こえた。声の主は後方で砲台となって、次々とバーテックスを撃ち落としていた杏であった。

「恐らく、攻撃よりも回復するスピードの方が速くなっています。融合している星屑の数が多すぎます」

杏の言う通り、超大型の進化体を攻撃しても、すぐにその傷跡は再生してしまっていた。未完成の部分やもろい部分に星屑が融合することで、破壊された部分を治しているのであった。

その速度があまりにも早すぎたため、二人の勇者の力では有効なダメージを与えることができなかったのである。

『なので、再生力を上回る攻撃を行う必要があります』

「火力を一転に集中か……やってみる価値はありそうだな」

前方正面の未完成の部分に最大火力の攻撃を加えることが決まった。

杏のフルパワーの射撃、若葉と悠岐の居合切り、そして友奈の手甲による攻撃をピンポイントで行う必要があった。

その間、攻撃を行う4人の勇者に隙が生まれるため、旋刃盤という攻防一体の武器を

持っている球子と7人が独立して活動できる千景が護衛を行うことになった。

『伊予島杏、準備完了です』

『高嶋友奈、準備完了だよ』

『土居球子、準備完了。杏の護衛は任せたまえ』

『郡千景、準備完了したわ。伊予島さん、高嶋さん、乃木さん、悠岐さんの近くに私を配置したわ』

「よし、作戦開始だ。杏、頼んだぞ」

スマホ越しに準備が完了した報告を受けた若葉は、作戦開始の命令を発する。

後方から金色の光が見えたと思った瞬間、目の前にいる超大型のバーテックス、それも若葉が見つけていた未完成のもろい部分に杏の放った金色の矢が寸分の狂いもなく着弾する。

今までの攻撃では体表に傷をつける程度だったが、杏の攻撃は進化体の体内に侵徹した。

杏の攻撃によって大きく損傷した場所に、若葉と悠岐の二人の攻撃が加えられる。

「悠岐さん、剣士なら一度はやってみたい攻撃って知っていますか？」

「私は剣士ではないけど……」

「それは、飛ぶ斬撃だ」

「それって……」

そういつて、若葉は抜刀の構えをする。ため息をつきながら、悠岐もそれに合わせるように自身の太刀を構える。

悠岐は、抜刀術がそこまで得意ではないため、抜刀した状態で刀を構えた。

二人の周りは千景「達」が守っているため、ゆっくりと力を貯める。

悠岐は、70センチほどの太刀を両手で持ち、肩の横で構えた。大きなテイクバックをとりつつ、左足を軸足にして身体がねじ切れんばかりに腰を回転させる。さらに、腕を鞭のようにしなせながら太刀をフルスイングする。悠岐のスイングと同時に若葉が抜刀を行う。

「一刀飛翔閃！」

「烈風斬！」

二人の太刀には、神樹様のエネルギーが込められており、それを斬撃の形で飛ばすのが二人の必殺技であった。

青色と白色の斬撃が杏の攻撃によって損傷した箇所命中し、その傷をさらに深める。

「友奈、頼んだぞ！」

若葉と悠岐が最後の攻撃を友奈に託した。

友奈はバーテックスの集団からやや離れたところで待機していた。

杏、若葉、悠岐の3人の勇者の攻撃によって、数百メートルもある巨大な体躯が大きく損傷し、有効なダメージを与えているところを見ていた。

「高嶋さん、今よー！」

「じゃあ、行ってくるよー！」

友奈の護衛をしていた千景の指示に従って、友奈は一気に跳躍する。

友奈は、樹海内の蔦や根を足場に、徐々に加速しながら超大型の進化体へと肉薄していった。勢いそのままに友奈の拳が3人の勇者の攻撃で損傷した場所に叩き込まれた。

「勇者くパーンチー！」

しかし、友奈の渾身の一撃でも進化体を破壊できるほどのダメージを与えることができなかった。

「一発でダメなら、十発。十発でダメなら百発。百発でダメなら千発」

友奈の精霊は『一目連』である。旋風や突風、台風といった「風」に関係する精霊である。台風や暴風のエネルギーを得た友奈は、猛烈な速度で進化体を殴りつけていった。

「勇者は、根性！」

「勇者は、諦めないんだ!!」

精霊の力を使うことで、友奈の体力、精神力が削り取られるが、友奈の脳内には「諦める」という選択肢はなかった。

次々に打ち込まれる友奈の拳によって、進化体の巨大な体躯に大きな傷が次々と発生していた。

これを逃す若葉ではなかった。

「友奈に続け！」

若葉の指示で、損傷して、ボロボロになっていた進化体に5人の勇者が総攻撃を行う。

太刀で

鞘で、

大鎌で、

回転する刃で、

金色の矢で、

「これが最後の、勇者く。パーパーンチ!!」

友奈が叩き込んだ渾身の一撃と5人の勇者の力が合わさった瞬間、数百メートルほどの大きさの進化体のバラバラに砕け散った。

すでに全員が力を使い果たしており、全身は傷だらけになっていた。

「みんな、まだ終わりじゃない！」

「若葉の言う通りだ。ここからは延長戦だ」

若葉と悠岐の言う通り、6人の勇者の攻撃から逃れていた進化体や星屑はまだ多数存在していた。

すでに消耗しきっている勇者たちであつたが、誰一人として武器を捨てるものはいなかった。

「勇者よ、私に続けー！！」

若葉の掛け声と共に、5人の勇者がベーテックスの軍勢に突入していった。

数時間後、樹海内は静寂に包まれていた。

先ほどまで爆発音や衝撃音が響き渡っていた空間とは思えない静けさであつた。

「これで、終わりです」

杏のはなつた金色の矢が、最後の一体と思しき星屑と穿ち、消滅させる。

震える手でスマホのマップを確認するとマップ上には敵の文字は確認できなかつた。全員が樹海の蔦や根の上で倒れていた。

「こちら乃木若葉、点呼をとるぞ」

若葉はスマホの通話ボタンを押して、勇者全員の安否を確認する。

「山田悠岐」

「高嶋友奈」

「郡千景」

「土居球子」

「伊予島杏」

5人の名前を呼ぶ。

しばらくすると全員から「はい」という返事が聞こえた。

「全員生存確認。バーテックスの殲滅完了」

「任務、完了だ……」

若葉がスマホに向けて叫ぶ。

「この戦い、私たちの勝利だ!!」

若葉は刀を天に向け勝利宣言を行った。そしてそのまま眠るように意識を失った。

それはほかの勇者も同じであった。

高嶋友奈と郡千景はお互い手をつなぎながら意識を失った。

伊予島杏と土居球子は背を合わせながら意識を失った。

そして山田悠岐は丸亀城の広場で大の字になって倒れこんでいた。

「終わったよ……今回も生き延びれた」

樹海化が解けつつあり、目の前が真っ白になりつつあった。

(疲れた。とりあえずしばらく眠るとするか……)

眼を閉じる直前、自分の名前を呼ぶ声が聞こえたが声の主を特定する時間もなく、そのまま意識を失った。

2019年2月下旬、のちに『丸亀城の戦い』と呼ばれる戦いは、勇者側の勝利として記録されることになった。およそ十数万の敵に対して猛々しく戦った6人の勇者は、誰一人として欠けることなく現実世界に戻ってくる事ができた。

樹海化が解けた後、6人の勇者はすぐに城に付属して設置されていた病院に運ばれた。勇者たちが丸亀城を拠点にしていたこともあり、城のすぐ近くには四国でも最新鋭の設備、最精鋭の医師がいる病院が建てられていた。

6人はすぐに集中治療室に入れられ、治療を受けることになった。特に最前線で戦っていた若葉、悠岐、友奈の怪我は重症というレベルではなく、骨折、脱臼、内臓損傷、出血性ショックなど、一般人なら間違いなく死んでいたレベルの怪我だった。しかし、勇者の治癒力と最新鋭の設備による治療のおかげで一命をとりとめたのであった。

しかし、6人の勇者は、精霊の力の行使によって大きく精神的、身体的なダメージを追ってしまっていた。そのため、3月を過ぎ、4月になっても目覚めることはなかった。

しかし、4月の初旬には、伊予島杏、土居球子が目を覚ました。その数日後には郡千景が目を覚ました。

ダメージが大きかった残りの3人も4月の中旬ごろに目覚め、勇者6人は4月中旬に退院することができたのである。

2019年4月下旬

丸亀城には6人の勇者と2人の巫女がいた。6人の勇者は、包帯を巻いてはいたが全員元気であった。眠っている1か月で身体の方は治癒していたからである。

「私って身体に穴開いていたの?」

「バーテックスの矢が右肺と左大腿骨付近を貫通していたって聞いたよ。出血性ショックと酸欠で死にかけていたんだから……」

「若葉ちゃんも悠岐さんも内蔵のいたるところを損傷していて……普通の人なら亡くなっている怪我でした。本当に心配したのですよ」

「よく生きていたな、私……」

千尋やひなたから自分のケガを聞き、悠岐は勇者の治癒力に感謝していた。

他の全員も相当ひどいケガであったが、とりわけ若葉と悠岐、友奈のケガがひどかったようである。

「とりあえず全員が教室で再会するという約束は守ることができたな」

「バーテックスを倒して、8人全員が教室で再会する」

これが若葉達の約束である。

「しばらくバーテックスの襲来はないと神託も下っていますので、ゆっくりできますね」
前回の大規模襲撃で、バーテックスは戦力の大半を使い果たしたらしく、少なくとも3～4月には攻撃が行われることはないらしい。

それに加えて、南西諸島や北方方面で抵抗を続けている人類がいるという情報も入ってきた。諏訪のように通信が取れないため、どのような状況なのかはわからないが良いニュースであった。

「南西諸島、沖繩の方が……」

「北方つていうと北海道とかかな」

若葉と悠岐は、人類が生存している場所を考えていた。

「詳しい場所や規模については神託では示されなかつたのですが、人類が抵抗を続けていることは確かかなようです」

「地球のどこかでは人類がそれなりにまとまって抵抗している地域は、数こそ少ないけど存在しているらしいよ」

ひなたや千尋が授かった神託を言葉信じるなら、地球のどこかでは四国と同様に

バーテックスと戦っている地域が存在しているらしい。

「いつかその人達とも会えたらいいなあ」

「もしかしたら外国人の勇者もいるかもしれません」

友奈と杏がまだ見ぬ勇者たちに想像していた。日本だけでなくどこかほかの国でも抵抗している場所があるかもしれないと考えると、反抗への希望が見えてくる。

「それよりも外に出ていくって本当なのか？」

球子が最近噂になっていた結界外の調査活動の実施について、巫女の二人に聞く。

「はい。あくまで、戦装束が結果以外でも機能することや外の環境がバーテックス襲来以前と変わらなかつた場合に限りですが……」

「おお〜」

ひなたの説明に、若葉や悠岐が感声をあげる。二人は諏訪にはいつか絶対に訪れたいと考えていたため、諏訪に向かうことができ結果外の調査にはかなり乗り気であった。

「四国の防衛は大丈夫なの？」

「確かにそれは心配だ。タマたちがいない間に来られたらどうするんだ」

千景と球子は、勇者が一時的とはいえ、四国から離れることに危機感を覚えていた。

「次の襲撃には相当時間がかかるとの神託を授かっています。ですからここ一か月程度

は大丈夫だと思います」

「神樹様の神託が間違うことはないと思うから、大丈夫だよ」

最も信頼できる巫女の二人が授かった神託が「大丈夫だ」と言っているようなので、四国を離れても大丈夫なのだろうと6人の勇者は判断した。

「それならいろいろと準備をしないとな」

「若葉ちゃん、うどんはおやつに入りますか？」

友奈はさっそく遠足モードに入っていた。

「うむ、うどんは主食ではあるが、おやつとしても使える……」

「タマはおやつではないと思うけどなあ」

5人の勇者はさっそく持つていくもの（うどん）について議論を行っていた。

その輪から外れて、悠岐は教室の外を眺めていた。

（外か……）

千尋と悠岐は四国の外である京都府から避難してきている。友奈も京都府のお隣の奈良県出身であるが、彼女のプライベートな記録が一切残っていないので、実のところ『大社』も『防衛隊』も彼女が何者なのかはつきりとわかってはいない。

結界の外は、悠岐の母親、千尋の両親が眠っている場所である。

「今回の遠征で何か見つけられるといいが……」

二人は肉親の死に一応は折り合いをつけていた。お墓も用意（千尋は実家の墓）してもらったし、年に数回は墓参りに行っている。

ただ、墓の中には何も入っていない。

（せめて遺品だけでも見つけたい……お父さんのために、お母さんのためにも）

悠岐は決意を新たにして、うどんがおやつか否かの議論で白熱している仲間の下に向かった。

結界外へ

2019年4月下旬

「瀬戸大橋か、懐かしいな……」

若葉は瀬戸大橋の主塔を眺めながら感傷に浸っていた。

「若葉ちゃんとひなたちゃんは瀬戸大橋を通って四国に来たんだよね」

「ええ、あの日私たちは修学旅行で島根県に行っていましたから……」

若葉は島根県のある神社で勇者の力に覚醒した。そして、巫女の力に覚醒したひなたの案内で島根と岡山間を多くの避難民と共に無傷で切り抜けたのであった。この功績が大きく報道されたため、若葉は英雄扱いされている。

「この橋が沢山の人の命を救ったんですね」

杏が大橋のケーブルを眺めながら3年前にここを渡って難を逃れた人々のことを思っていた。

橋の終着点に到着すると、若葉が全員に今回の目的を確認する。

「これから私たちは結界外で調査活動を行う」

8人の勇者、巫女は結界の外に遠征に出ている。

5月頃まではバーテックスの侵攻は行われぬという神託が下っており、襲撃が沈静化している間に諏訪地方や、北方方面、南西諸島の人類の生存の可能性が考えられる地域の調査を行えると考えていた。『大社』はこの平穩を、2月の決戦によつてバーテックス側も大打撃を受けたためだと考えていた。

時間的猶予に加えて、結界の外でも勇者の力は変わりなく使えること。外の環境も全く変化していなかつたこと。さらに、四国との遠距離通信を可能にすべく、諏訪との通信で利用していた通信設備を応用した携帯通信機を開発することに成功したこと。以上の理由により、『大社』は結界外の調査を行うことを決断したのであつた。

人類の生存地域の調査だけでなく、地質調査なども行うためかなり多忙な遠征である。

瀬戸大橋の入り口までは結界が展開しているため、岡山県側の橋の終着点から先が結界の外の世界である。

「行くぞ……」

若葉を先頭に少女たちが結界を超えていく。

「……………」

悠岐は、結界の外に出ると空気が変わったのを感じ取つた。それは全員同じで、先ほどまでの和やかな雰囲気は消え去つていた。

高速道路を進んでいくと、瀬戸内工業地域の一角である倉敷市の臨海部の工業地帯が見えてきた。工業地帯は無残な姿になっていた。

さらに臨海部から倉敷の中心市街地へと歩みを進めると美しい街並みは荒廃していた。人の気配は全くしなかった。

人の姿を見つけることができなかったが、パーテックスの姿も見ることにはなかった。そのため、遠征の日程は順調に進んでいた。

事前の計画通り若葉たちは兵庫県へと向かっていった。

暫く移動すると兵庫県の姫路市が見えてくる。姫路市には世界遺産の姫路城がある街である。白鷺城の名前の通り美しい天守閣を持つ城であったが、美しい天守閣は跡形もなく消滅していた。石垣の上に瓦礫が散乱しているだけであった。

「姫路城までも……」

「人類の文明の痕跡は徹底的に破壊しているみたいだな」

姫路市を過ぎると、悠岐と千尋にとって懐かしきすら感じる明石・神戸市に入っていた。

明石海峡大橋は結界に守られているため、その世界一の威容は何ら変わりはなかった。世界一といってもこの世界の大きな橋は、しまなみ海道、瀬戸大橋くらいしか存在していないが。

「懐かしいな……」

「あの時は本当に死ぬかと思ったよね」

巨大な橋を眺めつつ、3年以上前の激闘を思い出していた。あの戦いが若葉との馴れ初めでもあった。

かつて巨大な地震から復興し、おしやれな港町として有名であった神戸市は醜い化物に占拠されていた。

「あれは、バーテックスの卵か……」

「そういえば神戸はこいつらの生産拠点だったな」

3年前の戦いで悠岐と千尋、ひなたと若葉は白い卵殻のようなものを見ていた。しかし他の4人の勇者はこの醜く、バーテックスに滅ぼされた人類の文明の末路を見て、気分を悪くしていた。

「四国を明け渡したらこうなるのですか……」

口元に手を当てながら杏がつぶやく。

「恐らくな。だがそうはさせせんよ。それにいつかこの神戸も取り返して見せる」

「若葉ちゃん、星屑が……」

卵殻から誕生したばかりの星屑の群れが若葉達の方へと向かっている。

「不用意な戦闘は避けましょう。これから長い日程もありますので」

杏の意見には全員が賛成であった。ひなたと千尋の案内に従い、山沿いを移動しながら神戸市を抜け、尼崎、大阪市に入ってしまった。

日本第二位の巨大都市大阪は他の年と同様に荒廃していた。大阪、梅田駅前の高層ビル群はほとんどが瓦礫の山と化していた。

生存者を探すため、大阪駅付近を探索していた杏が日本有数の古書店街の無残な姿に発狂しかけるといったハプニングもあったが、生存者の発見は叶わなかった。

「この辺はJRに私鉄、地下鉄が沢山走っている場所だ。もしかしたら地下街に避難している人がいるかもしれない」

京都から大阪はそれなりに近いため、それなりに大阪駅を利用していた悠岐が地下街の探索を提案する。

他の勇者たちも同様のことを考えていたらしく梅田、大阪の地下迷宮に入っていた。

「これってバリケードだよね……」

千尋が地下街の入り口を見ながら呟く。そこには破壊されているが、明らかに応急でつくられたバリケードのようなものが設置されていた。

地下街に入ると、電気は当然止まっていたため真っ暗であった。ヘッドライトや懐中電灯を利用しながら奥に進んでいく。

「こつちが御堂筋線か……」

地下街にはゴミや寝袋といった明らかに人が生活していた跡が残っていたが『人』は見つけることはできなかった。地下街にもバーテックスは侵入したようで、いたるところで破壊の跡が見られた。

「誰もいないか……」

懐中電灯を持ちつつ進んでいた若葉が小さな声で呟いた。

しばらく地下街を進んでいると、広場のような場所に差し掛かった。

若葉がその場所を手に持っていた懐中電灯を照らすと、そこには無数の白骨が無造作に積まれていた

「う、うええ……」

杏がその場で膝をついて吐いてしまった。他の7人も口を押えたりして吐き気を抑えていた。

「地下に逃げ込んだ人達の行く先がここか……」

「ひど過ぎる……」

「白骨化しているということはかなり前に亡くなった人達ですね……」

そう言っただけでひなたは白骨死体の近くに落ちていたノートを拾い上げた。そのノートは一人の少女が、自身が死ぬまでの日々を綴った日記であった。

日記の中にはバーテックスへの恐怖と絶望、そして同じ人間への恐怖と絶望が綴られていた。

「これがバーテックスに襲われた土地の末路なのね……」

千尋が涙を流しながらノートを読んでいた。

(この状況になってまで人間は争うのをやめなかったのか)

悠岐は地下街で起きた出来事を想像していた。そして、人間の醜い部分をノートに残された言葉から感じ取っていた。

(私に勇者の力が無ければこの少女と同じ運命をたどっていたかもしれない)

勇者の力のせいで悠岐は戦う運命をたどることになった。言い換えれば勇者の力を持っていたからこそ悠岐は生き永らえたのである。

悠岐たちがノートを読み終わった瞬間、地下街に轟音が響き渡った。

「バーテックスが嗅ぎつけてきたか……この地下街はもう誰もいない。脱出する！」

若葉の指示に従い、出口へと向かう。

「地下鉄を通っていけばバーテックスと遭遇しないかも」

「御堂筋線を北上しよう。新大阪方面に向かうぞ」

悠岐と千尋の案内で地下鉄の駅構内に向かい、線路を通りながら新大阪方面へと向かった。破壊された鉄道車両を通り過ぎながらトンネル内を進んでいた。

(あんな惨めに死んでたまるか、死にたくない、死にたくない……)

千景にとって人の「死」を見たのは初めてであった。本土から四国へと地獄の旅路を経験した若葉、ひなた、悠岐、千尋、友奈は旅の道中で人の「死」を嫌というほど見ていた。球子と杏も星屑に襲われた人々を地元で見ている。

しかし、千景の地元にはバーテックスは襲来しなかった。そのため、バーテックスに襲われた土地というものがどのような運命をたどるのかを実感することができていなかった。そして、ノートを持ち主が経験した人間の醜さを千景は追体験した気分になっていた。彼女にとって人間の醜さは身近に存在していたのだから。

(結局、人間は変わらないし変わらない。きつとバーテックスの攻撃にさらされれば四国も……)

(そうなったときに信用できるのは『勇者』の力だけよ……)

千景には地下街の惨状が四国のたどる未来であると感じていた。彼女は他の勇者と違い、人の「悪意」や「醜さ」には人一倍敏感であったためだ。

(私はあんな惨めな死に方は、絶対にしないでやる)

地上に上がると、代り映えしない景色であった。バーテックスの追手を振り切ることはできたようで、このまま淀川を遡上して、京都方面へと向かうことになった。

新大阪駅では、人間の英知の結晶である新幹線が駅も高架橋も車両もズタズタに破壊され、無残な姿をさらしていた。

「悠岐、お母さんは……」

「今の大阪でお母さんの痕跡を探すのは無理だ……すべてを終わらせたならまた来よう」

「そうだね……また来ようね」

「ああ。次はあの化物を殲滅した後だ」

悠岐の本音としては、母親を探したかった。しかし、広大な大阪を探す時間も人手も足りないため、今回は諦めることにしていた。

暫く歩くと、夕方になったため、野営を行うことになった。岡山から大阪までの道中も野営を行っていた。

野営道具は球子と『大社』が準備しており、アウトドアが趣味の球子の知識や経験が役立っていた。

「はあ……」

流石の若葉も気分が落ち込んでいた。若葉だけでなく、ほかの勇者たちも暗い顔をしていた。地下街のことがどうしても目から離れられないのである。

「それにしても大きい川だね。みんなで泳がない？」

暗い空気を打破しようと友奈が夜の淀川を泳ごうと誘ってきた。

「友奈ちゃん、淀川で泳ぐのはさすがに……」

「いや、意外といけるかもしれないな」

「ええ、悠岐……」

「3年前ならありえないけど、今ならいけるんじゃないか？」

お世辞にもきれいとは言えない川であったが、人類の活動が停止して3年以上がたった今なら泳げるかもしれないと悠岐は思っていた。

「風呂にも入れていなかったし、気分転換に泳ごう」

「そうだな、明日は京都に行くわけだし、大阪のことは一旦頭の片隅にしまっておこう」
悠岐と友奈の提案に若葉も乗ってくる。

流石にじめじめした雰囲気嫌気がさしていたのか、球子や杏も乗り気であった。

最終的に友奈達の説得に折れた千景が了承したので、全員が淀川で遊ぶことになった。

「そりゃー!!」

「タマっち先輩、プール感覚で入ると……」

「つ、冷たいぞー」

いくら4月も終わりに近づき、暖かくなっているとはいえ夜の川は非常に冷たかった。

「友奈！そりや〜」

「やったなくお返し！」

「友奈さん、私にもかかっています〜」

この冷水の中でも球子、杏、友奈の3人は水をかけあいながら遊んでいた。

一方の若葉、千景、ひなたは水にゆっくりと浸かっていた。

「球子ちゃんたち、この寒さで水の掛け合いなんてよくできるね……」

「全くだ。冷水の中では極力動かない方がいい」

「そういえば悠岐さんはどこに行ったんでしょうか？」

ひなたが率先して川に入ろうとしていた悠岐を探す。目の届く範囲に彼女の姿はなかった。

「と、いうことは〜千尋のマウンテンを登頂できるというわけだ！」

教室、風呂などで、千尋の巨大なマウンテンの登頂を常に妨害してきた悠岐がないことを目ざとく発見した球子は、手を怪しく動かしながら千尋に迫った。

「させない！」

「ぐえっ!!」

球子の顔に水流が当たり、彼女はそのまま川の水の中に倒れた。

「悠岐さん？」

「待たせたな！」

黒髪の長身の少女が川の岸に全裸で立っていた。先ほどまで姿を見せなかった悠岐であった。手には大きなおもちゃの水鉄砲が握られていた。

「あくなにそれずるいぞ！」

「ここに来る途中のおもちや屋で見つけていたんだ。全員分あるぞ！」

悠岐はそういつて川の岸辺に水鉄砲を置く。

「わく面白そう！」

「タマも参加するぞ！」

さっそく友奈と球子が鉄砲を持ってタンクに水を装填していた。

「あまりはしやぎすぎるなってやめろ！」

3人に注意を促そうとしていた若葉の顔面に球子のはなった水が命中する。

「あははく命中だく」

「たくまくこくく！やったな、お返しだ！」

簡単に挑発に乗った若葉が岸に並べてあった水鉄砲を持ち出し、友奈や球子に打ち始めた。その様子を巫女の二人は微笑ましそうに眺めていた。因みに千景も友奈と水鉄砲で撃ち合いながら楽しんでた。

水鉄砲で遊んでいた6人であったがさすがに体が冷えたのか、少し経つと岸に上がつ

て服を着ていた。そして、球子が熾した焚火に足りながら暖を取っていた。

「うゝ少しはしやぎすぎたな……」

「もつと暖かい時に水遊びはすべきだな」

球子と若葉が焚火にあたりながら話していた。勇者なので風邪は引かないと思うが、体力を思つた以上に使つてしまった。

暫くすると全員眠くなつたこともあり、見張りを交代しながら睡眠をとることになつた。最初は悠岐・友奈の二人であつた。その次の見張りは千景・千尋が担当することになつていた。

全員が寝静まつたことで、あたりは静寂に包まれていた。

「空気がきれいだね」

「昔はこんなきれいでなかったんだけどな」

「確かにこの辺の空気は汚かつたよね」

友奈も奈良県出身であり、悠岐と同じ関西地方の出身であつた。

「結局人類がいなくなつたおかげで地球はきれいになつたのかもしれないな」

「そうかもしれないね」

バーテックスはどこからやってきたのか、何のために人類を殲滅しているのかは分からない。だが、人類にかかわるもの以外には危害を加えていない。本当に「人間」とい

う種族を殲滅するためだけに存在している。

(増えすぎた人類への浄化作用なのかもしれない?)

「悠岐先輩、あんまり細かいことを考えすぎたら身体に毒ですよ」

「あ、ああ。ありがとう」

悠岐が思い詰めているのを見ていた友奈が心配する

「バーテックスのこととかいろいろ考えちゃいますけど、今はこの世界を取り戻すために戦う、みんなを守るために戦う。こういうシンプルな考えでもいいと思います」

「それに『勇者』ってかっこいいじゃないですか？みんなを守るために戦い、そして多くの人を助けることって私たちにしかできないことなんですよ！」

「はは、シンプルだなあ……」

「シンプリイズベストです！」

あの地下街の惨状を見ても、強大な敵にぶつかっても、友奈の心は常に真つすぐであつた。

「それに、私も奈良から四国に避難するときにくさくさんの人が亡くなっていくのを見たくてです」

「家族を、友達を失った人たちの顔を一杯見てきた。それで、自分の目の前で誰かが傷つくこと、つらい思いをするくらいなら私は戦うって決めたの」

「私は戦い続ける。もう二度と誰も悲しまないように……」

友奈は友達のためなら冗談抜きで命を懸けることができる人間だ。友達だけではない、苦しんでいる人、悲しんでいる人のためにすべてを懸けて戦うことができる人間である。

「そうか。なら四国の人達を幸せにしないとな」

「うん、それに、悠岐先輩も千尋先輩も若葉ちゃんもぐんちゃんもタマちゃんもアンちゃんもヒナちゃんもみんなが幸せにならないとだめだよ」

「私もか……ありがとう」

「悠岐先輩にはいつもトレーニングでお世話になっていきますので」

かなり話し込んでいたようで、次の交代の時間が来ていた。

二人は交代の千景とひなたに見張りをバトンパスし、テントに入って寝ることにした。

（友奈、ありがとう）

次の日は、日が昇る前に起きて京都方面に向かった。

京都市内もこれまでの都市と同様に荒廃していた。京都市のシンボルであった京都タワーは土台から横倒しになっていた。さらに京都駅も瓦礫の山と化していた。

「美しい古都の街並みが……」

歴史小説も好きな杏が無残な姿になった京都市を見て嘆く。

「実際はそこまで美しい都市ではないんだけどね……」

実のところ京都市はかなり市街地化が進んでおり、古き良き京都を感じることができない地域は意外と少なかったりする。それでも少し歩けば世界遺産に行けるため歴史好きにはたまらない町であった。

特に興味もなかった悠岐にとつては、冬は寒いし、夏は暑いし、自動車の運転マナーは最悪だったりとお世辞にも住みやすい街とは思えなかった。

「千尋はどうする?」

「私もまた次に来るときにするよ。今は先を急ぐのが先決だよね」

「そうか。また来ような」

バーテックスの襲来は5月以降までは行われないう神託を受けているが、旅程を伸ばすほどの余裕はないもの事実であった。そのため、京都市内の探索もそこそこにして、名古屋方面に向かうことになった。

名古屋も神戸と同様に荒廃し、バーテックスの生産拠点となっていた。歯がゆい思いをしながらも名古屋市内を通り過ぎ、中央道を上って諏訪方面へと一行は進んでいった。

託された思い

若葉たち8人の遠征組は名古屋を通り過ぎ、中央自動車道に沿って長野県諏訪地方へと向かっていった。

長野県を経由して東京へ名古屋間を結ぶ中央自動車道は他の高速道路と同様にズタズタに破壊されていた。道路上に車が放置されていることもあったがすべて破壊されており、人の気配はなかった。

「諏訪の方は大丈夫なのでしょうか」

「わからない。ただ、可能性は限りなく低いだろう」

若葉、悠岐は、諏訪がすでに陥落していると覚悟はしていた。昨年9月に通信が途絶え、それ以降にバーテックスの襲来が本格化した。さらに神託でも壊滅した可能性が高いと告げられており、諏訪は壊滅したものだとして認識していた。

「それでも私は行かなければいけない」

「歌野と約束したからね。『いつか諏訪に来てね』って。平和になった後に来たかったけど……」

若葉と悠岐にとって白鳥歌野は顔も知らない勇者である。通信機越しでしか会話し

たことがない関係であったが、彼女たちにとつては戦友であった。その戦友が守り、愛した場所に行くことだけでも意味があると考えていた。

「諏訪の結末を、私たちは見届ける義務がある」

若葉の言葉に頷きながら勇者たちは歩みを進めていた。

長野に向かい始めてしばらくの時がたち、8人は長野県諏訪市に到着した。

諏訪市には諏訪湖という大きな湖があり、夏では大きな花火大会が、冬では全面結氷した湖の氷上に現れる氷のせり上がり現象、「御神渡り」で有名な湖である。

そして諏訪市を代表する神社が諏訪大社である。

諏訪大社は、上社本宮、前宮と下社春宮、秋宮の4つの社によって構成されている日本有数の知名度を誇る神社である。

諏訪地方の結界はこの4つの社にある4本の御柱から形成されており、『御柱結界』ともいわれていた。

始めはすべての御柱が結界の役割を機能していたが、度重なるバーテックスの襲撃で、3年前には諏訪大社上社本宮が位置する諏訪湖東南部のみが健在であった。

「やはり……ダメだったか」

諏訪の町並みはこれまで8人が通ってきた場所と何ら変わりはなかった。道路は陥

没し、建物は瓦礫の山であった。

諏訪の街を通り過ぎ、本宮の場所に到着すると、そこは目を背ける光景が広がっていた。

「クソツ！」

「とりあえず何かないか探そう」

若葉の指示で本宮内部を探すが、ほとんどの場所が跡形もなく破壊されており、白鳥歌野達の痕跡を探すことはできなかった。

若葉たちは夕方になるまで探索を続けたが生存者はおろか、人間がいた痕跡すら見つからなかった。

仕方がなく本宮から離れようとしたその時、近くを眺めていた若葉の目には大きな焔が映っていた。

「もしかしたら……」

若葉は、歌野は焔仕事をしていたと言っていたのを思い出していた。

焔に到着すると、そこは雑草に覆われていた。半年以上も人の手が入っていなかったから当然である。

「若葉、何かあるぞ！」

「本当か!？」

悠岐が畑の端に何か埋まっているのを目ざとく発見していた。

「ここだ。何か埋めた後みたいだ」

「掘るぞー！」

スコップは持つてなかったので手を使って掘り進めた。少し掘ると少し大きめの箱が見つかった。

急いで箱を開けると、中から一つの鍬と二枚の紙が入っていた。

「これは……」

「鍬に名前が書いてありますね、えくと『白鳥歌野』って書いてあります」

杏が箱の中の鍬の持ち手に書かれた漢字を読んだ。そこには諏訪の勇者の名前が刻まれていた。

「これは歌野の残したメッセージだ」

「勇者の白鳥歌野さんの手紙。それにこっちは巫女の藤森水都さんの手紙みたいです」

「みんなここで戦っていたんだ……」

ひなたと千尋は同じ巫女として勇者を支え戦った水都の手紙を読んでいた。

若葉と悠岐は戦友である歌野の手紙を読んでいた。

手紙には諏訪への思いと人類の希望を若葉達に託したという内容であった。

「これはバトンだ。白鳥さん達から託されたバトンなんだ……」

違う場所で生まれた勇者であっても、声しか知らない関係であっても。間違ひなく白鳥歌野は若葉たちの戦友であった。

「戦友よ、私はあなたのことを忘れない。だから安らかに眠つてくれ。この世界は私たちが奪い返す。それまで見守っていてくれ」

翌日、若葉達はもう一度本宮の調査を行っていた。

「歌野……諏訪の蕎麦を食べる約束、守れなかったな」

悠岐は歌野とラーメン、蕎麦の食べあいを行うことを約束していた。若葉もうどんを食べさせるつもりだった。

「その約束の一部は守れそうだな」

「若葉？」

「これだ」

若葉が見せた袋の中には蕎麦の種やダイコン、キュウリといった野菜の種がしまわれていた。歌野が生前に残したものであった。

「四国で栽培しないとな」

「いつか白鳥印の野菜や蕎麦が四国中で売られるといいですね」

杏が深く考えずに言った言葉であったが、数百年後の未来で実際に売られることになるとは、だれも想像できなかつた。

「少し畑を耕すか……」

歌野達を追悼する意味も込め、彼女が愛した大地をきれいに整えることになった。基本的に体力お化けの若葉、悠岐がいたためそこまで時間はかからなかった。

「バーテックスに囲まれた環境だからしつかりと育たないと思うけど……」

「歌野ちゃんや水都ちゃんの思い出の場所だからね……」

千尋が少し乱雑ではあるが耕された畑に種をまいていた。その後を悠岐がじょうろで水をやっていった。

すべての作業が完了すると、休息をとることになった。

簡易で貼られたテントの中で睡眠をとり、北上するための体力を回復させていた。

1時間ほどが経過したとき、ひなたと千尋が冷や汗をかいて起きたのである。

見張りの為に外で警戒していた悠岐が二人に近寄る。それに気づいて起きたほかの勇者たちも、二人の顔色にただ事ではないと感じていた。

「ひなた、それに千尋さんもどうした、まさか……?」

「千尋?もしかして神託か……?」

若葉と悠岐は、巫女である二人の尋常じやない様子に、何か恐ろしい神託が下つただと考えていた。その予想は的中しており、二人の口から恐れていた言葉が発せられた。

―再び四国に危機が訪れる―

「危機つてバーテックスの侵攻が再開されるってことですか？」

「恐らくは。それもこれまで以上の攻撃が予想されます」

「これまで以上つて、うそでしょ……」

ひなたの言葉に千景が言葉を失う。千景だけではない、勇者の全員が言葉を失っていた。

2月の決戦で、6人全員が負傷し、悠岐や若葉に至っては死にかけていた。そこまでの代償を支払ってやっと倒したバーテックスが、わずか数か月で戦力を回復し、攻撃を仕掛けてくるのである。

「戻るしかないだろうな……」

若葉の言葉に全員が頷く。

(できれば北方にも行きたかったが、四国の防衛が優先か……)

悠岐も北方の生存者たちのことが気になっていたが、四国の危機の前にはどうすることもできなかつた。

「仕方がない、遠征はここで終了だ。『大社』に連絡後、すぐに四国へと引き返す」

「了解です」

若葉の決定によって、結界外の探索は終了となった。

中央自動車道を名古屋方面に下って最中、千尋は悠岐に背負われていた。

「会いたかったね。北で戦っている勇者さんと」

「そうだな。何人いるのかは分からないけど、孤軍奮闘しているのだろう」

千尋は北の方角を見て、バーテックスと戦い、多くの人々を守っている勇者を思っていた。

「会うためにも、一番力が残っている四国を守り通さなければな」

「そうだね」

（私たちは四国を守り通すので精いっぱいだ。それに敵の、バーテックスの数に限りは存在するのか？それとも……）

2月の戦いでは十数万、そして次はそれ以上の敵が四国へとやってくる。

（次の戦いを乗り越えても、その次があるだろう……）

そしてバーテックスは進化し続けていた。前回の超大型のバーテックスは、未完成だったからこそ6人の力で倒すことができた。

（進化体を超えた進化体、あれが完成した状態で四国に来たら……）

精霊の力を使っても倒せないかもしれない。

だが、悠岐たちにとって敗北は「死」でもあった。バーテックスの侵入を許してしま

えば四国は、あの地下街のような悲劇に襲われるだろう。それは何としても避けなければならなかった。

(悲觀的になつてはいけない……私が弱音を吐けばみんな不安になつてしまう。前を向かなければ)

「歸つたら、若葉と模擬戦をしないとな」

「そういえば悠岐と友奈ちゃんはまだ戦つていなかったね」

悠岐は悲觀的になつていた思考を停止し、千尋と歸つたら何をするかを話すことにした。2月の戦いの前に行いそびれていた模擬戦の続きを行いたいと思つており、歸つたら行おうという話になつた。

数日後、悠岐達は明石海峡大橋を通過して結界内に歸つてきた。

帰還

2019年5月中旬

二人の巫女に下った神託の内容は、パーテックスの侵攻が再開されるという内容であった。

そのため、勇者たちは、急遽遠征を取りやめて四国へと帰還したのであった。

帰還後は『大社』へ今回の遠征の報告を行うなど、多忙な日々を過ごしていた。

帰還後、『大社』は勇者たちの遠征の結果を四国中に報道していた。

「なくが~~区~~諏訪地区は無事~~区~~だよ。胸糞悪い」

「『大本営発表』ってやつだよ。私たちは70年前と何一つ変わっていないね。」

球子はどうんがまずくなると言いながらテレビのニュースを見ていた。悠岐も70年前に日本が行った情報統制と同じやり方だと思った。情報統制は必要であると悠岐は考えていたが、無理やりにも明るいニュースを報道しないと四国の人々に希望を与えられないレベルまで達していることに危機感を覚えていた。

(もし私たちが敗北したら、四国は恐慌状態に陥るだろうな。そしてその結末は……)

人間同士で争った場合の末路は、今回行った遠征で見えていた。

「(バ)馳走様」

遠征後で一番変わった勇者は郡千景であった。ツンツンしているところは変わっていないが、話しかけにくいオーラが出ていることに気づいている人は気づいていた。

「(ゴ)ちそうさん!」

球子が汁を飲み干すと同時に立ち上がり、食器を片付ける。

「あんず、少し急いだほうがいいぞ」

「タマっち先輩。一応午後の授業は休むのでそこまで急ぐ必要はないですよ」

「あれ? そうだったっけ?」

「もう、ちゃんと人の話を聞いてください」

二人は午後の授業を休んで病院に行くと言っていた。2月の戦いのダメージを調査するためである。他の4人の勇者も病院で診察を受けていたのであった。検査結果は問題なしであった。

(たぶん二人も異常はないだろう)

それよりも悠岐が気がかりなのが千景であった。遠征後、詳しく言えば大阪を出たあたりから様子がおかしいように感じたのである。

(後で聞いてみるか……)

この時、千景の様子がおかしいと気づいていたのは悠岐だけではなかった。彼女の親

友である友奈も彼女の異常に気付いていた。他にも勇者の状態を把握するように努めていたひなた、千尋の巫女コンビも気づいていた。

午後の授業の後、亀城の広場で、一人の少女が大鎌を振っていた。

勇者の郡千景であった。彼女が訓練をしていると、後ろから赤い髪がトレードマークの高嶋友奈が静かに近づいていた。

「ぐんちゃん！だ〜れだ」

友奈は千景の眼を手でかくし、ベタなことをやっていた。

「高嶋さん、私を騙したいのであれば、せめて私の呼び方を変えるくらいはして

……」

「あつ、忘れてた……」

「もう……」

二人がいちやついていると、城の角から二本の缶ジュースを持った悠岐が現れた。

「千景、一緒に一杯どうだ？つて友奈？」

「あれ、悠岐先輩？」

突然の悠岐の登場に二人が困惑していると、城の入り口から二人の少女が出てきた。

「千景ちゃん、ちよつとお話ししよう」

「千景さん。少しお時間よろしいでしょうか？」

千尋とひなたの巫女コンビであった。

「千尋にひなた？何でここに？」

「千尋さんにヒナちゃん？悠岐さんが呼んだんですか？」

「私は呼んでいないぞ？」

「私たちも千景さんに御用があつてきたのですが……」

友奈、悠岐、千尋とひなたの目的は不明だったが、一つ共通点があつた。

「もしかして私に用？」

「「「うん（はい）」」」

「……ここだと長話はできないし、場所を移しましょう」

「でしたら喫茶店はいかがですか？」

ひなたが提案する。勇者たちにとって喫茶店とは、丸亀場内に設置された職員専用の店である。夜にはバーになるらしく、大社の職員がよく利用している店であつた。

「いいね。どうせなら貸し切りにしよう」

「私も賛成かな、ぐんちゃんは？」

「まあ、別に構わないわ」

千尋も友奈、千景も賛成のようである。

「そういうえば若葉はどうする?」

「若葉ちゃんは少し所用があるみたいで、今は城にいません。残念ですが……」

球子と杏は病院から帰っていないので誘うことはできない。ならば若葉と思つたが彼女は別件で用があるようだった。どうも『大社』に遠征の事でいろいろと聞かれてい
るらしい。

5人は喫茶店に移り相談会という名の女子会が始まつた。

ひなたは緑茶、千尋はコーヒー、友奈はコーラを注文していた。

「ぐんちゃんと悠岐先輩はどうします?」

「ああ、私たちはこれを飲むぞ」

「そうね。だいたい二人で遊ぶときはこれを飲むわね」

そういつて二人のコップに注がれたのは黒っぽい液体であつた。

「ドクターペッパーだ」

二人の愛用の飲み物である。何とも言えない味と微妙な知名度が特徴の清涼飲料水であるが、悠岐は普通に好きで京都にいる頃から買い置きして飲んでた。千景は、厨二病をこじらせていた時に愛飲していたらしく、今でもその時の名残で飲んでいる。

「へ〜コーラっぽいけど違うんだね。ぐんちゃん、もらつていい?」

「いいわよ。高嶋さんも好きになれるはずよ」

友奈はそう言い、コップに注ぎきれなかった缶の残りを味見する。

「うーん、微妙な味……」

渋い顔をして、自分の注文したコーラを飲み干す。千尋も悠岐に飲まされた経験があるのか、友奈に「美味しくないよね」とひどいことをいう。

「まあ、万人受けするものではないからな……」

5人がコップの飲み物を半分ほど飲み、世間話で場を暖まったため、悠岐たちは本題に入ることにした。

「それで、何があつたんだ？」

「え？それって……」

『『大社』の人間にはわからないだろうけど、私たちには隠せてないぞ……』

悠岐は、千景に火の玉ストレートの如く、単刀直入に彼女の様子がおかしくなっている原因を聞いた。

「千景さんの様子が遠征から帰って来てから少し変わったことです」

「正確に言うと、大阪を出たあたりからだけだな」

「それは……」

ひなたと悠岐が千景に不調の原因を聞いていた。

「個人的なことよ。高嶋さん達に迷惑は掛けられないわ」

「ぐんちゃん……」

（しまったなあ……これは少し急過ぎた）

4人で相談に乗るといふ形は、場合によっては詰問ととらえてしまう可能性もあった。

「まあ何かあったら個別で相談してくれ。ひなた、千尋行くぞ」

「え？でも……」

「そうですね。私たちはお暇しましょう」

悠岐とひなたが千尋を連れて喫茶店から出ていく。その時、一枚の紙を千景にわからないように友奈のポケットに入れていた。

「千景ちゃん、大丈夫なの？」

「千景は基本的に友奈にしか心を開いていない。それなのに4人で一気に話しかけたら逆に心の扉は閉まられてしまうよ」

「そうですね。ここは千景さんは一番信頼している友奈さんに任せるべきですね」

「残念だけど、私たちは彼女の信頼を心から得ていないらしいな」

悠岐が千景とよく交流をしていた理由の一つに、彼女の信頼を勝ち取るためであった。1年ほどかけてゲームをしたり、世間話をする程度には仲良くなったが、心の悩みを打ち明けるほどの信頼を得ることはできなかった。もちろん悠岐は千景を可愛い後

輩だと思っており、100パーセント打算的な気持ちであったわけではない。

(まあ、友奈に打算的な感情はないからな)

悠岐は千景の複雑な事情を知っている。そのため、千景は悠岐の持つてしまう同情心を敏感に感じ取っているのかもしれない。

悠岐はどうしても千景を庇護の対象として見てしまっているのである。

千景の親友である友奈は、彼女が苦しそうな顔をしているのを見るのが本当につらかった。

「ぐんちゃん。最近苦しそうな顔をする時があるけど、どうしたの?」

「高嶋さん……」

「大丈夫。私はぐんちゃんの味方だよ?」

友奈が震える千景の手の上に、自分の掌を乗せる。

「高嶋さん……私は怖い」

「怖い?」

「勇者の力があれば、何でもできると思っていた。名声も、評価も、愛情もなんでも手に入ると思っていた。だけどね、勇者でもどうにもならないことってあるのよ……」

「諏訪の勇者はバーテックスに殺された」

「私たちが2月にあんな思いをしながら戦ったのに、敵はもつと強力になって四国にやってくる」

「この戦いに終わりなんてないのよ！」

「私たちは戦い続ける。そう、死ぬまで……」

「高嶋さんだつてそう思うでしょ？」

「それは……」

「私は嫌だ！死にたくない、殺されたくない。あんな惨めに死ぬのは嫌だよ……」

今まで貯めていたものがあふれ出たように泣き始める。

「うっ、ああああ……私は、私は……」

しゃくりあげながら涙をこぼし、「死にたくない」と呟き続けていた。

友奈はそんな千景の頭をなでながら、彼女が落ち着くのを待つていた。

暫くすると千景は落ち着き、呼吸も元に戻っていた。

「ぐんちゃん。私がぐんちゃんを守るよ」

「高嶋、さん？」

「もしぐんちゃんが怖いなら、戦わなくてもいい。私は、私たちはぐんちゃんを責めない

よ」

「でも、私は高嶋さんを守るって決めたのに。それなのに死にたくないの。戦いが怖い

の！」

「大丈夫。私がぐんちゃんを守るから。だから安心して」

「高嶋さんは怖くないの？」

「私だつて怖いよ。でも誰かが、勇者のみんなが、ぐんちゃんが……。苦しんでいる顔を見ていたら恐怖なんて吹き飛んじやうよ」

「高嶋さんは強いよね……」

「だから、安心して！絶対に守るから」

「信じていい？約束よ？」

「うん！じゃあ指切りね〜！」

二人は指を合わせ、『約束』の儀式を行う。

「高嶋さん……」

「涙を拭いて。ぐんちゃんに泣き顔は似合わないよ」

友奈は千景の涙をハンカチで拭った。

夕焼けに染まる丸亀城の天守閣の頂上に悠岐は座っていた。

「せんぱい！」

「友奈。昼はいろいろありがとう」

「いえいえ〜」

「ほら、飲むといいぞ」

悠岐が友奈に差し出したのはドクターペッパーであった。

友奈は笑顔でそれを受け取ると、プルタブを開けることなく、制服のポケットに入れた。

「それで、千景はどうだった」

「梅田の地下街のことや白鳥さんの事でかなりまいっちゃてるのかな？」

悠岐が友奈に渡した紙には、場所と時間がかかれていた。悠岐が、ここで今日の話の内容を聞きたかったからである。

千景の悩みは「死にたくない」という生存欲求に基づいた、きわめて人間らしい悩みであった。

「そうか……」

「うん」

「なら千景を守らないとな」

「約束したもんね。約束は守らなきゃ！」

二人は千景を守る同盟を結んだ。

(友奈に何かあったら千景は壊れてしまうだろう……そうならないためにも、私が友奈を守らなければ……)

悠岐は、千景の友奈への依存度が上がり、いつか破局を迎えてしまうことを危惧していた。

友奈はただでさえ、他人の為に自分を軽視しがちである。それが仲間の勇者の為になれば、命すらかけてしまう可能性がある。

「友奈と千景を守りながら戦わないとな。いや、若葉やタマ、杏もだ」
(それに千尋を残して私は死ねないしな)

そう考え、悠岐は夜のトレーニングに繰り出した。

バーテックスの襲来はすぐに訪れた。

山田悠岐の章 閑話

閑話 みんなでソフトボール! 1

「暇だな」

「結界外の調査報告も終わったしね」

机に突っ伏して嘆く球子を悠岐がフォローする。

諏訪地方で二人の巫女が授かった神託によると、四国に再び危機が訪れるらしい。しかし、急いで四国に帰ってきてても、バーテックスはなかなか襲来しなかった。結界の外を監視している部隊からも2月のように大量のバーテックスが集結しているような情報は伝えられていない。

来る決戦の日まで勇者たちには待機命令が下されており、丸亀城で暇な日々を過ごしていた。あまり激しい鍛錬を行わずにはいけないため、軽い鍛錬だけで過ごしていた。

「鍛錬をしたい。身体を動かしていないとストレスが溜まってしまつて……」

悠岐や千尋は、若葉はマグロの生まれ変わりなのだろうかと思っていた。

「それなら少しレクリエーションでもやるか」

悠岐が机から立ち上がり、全員に提案した。

「レクリエーション、ですか？」

「そうだ」

杏の疑問に悠岐は答えた。

「ソフトボール大会を開くぞ！」

「……ソフトボール？」

悠岐以外の勇者の頭にクエスチョンマークが浮かんでいた。

「やっぱりね」

そんな様子を千尋は笑いながら見ていた。

翌日、貸し切りバスに乗って高松市にきた勇者一行は本格的な野球場を見て、歓声を上げていた。

「すごい！これって貸し切り？」

「本格的な球場ね」

友奈と千景が思っていた以上に本格的であつた球場に驚いていた。

「そうだぞ。ここはプロ野球の公式戦も昔は行われていたぐらいだしな」

香川県営野球場に悠岐たちは来ていた。そして、球場はソフトボール用に改造されて

いた。

本塁から外野フェンスまではソフトボール（女子）では、220フィートである。そのため、臨時で外野フェンスが設置されていた。また塁間やマウンドの距離も野球とは異なるため、そのあたりも改造されていた。

「これを一日で?」

「やっぱり『大社』の権力って強いよね〜」

一日で野球場がソフトボール場に改造されたことに驚く若葉に、千尋が『大社』の力を使ったと伝える。

「全員分のユニフォームと道具も用意したぞ」

悠岐と千尋はそう言って全員を更衣室に案内した。

急に決定したソフトボール大会のくせに、妙に準備が良かった。

（いつかやると思って密かに準備していたんだよね）

悠岐は、皆でいつかソフトボールをやるために全員分のユニフォームを作っていた。

チーム名は『大社』である。そして……

「悠岐だけユニフォームが違うぞ?」

球子が悠岐の来ているユニフォームの色が違うことに気づいた。

「今回、私は敵側だ」

「え？悠岐さん、それって……」

「今回の試合は『大社』と『防衛隊』のメンバーで試合をすることになった」

悠岐は二つのチームを用意した。

一つは『大社』。これは若葉達5人の勇者と、『大社』でソフトボール経験者や、運動神経のいい職員を捕まえてきて構成したチームである。

もう一つは『防衛隊』。経験者の悠岐と、『防衛隊』の中で経験者の職員を捕まえて構成したチームである。

一見すると勇者が多い『大社』チームが有利に見えるが、『防衛隊』の中には日本代表に選出された人を含め、全員経験者であったため、チームバランスはとれていた。

「ソフトは授業でやったぐらいかな……」

「二応、ルールは昨日のうちに覚えていたけど……」

杏と千景は不安そうにグローブとボールを眺めていた。しかし友奈と若葉、球子はバットを持って興奮していた。

「鍛えた腕を発揮する時が来たか」

「先輩はいつかやると思っていたからね。ホームラン打ちたいな」

二人は悠岐との鍛練の時にたびたびソフトボールの話聞いていた。そのため、いつか試合をやると予想しており、密かにソフトの実力を磨いていた。

「タマは小さいころにソフトはやったことがあるからな。それなりにうまいぞ! 杏、教えてやんよ」

「タマっち先輩は確かに似合いそうですね」

球子は小学生の頃に少しだけ、経験していたらしい。遊びを優先したため長続きはしなかったが、運動神経がいいのでセンスはあるらしい。

暫くキャッチボールやノックを行い、チームプレイの練習をして、試合開始となった。試合は7回まで、8回以降はタイブレーカーが適応され、ルールが面倒なものと、投手の若葉が打撃もしたいというので、DPは適応せず、プロ野球のセ・リーグ方式で試合は行われることになった。

急増チームではあったが、全員が中々の实力を見せており、チームとして試合ができてレベルにはなっていた。そもそも勇者たちは神樹様の加護によつて運動神経がかなり良くなっている。一番悪い伊予島杏でさえも、一般的な基準で見ればかなり運動神経は高い方である。センスの塊のような人間なので、ソフトボールも短時間の練習で、かなり上達していた。

「う〜ん。やつぱり勇者つてチートだな」

悠岐はすぐに上達する勇者の面々を見て呟く。おそらくソフトボールだけではなく、サッカーやテニスといったほかの球技でもすぐに上達してしまうのだろうと思ってい

た。

神樹様の加護は凄いのである。

「さて、向こうは素人5人がいると思つたら大間違いだ。日本代表選手レベルの潜在能力があると思つた方がいいぞ。始めは実戦になれていないと思うが、慣れ始めたらかなり上手くなるはずだ。その前に得点を取っていくぞ！」

「オオー——!!」

悠岐の言葉の後に掛け声を上げる。

一方の『大社』チームも円陣を組んでいた。

「警戒すべきはやはり悠岐さんだ。みんなも知っているとと思うが、あの人は身体能力だけなら私たちの中でも最強だ。それに経験者でもある。あとは投手の人も日本代表選抜に選ばれるぐらい凄い選手だったらしい。最初は打てないかもしれないけど、しっかりと対応していこう。行くぞ！」

こちらも若葉の言葉の後に掛け声を上げていた。

「オオー——!!」

主審の声と共に、内野に一列に並び、始まりのあいさつをして、試合が開始された。攻撃は『大社』チームから始まった。

『大社』のスターティングラインナップは以下の通りである。

- 一番 土居球子(二)
- 二番 大社職員A(一)
- 三番 郡千景(三)
- 四番 乃木若葉(投)
- 五番 高嶋友奈(捕)
- 六番 伊予島杏(中)
- 七番 大社職員B(右)
- 八番 大社職員C(遊)
- 九番 大社職員D(左)

足の速い球子を一番にして、一番ソフトボールがうまい大社職員のAが二番を打ち、運動神経が高い千景、若葉、友奈をクリーンナップに置いた攻撃的な打順であった。グラウンドでは、既にボール回しも投球練習も終わっていた。

『一番、セカンド。土居球子』

「ハイ。」

右のバッターボックスに立った球子はバットを構えると、『防衛隊』チームの投手の第一球目を待った。

警戒すべき悠岐は、センターにいた。

球子はセンター方向には飛ばさないように気を付けていた。実力は未知数だが、少なくとも肩は強いことは枕投げで嫌というほど思い知ったからである。

バッテリーはサインの交換を行い、相手の投手は腕を風車のように大きく一回転をして一球目を放った。ウインドミルという最もポピュラーなソフトボールの投法によって放たれた一球目は、外角に外れたボール球であった。

(85キロか……)

ソフトボールは野球よりも本塁からマウンドの距離が短い。そのため、球速以上にスピードを感じるのである。

二球目はバウンドするボールであり、球子はバットを振らなかつた。

続く三球目は、外角高めの速球であった。タイミングよく球子はバットを振ったが、ボールの下を振ってしまい、空振りとなった。

(結構早い……)

テイクバックの動作を入れず、コンパクトにスイングをした4球目はバットの下の部分にあたり、ポテポテのゴロとなった。ゴロはセカンド方向に転がっていき、二塁手がキャッチし、そのまま一塁に転送され、アウトとなった。

凡退した球子がヘルメットを脱いでベンチに戻ると、後続のバッターの若葉、友奈、杏

が話しかけてくる。

「タマっち先輩。どうでした?」

「結構ストレートは速く感じるぞ。変化球は投げさすことができなかつたな……」

「そうか……お?」

若葉が感想を聞こうとしたとき、2番の大社の職員がボールを前に飛ばしていた。打った球は3球目に投げたチェンジアップであった。うまくタイミングを合わせたように、レフト方向にボールが転がっていた。

「やっぱり経験者は凄いな……」

「次はぐんちゃん番だね!ぐんちゃんー!かつとばせ〜!」

友奈の黄色い声援が千景の下に届く。活躍しているとところを見せようと張り切り無駄に大降りになった千景はあつけなくドロップボールなどの変化球の前に三振しまった。

「情けない……」

「まだ次があるよ〜」

2アウト出迎えた4番の若葉は、右打席に入り、バットを構えた。

(相手は90kmちよつとのストレートと、チェンジアップ、ドロップか)

1球目、2球目とストレートが投げられ、あつという間に2ストライクに追い込まれ

ていた。そして第三球目に投げられたチェンジアップは外角に外れたため、ボールになつた。

四球目に投げられたボールに、若葉は反応していた。

(ストリート！)

ストリートだと思つて振つたバットにボールが当たる。しかし芯には当たらず、少し外れた部分ボールは当たつた。

鈍い衝撃が若葉の手を襲つた。

(あれ？変化した？)

鋭いゴロとなつたボールはショートに飛んでいき、若葉は一塁まで間に合わず、アウトとなつた。

3アウトとなつたため、攻守交代となる。

「おかしいな？確かに芯を捉えたはずなんだが……」

若葉は手の感触を確かめながらマウンドへと向かつていった。

「和田さん。あれつてシュートですよね？」

「私の秘密兵器だよ。乃木ちゃんは最初から本気でいかないと撃たれそうな気がしたから使っちゃつた」

投手の和田葵は防衛隊の『巫女』の和田渚の姉である。彼女はソフトボールの日本代表選手であった。

バーテックス襲来の日は、実家がある香川にいたため、難を逃れることができた。その後、妹の渚ともども『巫女』になり、防衛隊に所属することになった。

年齢は21歳と『巫女』の中でも最年長である。うら若き少女である。誰が何と言おうと少女である。

「シュート、どちらかといえどツーンに近い感じがしたが……。普通は打てませんよ……」

苦笑しながら悠岐が葵に話しかけるが、葵は真顔であった。

「いや、勇者の娘たちは慣れれば打ってくるね。配球を考えた方がいいかも。それに『大社』所属の娘たちもかなりの実力者だよ」

そう言つてキャッチャーの方に向かつていった。

「悠岐くお疲れ様」

「まだ何もやってないよ……」

「それでもだよ」

千尋が悠岐にタオルを渡して話しかけてくる。

千尋も一応は経験者であったが、運動神経がアレなので辞退していた。そのため、マ

ネージャーとしてチームに貢献していた。

「若葉ちゃんたち、相当強いね」

「杏もあれで一般基準で考えれば運動神経はいい方だからなあ……」

特に警戒すべきは若葉と友奈である。どうも彼女たちは、悠岐がソフトボールで挑んでくることを想定して、ソフトボールの訓練をしていたらしい。

『大社』チームが3アウトになり、1回の表の攻撃が終了した。そして1回の裏の攻撃が始まった。

悠岐は3番バッターとしてスタメン出場をしていた。

「若葉がピッチャーか、どんな球を投げるのかな？」

「若葉ちゃんだから結構すごいかも……」

若葉が先頭打者に1球目を放った。

「はやっ!!」

スピードガンには100キロと表示されていた。女子ソフトボールの代表レベルの速球であった。

「勇者つてすごいね……」

千尋の言葉にベンチ内の全員がうなづく。

1番バッターは、高校までソフト経験者であったが、100キロ越えの速球をとらえ

ることができず、三振して帰ってきた。

続く二番バッターも掠ることもできず、三振でアウトとなった。

悠岐は若葉のモーションなどを観察して、タイムイングを計っていた。

『3番、センター、山田悠岐さん』

審判に礼をし、左打席に入ってバットを構える。野球と違ってソフトボールでは大きな「ため」を作る打法は一般的ではない。モ悠岐も基本的にはノーステップの打法であつた。

「悠岐がんばれー!!」

千尋の黄色い声援やチームメイトの声援が悠岐の耳に入ってくる。

相手チームの顔つきも一層険しくなり、若葉も眉間に皺を寄せてキャッチャーの友奈と配給を確認していた。

ピッチングモーションはオーソドックスなウインドミルであつたが、そこから放たれる速球に前の打者は苦戦していた。

悠岐への1球目は外角高めの104キロのストレートだった。ストライクゾーンから外れており、ボールとなった。2球目は内角低めに放たれ、悠岐はこれを見送り、ストライクとなった。

(思ったよりも早い。だけど……)

3 球目の外角の速球に反応し、フルスイングでバットを振りぬいた。
「え!？」

3 塁側のスタンドに設置された金網にボールが当たり、ガシャンという音が球場に響き渡った。

「ファ、ファール!」

あまりの打球速度に、サードの千景が反応しきれなかった。

(ちよつと振り遅れたか……)

この打球を見て、若葉と友奈のバッテリーは、サインを慎重に交換していた。

(多分次にストレートを投げたら打たれる。なら……)

友奈のサインに若葉がうなずき、4球目は投げた。

(これは!!)

全く同じフォームで投げられたボールはチェンジアップであった。ストレートに目が慣れた悠岐はタイミングを外され、態勢を崩された。

しかし態勢を崩されながらも、バットを振りぬき、ボールをはじき返した。

高く舞い上がった打球は、レフトのフェンスギリギリまで飛んだ。かなり高い弾道でボールが上がったため、だれもがレフトフライだと思っていた。しかし、予想以上にボールは伸びていき、そのままフェンスを越えてホームランとなった。

「ホームランだ〜!」

ベンチが一気に盛り上がり、歓声が上がる。

(あの態勢でもしつかりとバットを振り切れていたからな……空振りか芯を外さない
と抑えるのは難しそうだ)

若葉と友奈は、悠岐の想定以上の能力の高さに驚くと同時に、次は抑えるぞという気
持ちであふれていた。

バッターボックスからベンチに戻る途中、葵から声を掛けられる。

「おめでとう!よくチェンジアップを打てたね」

「あと少しタイミングが悪かったら空振りか打ち取られていましたよ……」

「若葉ちゃんみたいな選手がいれば日本も安泰だろうなあ」

「もう日本以外の国はないですけどね……」

(大会ができたとしてもせいぜい県選抜レベルの大会だけだろうな)

センターのポジションに戻り、守備に集中し始めた。

2回、3回は、両投手が好投し、ノーヒットで回が進んでいった。剛速球とタイミン
グを外すチェンジアップで三振の山を築く若葉と、多彩な変化球で打ち取っていく葵の
投手戦となっていた。

4回の表の攻撃では、千景が打ちあぐねていたドロップをうまくセンターにはじき返し、シングルヒットとなった。

「ぐんちやぐん!!」

友奈からの黄色い声援を受けた千景は、一塁ベースの上でガッツポーズをして格好つけていた。

『4番、ピッチャー。乃木若葉さん』

名前が呼ばれ、右打席に若葉が入る。

(おそらく私が打ち取られたボールは変化球だ。芯を外すボールだな)

野球と違ってソフトボールで実戦レベルのツーシームを投げることができる選手は少ない。ストレートが90キロそこそこしか出ない和田葵が日本代表に選ばれた理由は、キレのあるツーシームやライズボールなど、一流の変化球を投げることができるからである。

(そのボールを打つ!)

若葉は負けず嫌いである。第一打席で自分を打ち取ったボールを打ち返すことでやっと借りを返せると考えていた。

「1、2、3」

1球目は外角高めのライズボールであった。明らかなボール球であったため、若葉は

バットを振ることはなかった。

続く2球目はカットボールであった。

(これは!)

若葉は、自分の体に向かって投げられたと錯覚したが、キャッチャーミットにはボールが入っていた。

「ストライク!」

(フロントドア! えっぐいボール投げるなあ……)

外野から葵の投球を見ていた悠岐は、彼女が本気で若葉と勝負していると確信していた。

フロントドアとは、右投げ投手が、右打者側のボールゾーンにカットボール系の変化球を投げ、内側に曲げてストライクを取る投球術である。右打者にとっては、「死球」を覚悟させられる球であり、プロでも腰が引けてしまう場合が多いボールである。

3球目は、ストライクゾーンから外角に曲がるカットボールであったが、若葉はこれを見逃した。ボールとなり、1ストライク、2ボールとなった。

4球目はタイミングが合わずファールになり、5球目はバウンドボールだったためこれを見送り、フルカウントとなった。

そして6球目は、2球目と同じフロントドアのカットボールであった。

(絶好球！)

若葉はひざ元の内角低めのカットボールを掬い上げるように打った。芯をとらえたボールは強烈なバックスピンがかかっており、高い弾道でレフト方向に飛翔していった。

ボールはそのままフェンスを越え、その向こうのレフトポールに直撃し、スタンドインした。

「ホームランだ!!」

「若葉ちゃん！さすがですー!」

『大社』チームのベンチが一気に沸き立ち、ダイヤモンドを一周して、ホームインした若葉を歓声で迎えた。

若葉のホームランにベンチ沸立っていたが、5番バッターの友奈も気持ちが高ぶっていた。

(ぐんちゃん、それに若葉ちゃんも活躍している。私も続かなきゃ!)

友奈は、初球の外角のストライクゾーン外からストライクゾーンに変化するバックドアのボールに反応した。友奈は、コンパクトにスイングしていたつもりであったが、芯をとらえたボールは、逆方向のライトに向かって飛んで行った。

これも柵越えのホームランであった。

後続の伊予島杏はセンターフライに打ち取ったものの、これもあわやホームランのボールであった。

攻守交替で、ベンチに悠岐が戻ると、葵とキャッチャーが話し合っていた。

「正直あのボールが打たれるとなると、投げる球がないなあ……」

「和田さん以外に乃木さんや高嶋さんを抑えることができそうな投手はいないものね……」

ちなみにキャッチャーも大学生までソフトボールを経験している人であった。普段は香川県警で働く警察官のお姉さんである。

「悠岐がやれば？ 確か投手もやったことあるよね？」

千尋が悠岐に聞く。

「小学校の時に何回か投げたことはあるけど、コントロールが悪いって言われて首になった」

球の速度は速いんだけどねえ……と言って頭を掻く。

結局、ほかに勇者のメンツを抑えることができそうな投手がないため、続投となった。

「私が打ちますので、安心してください！」

「私も頑張ります！」

ほかのチームメイトもバットを持って声を上げる。素人の若葉に悠岐以外ノーヒットであることが、経験者たちの心に火をつけていたのである。

4回の裏の攻撃は、悠岐の前のバッターが粘り続け、何とかフォアボールで出塁をした。

「さて、今度はバックスクリーンに叩き込みますか！」

そういつて左打席に入っていたのである。